長岡京市文化財調査報告書

第 22 冊

1989

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 22 冊

1989

長岡京市教育委員会

1　乙訓寺周辺航空写真（1979年撮影　南から）

2　緑色凝灰岩製車輪石

1　今里大塚古墳周辺航空写真（1979年撮影　南から）

2　今里大塚古墳および調査地全景（北西から）

序　　文

ことしは、昭和天皇が崩御され、年号も「昭和」から「平成」に改まり新たな時代を創造する第一歩が踏み出されました。

長岡京市においては、保存に向け鋭意努力してきた長法寺七ツ塚古墳３・４号墳がその努力の甲斐もなく保存を図ることができませんでした。しかし、その中で土地所有者のご理解により５号墳が保存できたことはせめてもの救いであり、今後市内の遺跡の保護対策を早期に策定し、計画的に保護していく必要性をあらためて痛感した次第であります。

一方、発掘調査業務といたしましては勝龍寺城公園の整備に伴い、昭和63年５月から調査を開始し、北門や多聞櫓などの発見により近世に移行する間際の城として全国的に注目されています。これらの成果に基づき、来年度から整備工事が開始されます。

ここに刊行いたします報告書は、昭和63年度中に教育委員会が国庫補助事業として実施しました調査成果をまとめたものであります。その内容といたしまして、長岡京跡、祭ノ神遺跡、今里大塚古墳などに関するものであります。

これらの成果が本市の歴史を解明する上で貴重な資料となるとともに市民の歴史学習資料として広く活用していただけることを期待しています。

最後に、調査にあたって種々のご指導をいただいた諸先生方並びに関係行政機関、また発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々に、紙上をお借りし、厚くお礼申し上げる次第でございます。

平成元年３月

長岡京市教育委員会

教育長　中小路　脩

凡　　例

1．本冊は、昭和63年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほかの発掘調査の概要報告である。

2．上記の調査地は付表－1のとおりである。その位置は第1図に示した。

3．長岡京跡の調査の次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』昭和52年）による小字名をもとにした地区割に従った。

4．長岡京内の条坊名は、山中章他「第 126図長岡京条坊図」（向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集　1982年）による呼称に従った。

5．各調査報告の執筆者は、各章のはじめに記した。

6．本書の編集は長岡京市教育委員会管理課文化財係　中尾秀正が担当した。

7．現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々の御協力を得た。

また、図面のトレースには、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター白川成明氏の御協力を得た。

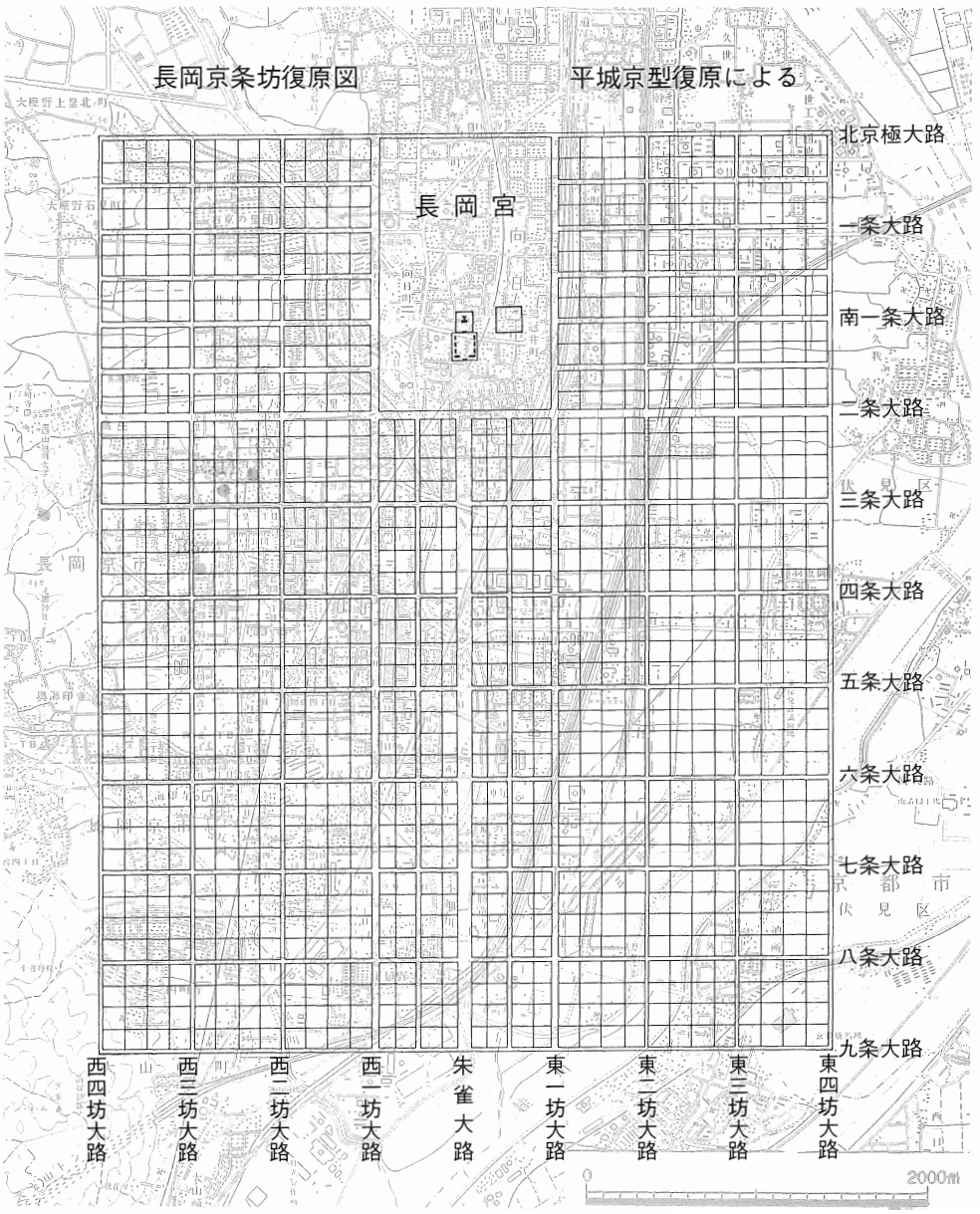
〔調査作業員〕　麻田安太郎・井本千代治・岩岸三郎・佐藤昭三・中村正雄・平木秋夫
田頭道登・川崎増喜・木村義雄・澤井清・西野恵三

〔調査補助員・整理員〕
倉橋裕之・筒井敬二・池庄司淳・坂根瞬・吉岡勝則・川勝庸行・岩川絢子・小畠絢子・鈴木芙美子・前田明美・占部真里・田中智紀・山本志津子・田中佐知子・小田昌子・奥田泰江

付表－1　　本書報告調査一覧表

調　査　次　数	地区名	所　在　地	土地所有者	調査期間（現地）	調査面積	備　　考
長岡京跡 右京第311次調査	7ANINC-4	長岡京市今里 二丁目17番1号	乙訓農業協同組合 組合長　野村義三	1988 7.11～8.9	96m²	今里遺跡
長岡京跡 右京第318次調査	7ANIHR-3	長岡京市今里 三丁目114－2	正木　喜久子	1988 10.27～11.26	56m²	今里遺跡 乙訓寺跡
長岡京跡 右京第322次調査	7ANIOK-2	長岡京市天神 五丁目115-1・2	田村　忠雄	1988　1989 11.28～1.31	505m²	今里大塚古墳第2次調査 （周濠部）
祭ノ神遺跡 第1次調査	8LSJTD-1	長岡京市長法寺 谷田	宗教法人　長法寺 代表役員　川西寂紹	1988　1989 12.13～1.6	23m²	平安～鎌倉時代の溝 弥生時代（中期）の土器

第１図　本書報告調査地位置図



本　文　目　次

序　　文……i
凡　　例……ii

第１章　長岡京跡右京第311次調査概要……1
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第２章　長岡京跡右京第318次調査概要……11
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　5　出土遺物
5　まとめ

第３章　長岡京跡右京第322次調査概要……23
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　4　出土遺物
5　まとめ

第４章　祭ノ神遺跡第１次調査概要……39
1　はじめに　2　調査経過　3　検出遺構　5　出土遺物
5　まとめ

付　載　長岡京市埋蔵文化財発掘調査に伴う基準点測量……45

図　版　目　次

巻頭図版１　長岡京跡右京第318次（７ＡＮＩＨＲ－３地区）調査
(1)　乙訓寺周辺航空写真（1979年撮影　南から）　(2)　緑色凝灰岩製車輪石
巻頭図版２　長岡京跡右京第322次（７ＡＮＩＯＫ－２地区）調査
(1)　今里大塚古墳周辺航空写真（1979年撮影　南から）
(2)　今里大塚古墳および調査地全景（北西から）

長岡京跡右京第311次（７ＡＮＩＮＣ－４地区）調査

図版　1　(1)　II期の遺構－１（北から）　(2)　II期の遺構－２（北から）
図版　2　(1)　Ｉ期の遺構（北から）　(2)　調査地全景（南から）
図版　3　(1)　集石遺構ＳＸ31108（東から）　(2)　掘立柱建物ＳＢ31107（東から）
図版　4　柱穴の根石
図版　5　出土遺物

長岡京跡右京第318次（７ＡＮＩＨＲ－３地区）調査

図版　6　(1)　調査地全景（西から）　(2)　溝ＳＤ31801石溜り検出状況（西から）
図版　7　(1)　東壁断面（西から）　(2)　西壁断面（東から）
(3)　溝ＳＤ31801断面（西から）　(4)　溝ＳＤ31801遺物出土状況
(5)　溝ＳＤ31801石溜り検出状況（西から）
(6)　溝ＳＤ31801完掘状況（西から）
図版　8　(1)　弥生土器、須恵器　(2)　土師器皿　(3)　円盤
図版　9　(1)　陶器　(2)　軒丸瓦・軒平瓦

長岡京跡右京第322次（７ＡＮＩＯＫ－２地区）調査

図版　10　(1)　調査地周辺航空写真（1946年米軍撮影）
(2)　調査地周辺航空写真（1987年４月撮影）
図版　11　(1)　調査地および今里大塚古墳全景（北西から）
(2)　調査地全景（掘り上げ前　南から）
図版　12　(1)　墳丘から見た調査地全景（掘り上げ前　南東から）

(2) 墳丘から見た調査地全景（掘り上げ後　南東から）
図版　13　(1) 周濠掘り上げ状況（北から）　(2) 周濠掘り上げ状況（南から）
図版　14　(1) 今里大塚古墳および周濠掘り上げ状況（北西から）
(2) トレンチ東壁断面（西から）
図版　15　(1) トレンチ西壁断面（東から）　(2) サブトレンチ北東断面（南西から）
(3) サブトレンチ南西断面（北東から）
図版　16　(1) 4・8・9層出土遺物　(2) 10・25層出土遺物
(3) 出土金属製品　(4) 出土石製品

祭ノ神遺跡第1次（8ＬＳＪＴＤ－1地区）調査

図版　17　(1) 調査地遠景（東から）　(2) 現在の長法寺
図版　18　(1) 1トレンチ全景（南西から）　(2) 1トレンチ全景（北東から）
図版　19　(1) 2トレンチ全景（東から）　(2) 1トレンチ北東断面
図版　20　(1) 1トレンチ南西断面北半　(2) 1トレンチ南西断面南半
図版　21　(1) 1トレンチ南東断面北半　(2) 出土遺物

挿　図　目　次

第１図　本書報告調査地位置図……iii

長岡京跡右京第311次（７ＡＮＩＮＣ－４地区）調査

第２図　発掘調査地位置図……1
第３図　検出遺構図（Ⅱ期）……2
第４図　検出遺構図（Ⅰ期）……3
第５図　溝ＳＤ31101出土遺物実測図……4
第６図　溝ＳＤ31106出土遺物実測図……5
第７図　土壙ＳＫ31118出土遺物実測図……6
第８図　土壙・柱穴等出土遺物実測図……7
第９図　石器実測図……8
第10図　周辺の地形（日下雅義氏原図に加筆）……10

長岡京跡右京第318次（７ＡＮＩＨＲ－３地区）調査

第11図　発掘調査地位置図……11
第12図　調査地土層図……12
第13図　検出遺構図……13
第14図　出土遺物実測図１……14
第15図　出土遺物実測図２……14
第16図　出土遺物実測図３……15
第17図　出土遺物実測図４……16
第18図　出土遺物実測図５……18
第19図　乙訓寺検出遺構図……20

長岡京跡右京第322次（７ＡＮＩＯＫ－２地区）調査

第20図　発掘調査地位置図……23
第21図　今里大塚古墳周辺地形図……24
第22図　右京第178次調査……25

第23図　今里大塚古墳現状……25
第24図　調査地断面図……27
第25図　検出遺構図……29
第26図　サブトレンチＧ・Ｈ区断面図……30
第27図　発掘調査地周辺図……31
第28図　下層流路平面図……33
第29図　下層流路全景……33
第30図　流路断面……33
第31図　出土遺物実測図……35
第32図　出土石製品実測図……36
第33図　今里大塚古墳周辺地籍図……37

祭ノ神遺跡第１次（８ＬＳＪＴＤ－１地区）調査

第34図　発掘調査地位置図……39
第35図　２トレンチ平・断面図……40
第36図　１トレンチ平・断面図……41
第37図　出土遺物実測図……43

付載　長岡京市基準点測量成果

第38図　基準点網図……46

付　表　目　次

付表－１　本書報告調査一覧表……ii
付表－２　乙訓寺のおもな検出遺構……21
付表－３　基準点成果表……46

第１章　長岡京跡右京第311次（７ＡＮＩＮＣ－４地区）調査概要
――右京三条三坊十二町・今里遺跡――

１　は　じ　め　に

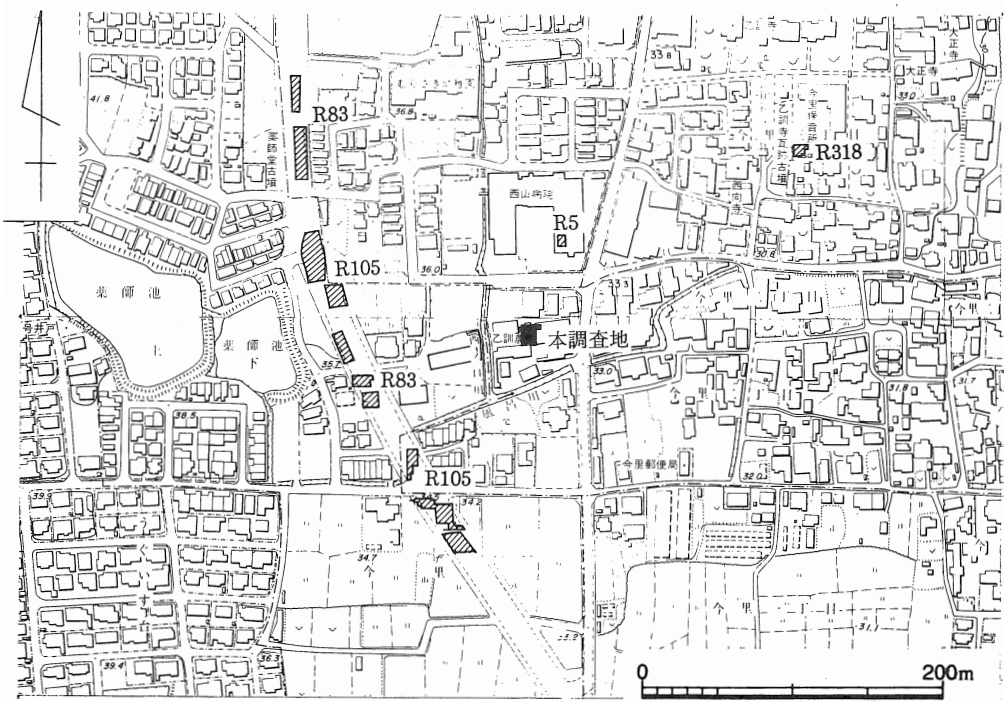
１．本報告は1988年７月11日から８月９日まで、長岡京市今里二丁目17-1（乙訓農業協同組合所有地）において実施した長岡京跡右京三条三坊十二町推定地、および今里遺跡における発掘調査に関するものである。

２．本調査は、乙訓農業協同組合の構造改善センター建築工事に伴って実施した調査で、調査面積は96m²である。

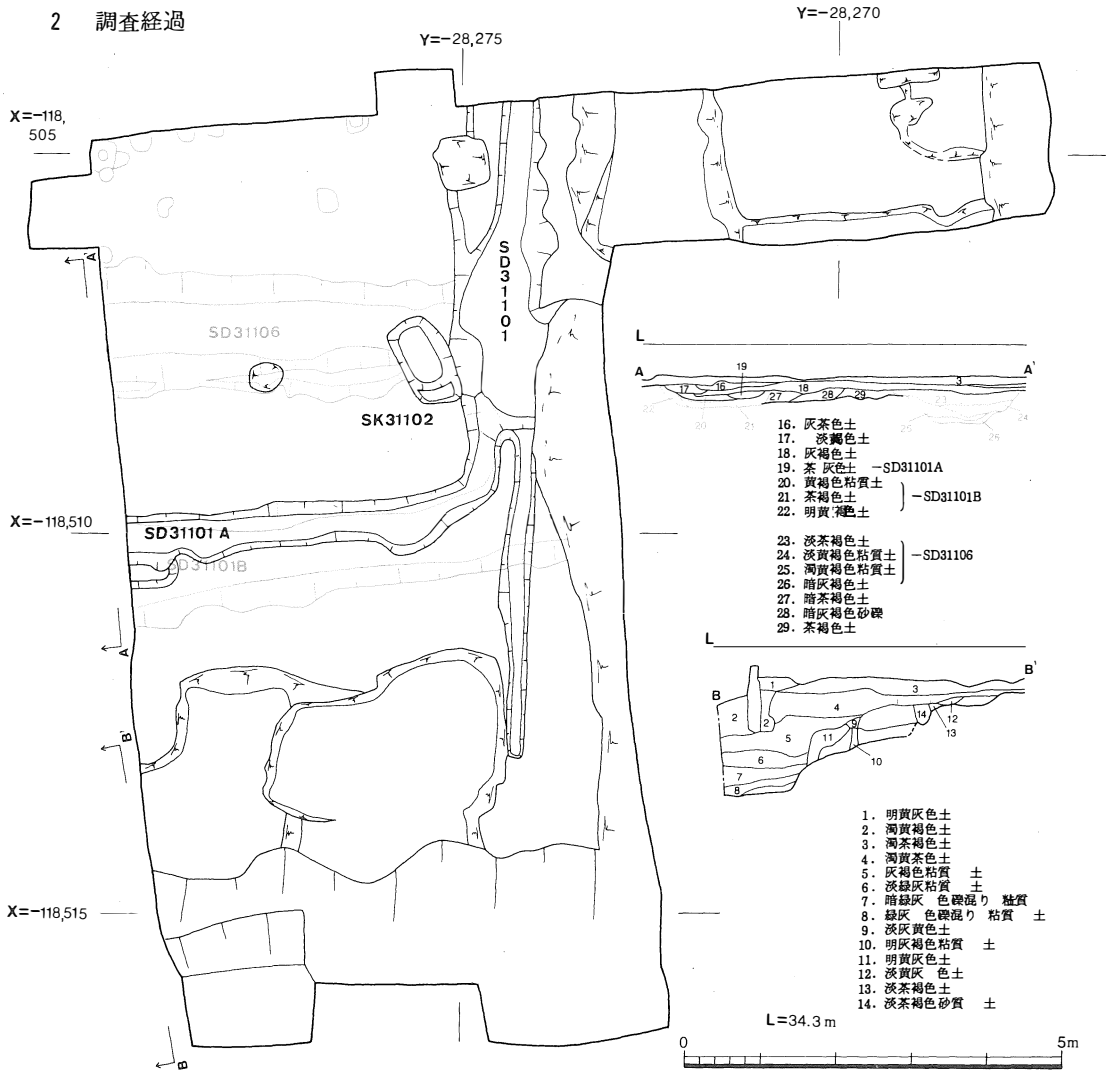
３．現地調査および整理作業は長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。調査員は（財）長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、小田桐淳が担当した。

４．調査の実施にあたり、土地所有者である乙訓農業協同組合には数々の御協力を得た。また調査中および整理作業にあたり、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏には多くの御指導を得た。

５．調査後の遺構図面の整理・遺物の実測等は吉岡勝則が主に行い、編集・執筆は小田桐が行った。[1]



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

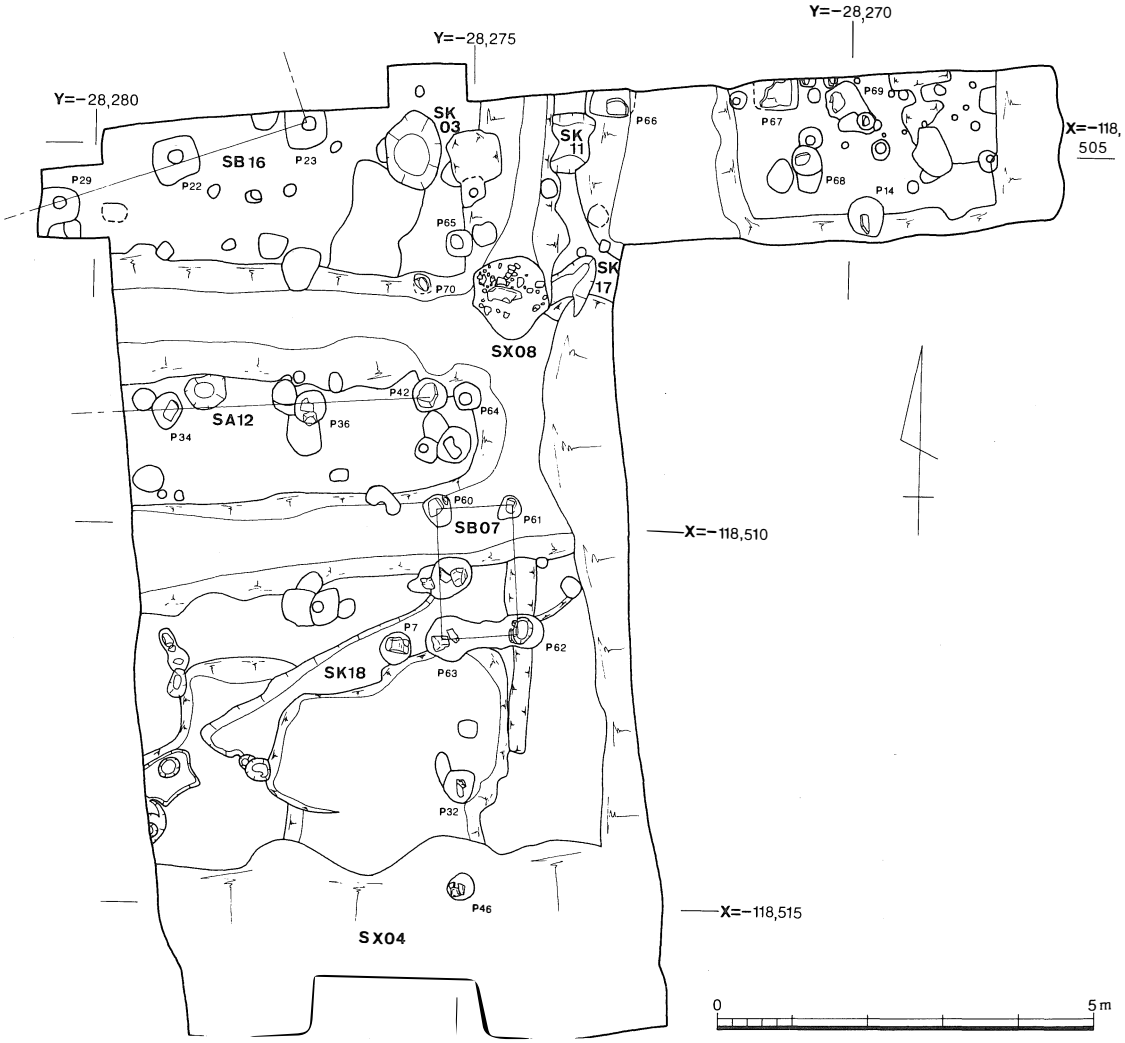


第３図　検出遺構図（II期，1/100）

2　調　査　経　過

調査地は、現乙訓農業協同組合事務所の裏手にあたり、事務所建物が延びていた所であるが、ここを一部解体し、新たに鉄筋建物を建てる計画が持ちあがった。当地は長岡京跡右京三条三坊十二町にあたるとともに、先土器・縄文時代から中世にかけての複合遺跡である今里遺跡内に含まれており、また白鳳期から現在に至る乙訓寺にも近接することから、国庫補助事業として調査を実施することになった。

調査トレンチは、建物解体に伴う立会調査で、遺構の残存状況が良好な部分に設定した。遺構検出面は整地面下約10㎝と非常に浅い。



第４図　検出遺構図（Ⅰ期，1/100）

※ 遺構名の最初３桁（311）は省略

3　検　出　遺　構

調査トレンチ内の土層堆積は、現代整地層が全体的に10cmほど残っていた以下は、トレンチ南部では一部地山面が露出している以南で、近・現代撹乱が若干深くなり、さらに同期ではあるが層位的に古いＳＸ31104へと続く。トレンチ中ほどから北にかけては近世包含層が10cm前後残っており、この層を除いた面で各時代の遺構が重複して検出された。これらの遺構は切り合い関係や出土遺物から２期に大別される中世から近世にかけてのものである。ここでは古い時期から順にⅠ・Ⅱ期として以下概略を説明する。

Ⅱ期検出遺構（第３図）　　主な遺構は溝ＳＤ31101とＳＤ31106である。これらの溝は切り

合いおよび掘り直しが認められ、さらに３小期の変遷がたどれる。

ＳＤ31101は埋土によってＡ・Ｂに分かれる。ＳＤ31101Ａは茶灰色土の単一層で、調査区中央部をＴ字形に掘られており、溝幅は北部では１ｍ前後であるが、トレンチ中央付近で枝別れし、西方へは幅 0.6m前後、南方へは幅 0.4mとなって延びる。溝底のレベルは分岐点の北側で一番深くなり、この付近でさらに東方へも分岐する可能性が考えられる。

溝ＳＤ31101ＢはＡの下層埋土部分で、西方に分岐する部分にのみ認められた。この時期ではＳＤ31101は逆Ｌ字状に曲がっており、溝の北部と西部の幅はほぼ同一である。溝底のレベルは北から南、西から東へ低くなってゆき、東西方向部分の南肩下端が東へまっすぐ続いていることから、さらに東へ延びるＴ字形になる可能性が考えられる。

溝ＳＤ31106は東西方向の溝でＳＤ31101Ａの埋土によって切られている。幅 1.5m、深さ 0.4mほどを測り、４層の埋土からなる。

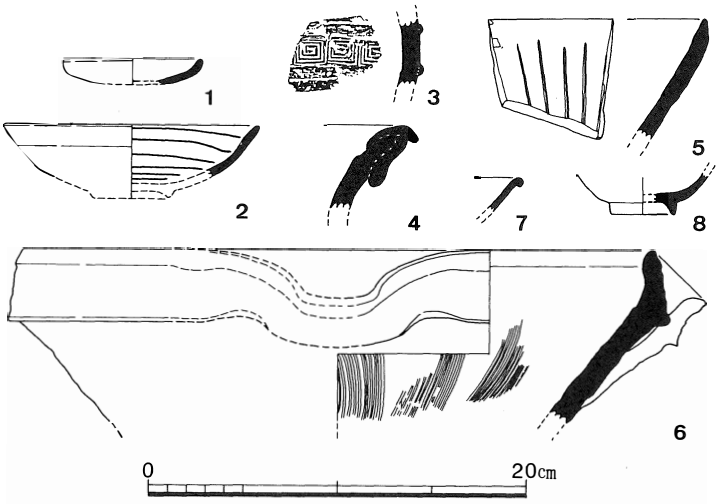
これら２条３小期の溝は同一の性格をもつと考えられるもので、敷地の区画および排水施設の変遷としてとらえられる。

これらの溝と同様の埋土をもつ柱穴は調査トレンチの北西端に若干認められるが、建物としての確認はできなかった。

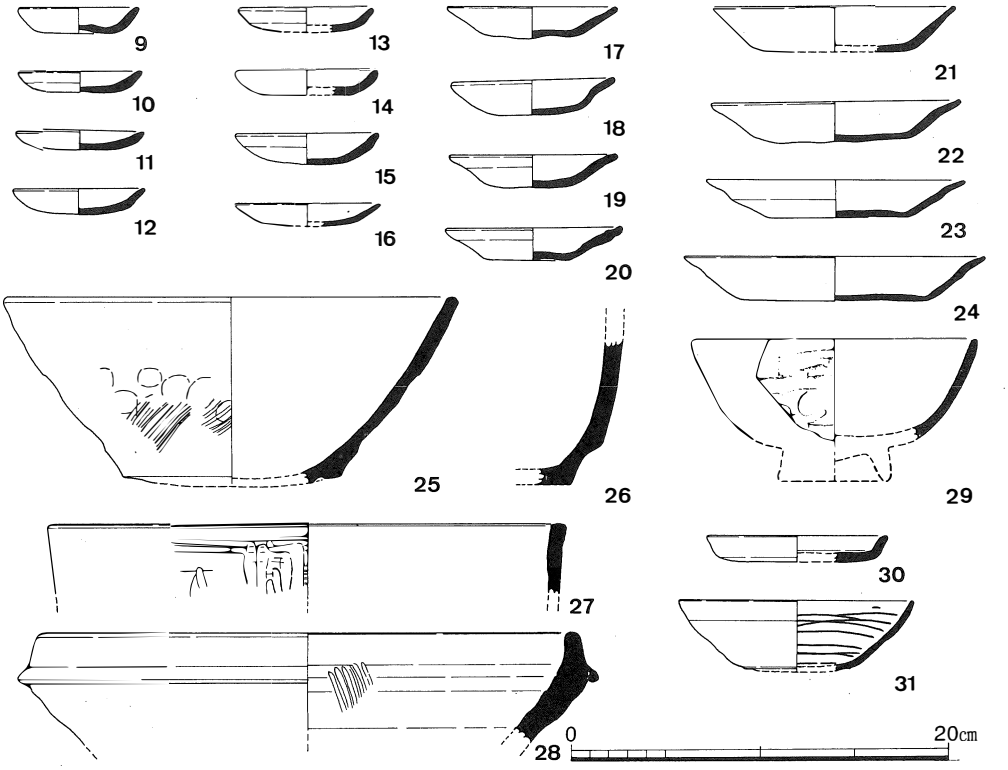
Ｉ期検出遺構（第４図）　土壙、柱穴群で構成され、II期同様何小期かの変遷が考えられる。柱穴群でまとまるものは、ＳＢ31107が東西１間（１ｍ）、南北１間（ 1.7m）の規模で方向は北で西に３°振れている。この建物のＰ62とＰ63とは共通の掘形をもっている。Ｐ60とＰ61も同様かどうかはＳＤ 31101によって撹乱されていたため不明である。

ＳＡ31112は２間分検出された東西方向の柵列で、ＳＢ31107と同じ振れ角をもっている。柱間は1.7mである。このＳＡ31112のＰ42とＳＢ31107の西辺とは1.5m隔ててほぼ一直線上に並ぶ。他にＰ64・Ｐ65、Ｐ66・Ｐ67、Ｐ70もＳＢ31107、ＳＡ31112と同じ振れ角、同じ並びをもっており、同時期の一連の施設を形成すると考えられる。これらの柱穴の底には根石をもつものが多い。

ＳＢ31116は他の柱穴に比較して大型の掘形をもつもので、東で北に18°振れる角度をもって２間分並ん



第５図　溝ＳＤ31101出土遺物実測図(1/4)



第６図　溝ＳＤ31106出土遺物実測図(1/4)

でいる。柱間は 1.7mである。

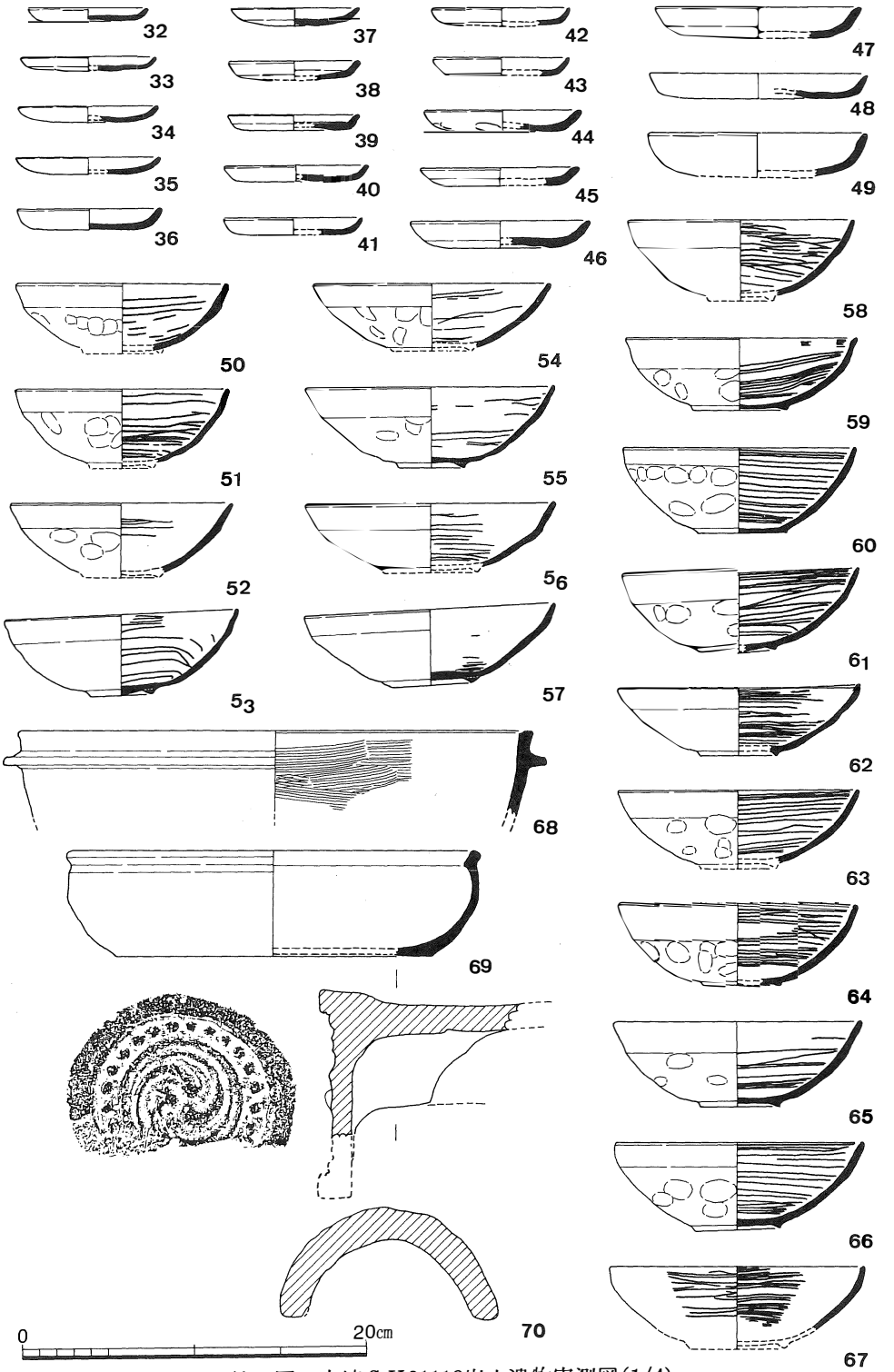
土壙ＳＫ31118はＳＢ31107などの柱穴に切られている細長い土壙で、溝になる可能性をもっている。埋土からは多量の土器類が出土した。

集石遺構ＳＸ31108は径１ｍほどの皿状に凹む土壙で、２層に分層される。上層には中央部に細長い 0.5mほどの石材を置き、周囲に拳大前後の石を敷いている。下層は５㎝ほどの厚さで炭が堆積していた。遺物がほとんどなく、時期・性格等は不明であるが、墓跡になると考えられる。

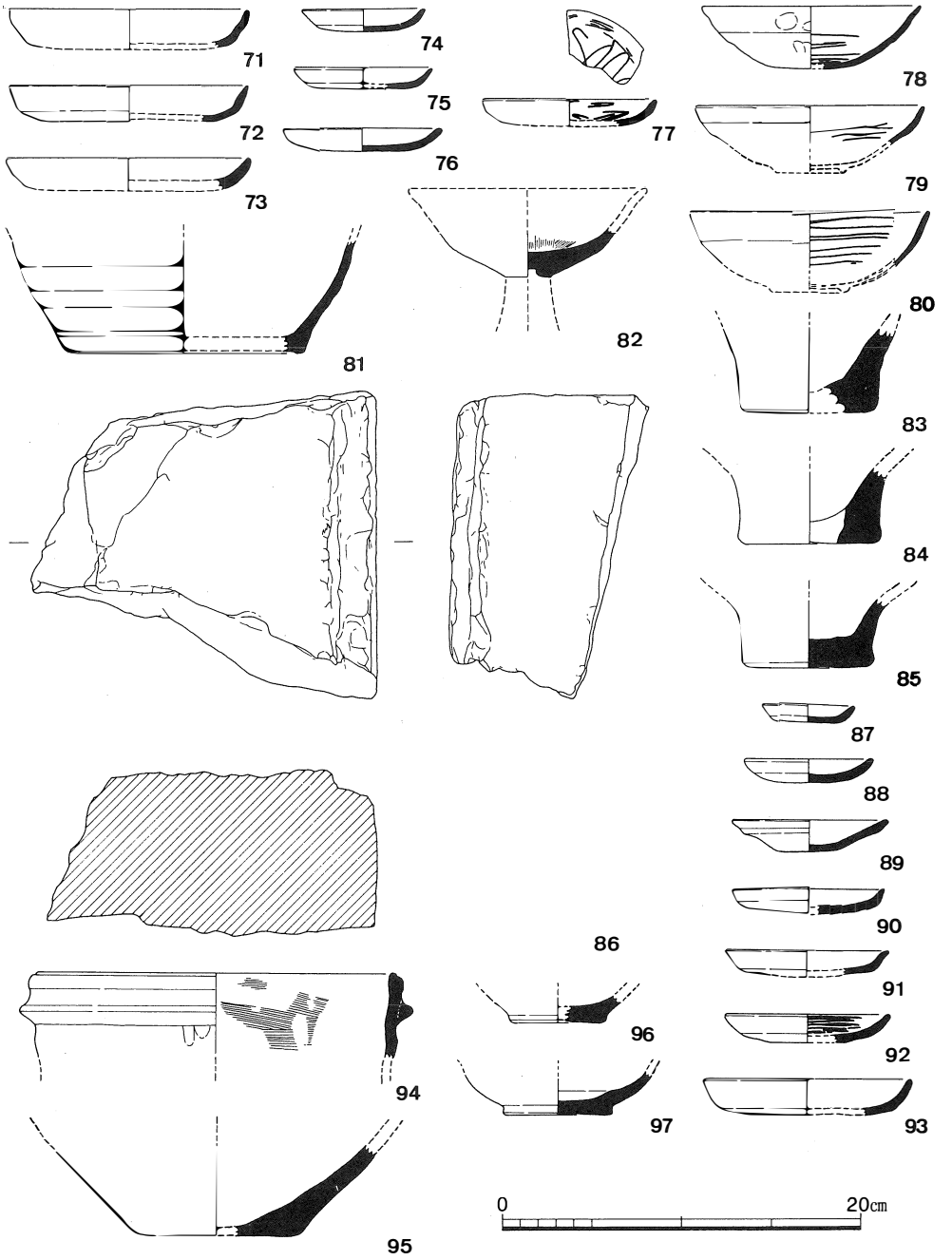
4　出　土　遺　物

Ⅱ期遺構出土遺物

溝ＳＤ31101（第５図）　　Ａ期の埋土から出土したものに２の瓦器埦、５の丹波焼すり鉢、７・８の白磁がある。Ｂ期では１の土師器皿、６の備前焼すり鉢などがある。ＳＤ31101の遺物は量的に少なく、瓦器埦など古い遺物も混入しており、時期決定し難いが、５のすり鉢からＳＤ31101Ａの下限を16世紀頃に置くことができよう。



第７図　土壙ＳＫ31118出土遺物実測図(1/4)



SB31107・P62-81　SK31103-74　SK31113-75　SK31120-71　P28-83・84・85　16～18層-87・92
SB31107・P63-73　SK31108-77　SK31119-72・76・78　P22-82　P66-79・80　27～29層-88
SX31104-89～91・93～97

第８図　土壙・柱穴等出土遺物実測図(1/4)

8　出土遺物

溝ＳＤ31106（第６図）　　ＳＤ31106は４層の埋土によって埋まっているが、その中でも第３層からは量的にも多くまた形になるものも多く出土した。図示したものの中で28のすり鉢と30の瓦器皿以外は全て第３層から出土したものである。

第３層出土の土師器皿は３種に大別される。９～16は口径 6.4～ 7.8cmほどで口縁部が内彎ぎみに立ち上がる。17～20は口径９～ 9.4cmのもので、口縁は開き、若干外反する。21～24は口径12.8～16cmの大型で、中型のものと同様の形態をとる。13・18・19・20は灯火器として使用されている。25は瓦質の鉢、26は瓦質の火鉢、29は龍泉窯系の青磁で、口縁部外面に雷文帯を巡らすタイプのものである。これらの遺物は土師皿の形態から15世紀頃のものと考えられる。

Ⅰ期遺構出土遺物

土壙ＳＫ31118（第７図）　　今回の調査地内で最も多量に遺物が出土した遺構で土師器・瓦器などの食器類がほとんどを占めている。

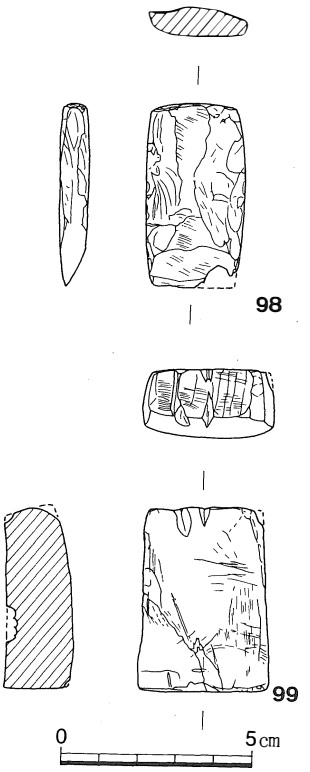
土師器小皿（32～43）は口径７～８cmを測り、底部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる34や35のタイプと、口縁部外面をやや強くなでて体部と口縁部の境目をつくるタイプとがある。土師器皿（47～49）は口径12～12.8cmのものが出土している。

瓦器類では44～46が皿である。46は内面の暗文はすでになく、外面調整も口縁部を横方向になでるのみで、底部は未調整で凹凸を残す。椀（50～67）は口径12.3～14.4cmと幅をもつ。体部外面に磨きを施すものが１点(67)あるのみで他はなでるだけのものである。口縁端部内面に凹線をもつものも64と66・67にみられるのみである。体部内面の暗文は粗いもの（50～57）と比較的密なもの（58～67）とにわけられる。羽釜の破片はわずかに68が出土している。

69は中国産と考えられる陶器である[2]。素地は暗乳灰色を呈し、カオリン含有量が高く磁器に近い。径１mm弱の長石・チャートを含んでいる。釉薬は内面に淡緑褐色の褐釉が比較的厚くかかっている。口縁部および体部外面上半にも薄くかかっており、外面は茶色を呈している。形態はゆるやかに丸みを帯びた体部に厚手で「く」の字に開く口縁をもつ盤である。

70は巴文軒丸瓦である。圏線で区画した内区には尾の長い三ツ巴を配し、外区の種文は大粒のものを密に配置している。丸瓦部外面は縦方向に強くなで、内面には布目痕を残す。

ＳＫ31118出土遺物の時期は瓦器椀などから橋本編年Ⅲ期の範疇に考えられ、その下限を13世紀末葉にもとめられる。



第９図　石器実測図(1/2)

その他　　Ｐ28から弥生時代中期の甕底部が出土している（83

～85）。このピットからは他に瓦器片も出土しており、二次堆積ではあるが、弥生時代今里遺跡に関するものとして位置付けられる。弥生遺物は他にＳＸ31104から甕底部（95）扁平片刃石斧（第９図98）が出土している。

Ｐ66掘形から第９図99の滑石製温石が出土した。これは厚さ 1.6cmの台形を呈するもので、短辺に切り込みが入れられている。表面はふくらみをもっているが、裏面は二次的に削られ、新しい面で若干の凹みをもっている。短辺の切り込みもこの段階で入れられたものである。

86はＰ36の根石にされていたもので、凝灰岩の加工品である。二面生きている面があり、のみで粗く面取りされている。角は一段カットされており、古墳時代石棺の蓋の可能性がある。

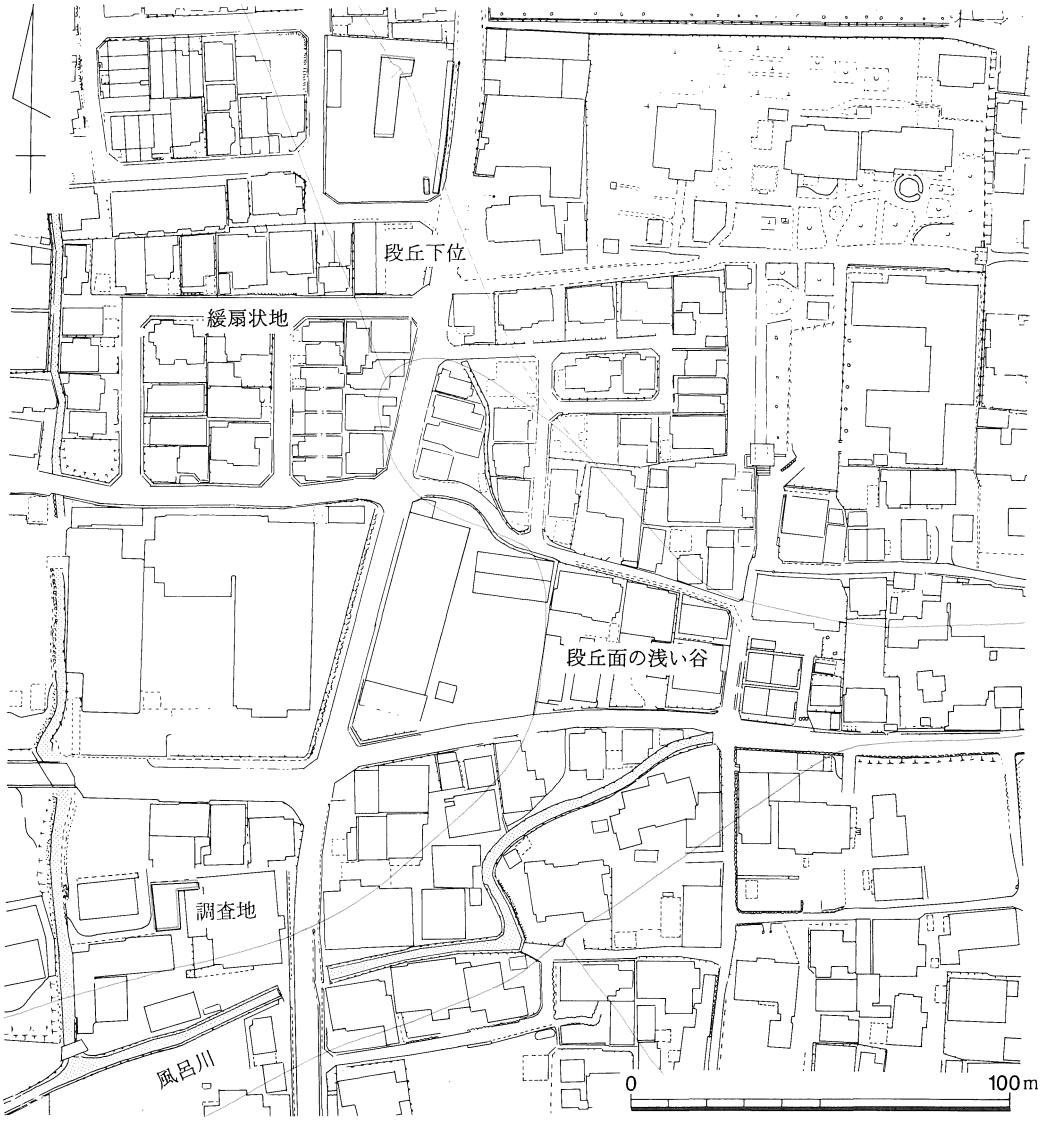
5　ま　と　め

以上のように今回の調査では中世から近世にかけての集落の一端が明らかになった。Ｉ期の柱穴群の特徴としては根石をもつものが多いことがまずあげられる。配列はまだ検討を要するが柵状の並びが多く、屋敷地の外まわり部分になるものと予想される。１間×１間のＳＢ31107は門として位置付けられよう。II期の溝も同様の区画を示すと考えられる。ＳＤ31106はＳＤ31101に切られて以東へは続かず、また溝底のレベルもほぼ両者は同じであることから、ＳＤ31106もＬ字に北へ曲っていたと思われ、ＳＤ31106からＳＤ31101Ｂ、ＳＤ31101Ａと区画の変遷が想定される。このようなＩ期の柵による区画からII期の溝への変化は当時の社会情勢にてらすと応仁の乱との関係が想起される。

周辺の地形を検討すると、立命館大学教授日下雅義氏の復原によると、この地域は緩扇状地と段丘下位面との境目付近に位置し、これらに切り込む谷が２本認められる。そのうちの１本は調査地の北方200ｍほどで実施された長岡京跡右京第232次調査で北肩が検出されている。もう１本は調査地の南隣りを流れる風呂川の位置にあたり、両者は調査地の東方100ｍ付近で合流している。今回検出されたＳＸ31104は近・現代の時期ではあるが、風呂川に向かって落込んでゆき、湿地を思わす粘質土層が堆積している。このＳＸ31104は日下氏の復原する谷の北肩に相当すると考えられる。右京第232次で検出された谷は深さが２ｍ近く下がり、またＳＸ31104も 1.5ｍ以上深くなり、これらの谷はかなり深いものと考えられる。この谷によって当地周辺は調査地を含む緩扇状地の地域と、乙訓寺が立地する北部段丘下位面、それに南部段丘下位面の三地域に分けられる。ＳＫ31118から出土した巴文軒丸瓦は乙訓寺に使用されていたものの可能性も考えられるが、このような地形を考慮すると、乙訓寺の寺域は北部段丘下位面に限定され、当調査地の地域は中・近世今里村の一角にあたると想定される。

遺物では、ＳＤ31106から15世紀の良好な資料が出土したのを始め、ＳＫ31118からは13世紀後半代の遺物が出土し、巴文軒丸瓦や中国陶器の年代がおさえられるなどの成果が得られた。

10　まとめ



第10図　周辺の地形（日下雅義氏原図に加筆）（1/2000）

P66出土の滑石製温石は石釜の転用が多い乙訓地域の中でも数少ないものである。

中世以前では、遺構の検出はないものの、古墳時代・弥生時代の遺物が出土した。これらは今里遺跡の存在を再確認するものである。

このように狭い調査面積ではあるが、多くの成果をあげることができた。当地周辺にはこれら各時代の遺構が良好な状態で残存していると考えられる。今回明らかにし得なかった中・近世の宅地変遷の全容が今後の縁辺部での調査で解明されることを期待する。

注　1　なお、遺物の実測にあたっては船戸裕子氏に多大な御協力を得た。

　　2　平安京調査会　小森俊寛氏の御教示を得た。

第2章　長岡京跡右京第318次（７ＡＮＩＨＲ－３地区）調査概要

1　は　じ　め　に

1．本報告は、1988年10月27日から11月26日まで、長岡京市今里三丁目114-2において実施した長岡京跡右京三条三坊六町推定地、および乙訓寺跡、今里遺跡の発掘調査に関するものである。

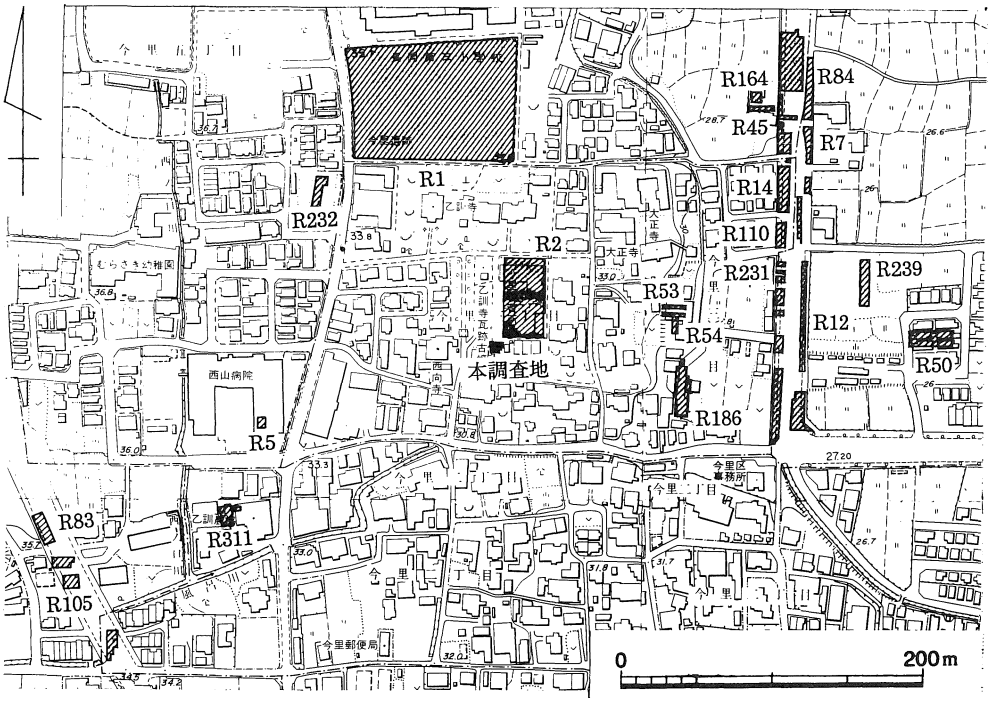
2．本調査は、乙訓寺の主要伽藍を取り囲む回廊の南側部分が検出される可能性が高いため、その確認を行うことを目的とした。また、同時に付近での開発計画に対して適切な文化財保護、指導ができるように資料の作成を行うことを目的に国庫補助事業として実施した。

3．調査は、長岡京市教育委員会が主体となり、調査員は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、原秀樹が現地を担当した。

4．調査実施にあたり、土地所有者である正木喜久子氏には種々のご協力を得た。また、現地調査および本報告の作成にあたっては、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏より種々のご指導を得た。さらに、遺物写真は財団法人京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏にご協力を得た。

5．調査後の遺物実測や図面整理は、主に原、田中智紀、占部真里が行った。(1)

6．本報告の執筆ならびに編集は、原が行った。



第11図　発掘調査地位置図(1/5000)

2　調　査　経　過

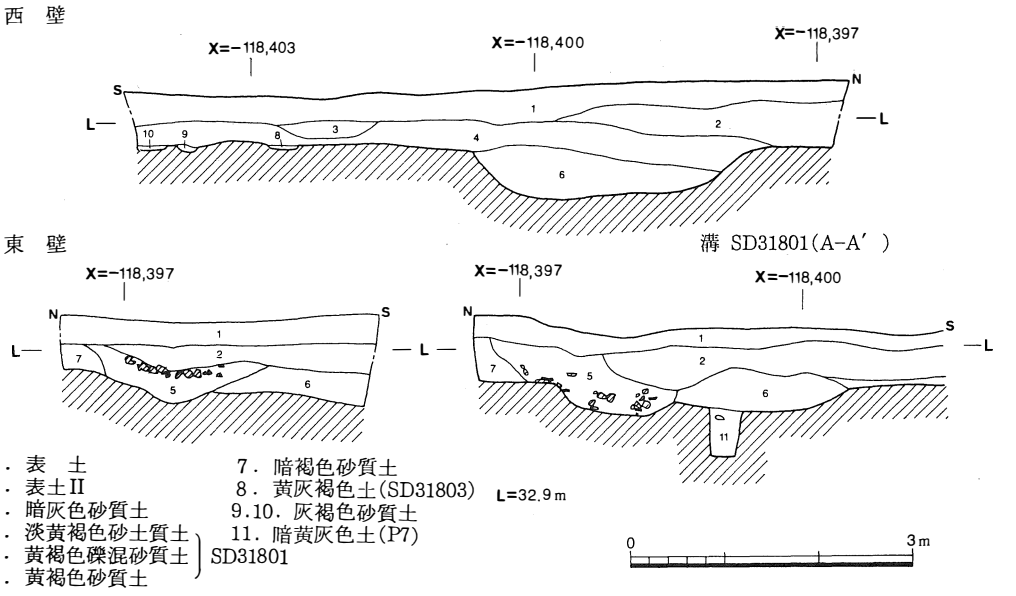
本調査地は、乙訓寺南門の東約20mに位置する畑地であり、周囲は今里保育所や宅地に隣接している。当地は、長岡京条坊復原図によると右京三条三坊六町にあたり、乙訓寺の推定寺域内に含まれている。さらに一帯は今里遺跡に当たり、縄文時代後期から古墳時代にかけての集落が営まれたところでもある。乙訓寺に関しては、昭和41年（1966）の右京第1次調査[2]で講堂と推定される礎石建物と掘立柱建物が検出されており、昭和44年（1969）の右京第2次調査[3]では、現南門の東延長線上に東西方向の溝が検出されている。この他、周辺部における調査がその後十数回にわたって実施され、奈良時代から平安時代にかけての遺構、遺物が多く確認されている。中でも今回の調査地は、右京第2次調査で検出された主要伽藍を取り囲む施設に関連すると想定される溝[4]に隣接しており、その伽藍配置を決める上でも重要な地点の一つである。

このような調査成果に基き、市教育委員会では重要遺跡確認調査の一つとして国庫補助事業による発掘調査を実施した。調査対象地は、東と南に隣合う宅地との間に約 0.5～ 1.5mの比高があり、これは造成の際に整地されたものと考えられた。当地の標高は33.2mをはかる。

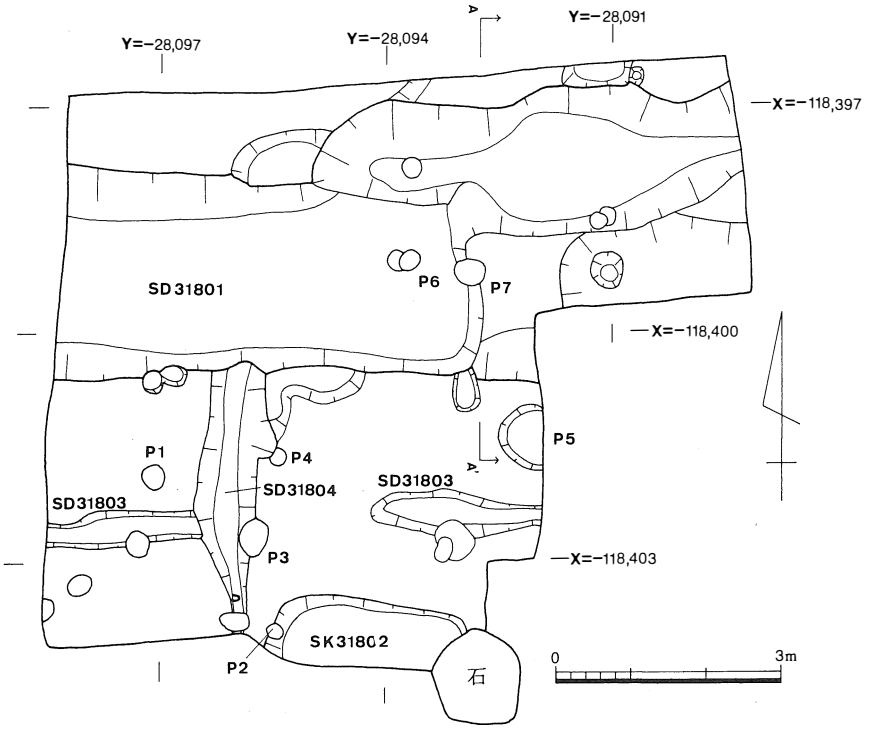
調査地は、重機による掘下げが不可能なため埋戻しも含めて全て人力で行い、土置場の確保等の事情から調査は2回に分けて行った。

3　検　出　遺　構

今回の調査で明らかになった主な遺構は、溝3、土壙2、ピット20余りであり、これらは全



第12図　調査地土層図(1/80)



第13図　検出遺構図(1/100)

て地山面で検出した。以下、主な遺構と大量の遺物を出土した包含層について概略したい。

溝ＳＤ31801　　調査地北半で検出した東西方向の溝。幅は、西壁部分で 2.9m、深さは約 0.5mをはかる。溝の形は東側ほど広がっており、溝底も一様に平らではない。また、溝内の堆積層に流水や滞水の状況は認められなかった。石溜りについては、いずれも底から浮いた状態で検出されており、さらに東へと続いている。溝内のピットは全て地山面で検出された。遺物は、本溝と上面の包含層から集中して出土している。

溝ＳＤ31803　　調査区南半で検出した東西方向の溝。一部途切れているが、幅は0.3 ～ 0.5mをはかり、深さは 0.1mである。土師器細片出土。

溝ＳＤ31804　　南北方向の溝で、前記２条の溝より新しい。土師器細片出土。

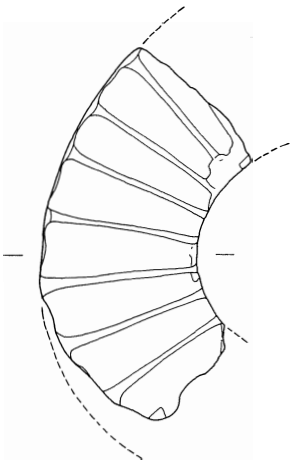
土壙ＳＫ31802　　調査区南壁にかけて検出し、さらに南へのびる。長辺 2.5m、短辺 0.9m以上、深さ約 0.4mをはかる。土師器、瓦器、陶器、瓦片が少量出土した。

ピット　　建物としてとらえられるかどうか明らかにしえなかった。いずれのピット内からも、土師器、須恵器、瓦器、瓦等の中世遺物が出土した。

表土、表土II　　この両層から、全体の半数以上の遺物が出土している。その出土状況は、最も多数を占める土師器皿では、隙なく土より土器の方が多い密集状態であった。

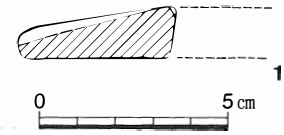
4　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦器、陶器、磁器、舶載磁器、瓦、石製品、土製品などであり、その大部分は表土、表土Ⅱ、溝ＳＤ 31801から出土している。全遺物量は、整理コンテナに34箱である。しかしながら、これらの遺物は各時期のものが種々混在した状況で出土しており、遺構や包含層として一括できるものではない。いずれも数量的に中世の遺物が最も多く、その中でも特に土師器皿が多数を占めている。遺物の出土状況に関しては、溝ＳＤ 31801 およびその付近に集中しており、これより南側では少ない。この様なことから、遺物の記述については時期別に整理した上で順にまとめることとしたい。

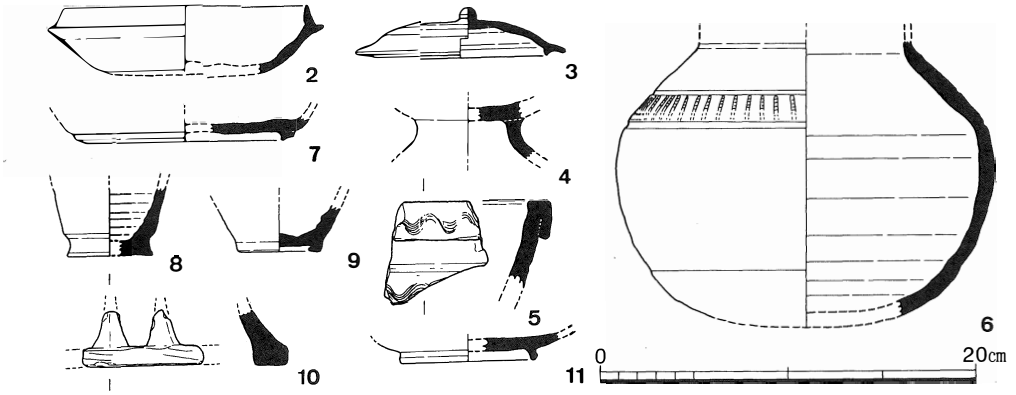


弥生時代の遺物　甕底部、壺口縁部などが出土している。壺は、口縁部端面に凹線を巡らすものである。他に、粘板岩片が出土している。いずれも出土量はわずかである。弥生時代中期後半に属する。

古墳時代・飛鳥時代の遺物　今回の調査で特筆すべきものに車輪石の出土があげられる。緑色凝灰岩製車輪石（１）は、溝ＳＤ31801から出土した。外面に放射状の凹帯を有し、底面は平坦である。外面の凹帯と底面の一部が摩滅しており、内外面に鉄分が付着する。この他に、小片ながら埴輪片も出土している。調整は摩滅しており不明。これらの遺物は古墳から出土するものであり、特に車輪石は前期古墳の副葬品で

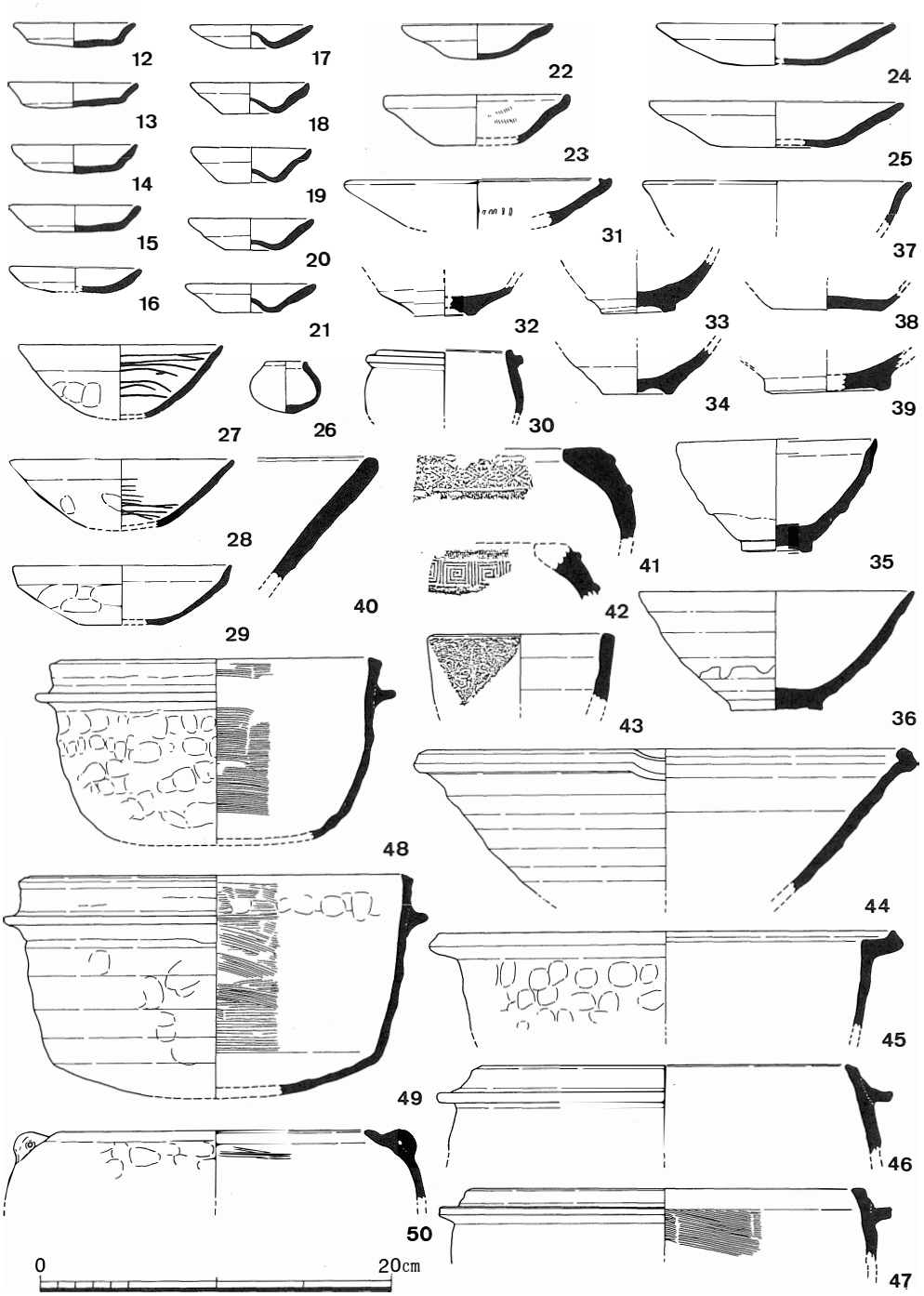


第14図　出土遺物実測図１(1/2)



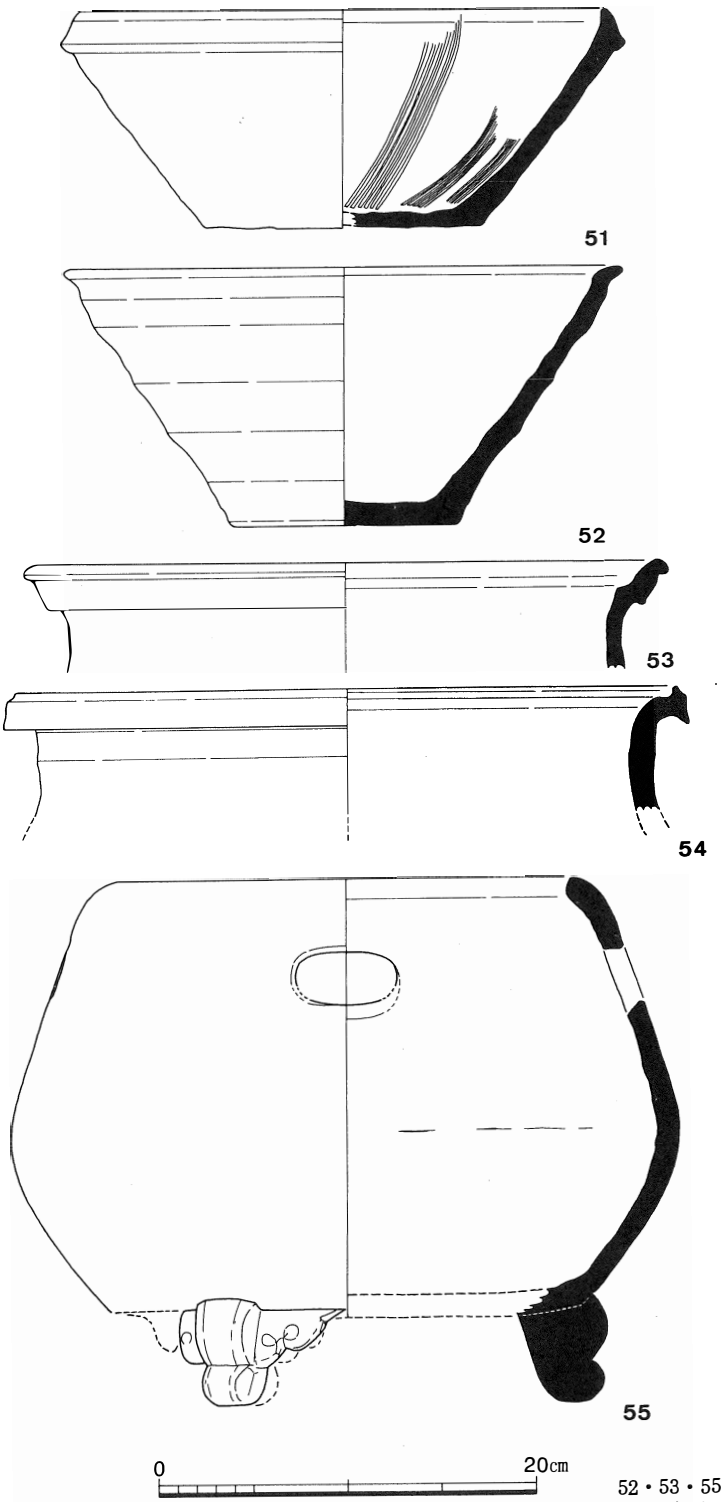
２・３・４・５・10－溝SD31801　　9－表採
６・７・８・11－表土Ⅱ

第15図　出土遺物実測図２(1/4)



27・29・31・35・45・48−溝SD31801
12〜26・28・30・36・40・42・43・46・47・49・50−表土Ⅱ
33・34・37〜39・41−表土　32・44−表採

第16図　出土遺物実測図３（1/4）



52・53・55−溝SD31801
51・54−表土Ⅱ

第17図　出土遺物実測図４（1/4）

ある。これはまだ明らかでない古墳の存在を示唆する遺物として注目されるものであり、周辺における今後の調査で明らかにされることを期待したい。

この他、須恵器には壺（６）、坏（２）、坏G蓋（３）、高坏（４）、甕（５）、坏B（７）がある。６は、短頸壺と考えられる。体部上半に櫛描列点文を施す。２は、底部のヘラケズリは浅く平坦気味で、立ち上がりは１㎝をはかる。３は、宝珠つまみと内面にかえりを有する蓋。４は、低い脚台をもつ高坏。５は、外面に波状文を施す。７は、高台が断面三角形状を呈する。土師器については小片のため図示しえなかった。他に、須恵器器台の小片が出土している。

時期は、概ね６は６世紀代、他のものは７世紀代に含まれるものであろう。

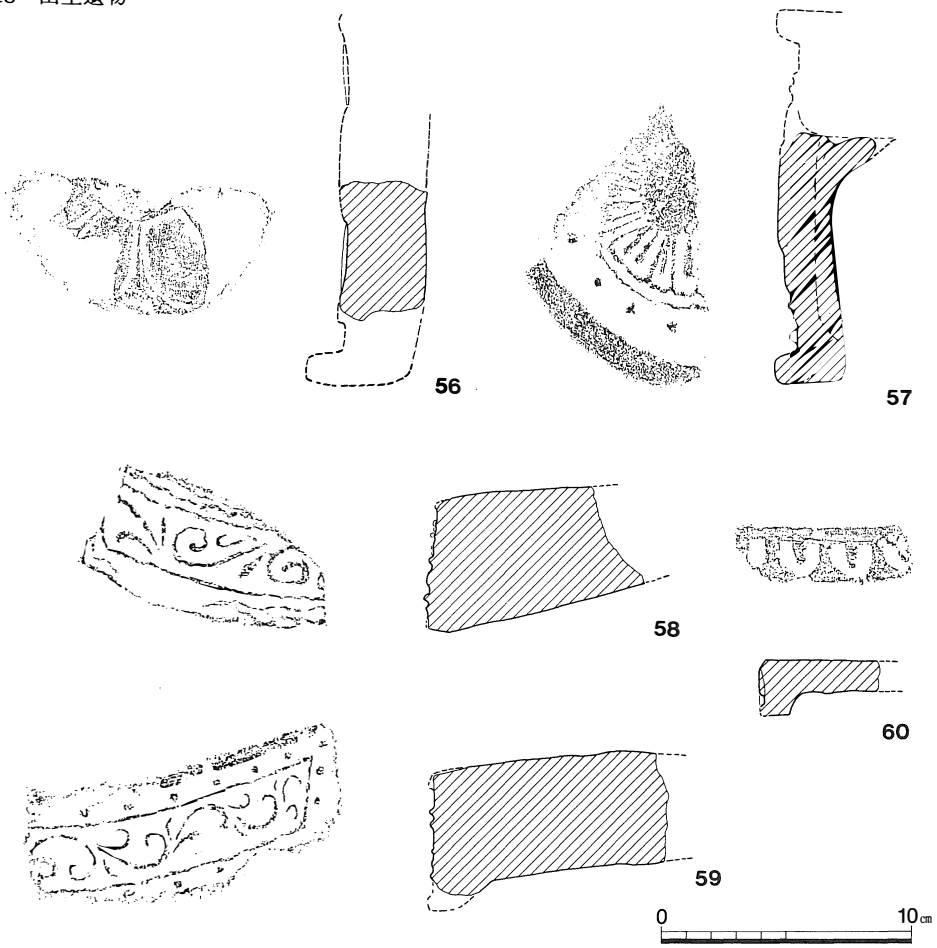
長岡京期・平安時代の遺物　須恵器壺M（８・９）、須恵器円面硯（10）、灰釉陶器皿（11）、白磁碗（39）がある。８は、底部糸切り。10は、三角柱状の圏足部分のみ。11は、底部内面に重ね焼きの痕跡をとどめる。39は、見込みに沈線状の段を有する。口縁部は玉縁になるタイプである。

鎌倉時代の遺物　瓦器埦（29）、瓦器小型羽釜（30）、瓦器羽釜（46・47）、白磁皿（38）がある。29は、直線的な体部と外反する口縁部をもつ。底部には断面三角形の低い高台がつく。内面には粗い暗文があり、炭素が吸着しない部分がある。30は、三本の脚がつく。鍔上面から内面にかけて付着物が残る。46・47は、体部が内傾するタイプである。これにつくと考えられる脚部片も出土している。38は、全面に施釉を行う。口縁部が口禿になるタイプである。これらは概ね13世紀後葉から14世紀前葉にかけてのものであろう。

室町時代の遺物　遺物は、前期と後期の２時期に分類される。前期では、土師器皿（12～16）、瓦器埦（27・28）、須恵器鉢（44）、瓦器鍋（45）がある。12～15は、口径 6.7 ～ 7.2㎝、器高 1.4～ 1.7㎝をはかる。口縁部と底部の境目には強いナデによる稜がみられ、口縁部は外反気味にひらく。見込みにハケ目を残すものがみられる。皿はこのタイプのものが最も多い。16は、口径 6.8～ 7.5㎝、器高 1.0～ 1.6㎝をはかる。底部から口縁部にかけて丸味をもってのびる。見込みにハケ目を残すものがみられる。相対的に前者の皿より器高が低いものが多い。27・28は、尖り気味の底部を有する。内面は粗い暗文を施す。内外面には部分的に炭素が吸着しない部分がみられる。44は、東播系の鉢。片口をもち、内面はよく使用された痕跡をとどめる。45は、外面に煤が付着する。これらの遺物は、瓦器埦の特徴からみて14世紀後葉を中心とする時期と考えられる。

後期の遺物では、土師器皿（17～25）、瀬戸焼灰釉おろし目皿（31）、同灰釉碗（36）、輪入天目茶碗（35）、瓦器には火鉢（41・42・55）、すり鉢（40）、羽釜（48・49）、釜（50）、備前焼すり鉢（51）、信楽焼鉢（52）、信楽焼甕（53）、丹波焼と考えられる甕（54）がある。

17～21は、通称ヘソ皿と呼ばれる底部を押上げた皿である。口径 6.6～ 7.4㎝、器高 1.4～ 2.0㎝をはかる。底部には押上げた際の痕跡をとどめるものがある。22は、口径 8.4㎝・器高



56・57・58・60−溝SD31801
59−表土II

第18図　出土遺物実測図５(1/3)

2.0cm。23は、口径10cm・復元器高 2.8cm。24・25は、口径13.4〜14.4cm・器高 2.3〜 2.6cmをはかる。23は、口縁端部をつまみ上げる。また23・24は、見込みにハケ目をとどめる。22は灯明皿として使用している。31は、口縁部内外面に施釉する。36は、高台と体部外面の一部が露胎する。高台は削り出している。35は、緻密で焼きしまった胎土と、釉が厚く塗られ下方では釉のたまりがみられる。41・42は、上下２本の突帯間に刻印を施す。41は宝相華文、42は雷文。55は、下膨れの体部に内傾する口縁部をもつ。体部上方には四方の長円形透しがつき、脚は三足と考えられる。40は、使用による摩滅でスリ目が消えている。わずかに５本のみ確認される。48・49は、直立する体部に張り出す鍔をもつ。いずれも外面に煤が付着する。50は、縦方向の把手がつく。外面に煤が付着する。51は、スリ目を６本単位で施す。よく使用されており内面はつるつるしている。52もよく使用されており、内面はつるつるしている。色調は内外

面とも橙褐色を呈する。53は、長石を多く含み内外面の色調は茶褐色を呈する。54は、屈曲する口縁部内面から体部外面にかけて濃緑色の自然釉がかかる。

これらの遺物の中で、土師器皿について充分な分類は行いえていないが、法量は12～15のタイプのものが最も多く出土しており、22～25のタイプは少ない。また17～21のヘソ皿もこれまでの調査では最も多く出土している。

各遺物の年代については、概ね前期としたものが14世紀後葉を中心とする時期と考えられ、後期については15世紀末から16世紀前葉にかけてのものと考えられる。

桃山時代の遺物　土師器紅壺（26）、瓦器香炉（43）、唐津焼碗（32～34）がある。43は、筒形の体部に脚がつくものと考えられる。体部に菊花風の刻印を押す。32・33は、高台が三日月形を呈し、高台は露胎する。32は見込みに、34は外面にトチン痕が見られる。

61～69（図版８）は、縁を打ち欠き、断面をこするなどして円盤に仕上げたものである。材質は、土師器（65）、陶器（61～64）、瓦器（66、68）、須恵器（67）、瓦（69）があり、大きさは約３～４㎝、厚さ約 0.5～２㎝である。これらは他の大部分の遺物と同じく表土、表土Ⅱ、溝ＳＤ31801から出土している。時期的には桃山時代以降のものであろう。

瓦・その他の遺物　瓦については、大半が小片でかつ摩滅したものが多く、瓦当部をもつものは少ない。以下、主なものについて記述する。瓦の型式と時期については、中尾秀正氏の分類[5]による。56は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦。瓦当面は外区が剝がれて内区のみ残る。焼成は軟質。白色砂粒を多く含む。ＯＭ－１型式。57は、複弁蓮華文軒丸瓦。蓮弁の割付けは不均等である。中房は摩滅しており蓮子の数は不明。焼成は軟質。ＯＭ－12型式。58は、均整唐草文軒平瓦。外区に線鋸歯文線をめぐらせる。平瓦凸面は縦方向のヘラ削りを施す。焼成は軟質。ＯＨ－４型式。59は、均整唐草文軒平瓦。中心飾りを除く右半分のみ残存。凹面は横方向のヘラ削りを施す。曲線顎を呈し、凸面はヘラ削りの後ナデを行う。焼成は堅緻。ＯＨ－３型式。60は、剣頭文軒平瓦。凹面は布目圧痕が残る。瓦当外周上部は面取りを行う。段顎はヘラ削りを施し、凸面はナデを行う。焼成は軟質。本調査地では１点のみ出土した。これらの瓦は、56がⅠ群、58・59がⅡ群、57・60がⅣ群に比定される。

その他の遺物としては、18世紀以降の備前焼すり鉢、染付、焙烙、人形等が出土している。

5　ま　と　め

今回の調査地は、奈良時代に創建された乙訓寺の推定寺域内に含まれているが、現在のところその伽藍配置については明らかではない。これまで判明した遺構は、右京第１次調査で講堂跡と推定される礎石建物と掘立柱建物が検出された以外、主要伽藍に関する建物等は検出されておらず、江戸時代に描かれた絵図や条里の検討などにより寺域が想定されている段階である[6]。

本調査において関連する遺構が確認されると予想された右京第２次調査の「現存する南門の

第19図　乙訓寺検出遺構図(1/2000)

(注4文献に加筆)

ほぼ東延長上」に位置する東西溝の概要については付表－2の通りである。溝ＳＤ31801との時間的な併行関係については明らかにしえないが、少なくとも南側でさらに規模の大きな溝が確認されたことは、新たに乙訓寺の伽藍配置を考える上で新資料を提起したものといえよう。双方の溝の間隔は、距離にして約1.5 mと接近している。

溝ＳＤ31801 の埋没時期については、種々の雑多な遺物が出土していることから断定しにくいが、溝底近くに密集する石溜りから出土した土器が参考になると思われる。この中には時期的に新しいものとして35・48・52・53などがあり、これらの遺物を溝の埋没年代と考えたい。概ね室町時代後期の中でも、いわゆる戦国時代と呼ばれる時期に比定される。さらに関連して土器と石溜りの出土状況には、総じて溝の北側付近により多くの石や土器が検出されているこ

付表－２　乙訓寺のおもな検出遺構（注４文献に加筆）

番号	遺構名	調査次数	方向	概要	主な伴出遺物
1	建物A	右京１次	東西	桁行９間(27m)・梁間４間(12m)(四面廂付）の礎石建物…推定講堂。この建物の東西にとりつく掘立柱回廊３間×３建間以上。	軒平瓦（OH-5 型式）
2	建物B	〃	南北	桁行９間(16.2m)・梁間１間(2.8m)かの掘立柱建物	
3	建物C	〃	東西	桁行３間(6.5m)・梁間２間(4m)の掘立柱建物	瓦片・石塊
4	建物D	〃	東西	桁行４間(5.6m)・梁間２間(3.6m)の掘立柱建物	
5	建物E	〃	東西	桁行１間(4.8m)・梁間２間(4.3m)の掘立柱建物	改築か
6	建物F	〃	東西	桁行2間(3.7m)以上・梁間2間(4.3m)の掘立柱建物	
7	瓦窯	〃		ロストル式平窯（焼成室縦1.3m・横2.1m、分焔壁７本・高さ約30cm）	軒瓦の出土なし
8	瓦窯			ロストル式平窯　７の瓦窯と同型同大で瓦も酷似	軒瓦の出土なし
9	溝	右京２次	東西	現存する南門のほぼ東延長上	
10	瓦溜り SK800101	立会8001次		(0.8m)×2.2m	7c末～8cの軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦・平瓦
11	開析谷	右京 232次	北西から南東	古墳時代から平安時代　幅10m 以上・深さ1.7m以上	軒平瓦・丸瓦・平瓦・灰釉・緑釉・弥生土器
12	溝	右京 318次	東西	鎌倉時代から安土・桃山時代の遺物が多い 幅３～４ｍ、深さ0.5m	車輪石・円面硯 輸入天目・軒瓦

とが指摘される。これらの遺物の中には、奈良時代から桃山時代の遺物の他にも、乙訓寺創建以前の遺物も出土している。このように本溝は一時に各時代の遺物が大量に投棄され、溝が埋められて整地された状況が認められる。これはどの様な状況の下に行われたものか明らかにしえないが、今後当地域における同時期の遺跡の状況を踏まえて、中世乙訓地方の様子が明らかにされることを期待したい。

最後に、今回の調査で出土した遺物の中から緑色凝灰岩製車輪石について考えてみたい。これは通常、前期古墳の副葬品として用いられるものであり、この他には同様の石製腕飾類として鍬形石や石釧がある。これらの遺物は、前期古墳の年代を考える際には欠くことのできないものの一つである。車輪石は部分的に摩滅の度合いは違うが、凹帯の低い部分や底面は平滑な面を保っている。おそらく本来の形は円形ではなく卵形のものであろう。この他にも小片で量的に少ないが、タガをもつ埴輪片が出土している。このように溝ＳＤ31801から出土した車輪石と埴輪は二次堆積の遺物であるが、未だ明らかでない古墳が埋もれている可能性を示唆する

ものとして今後留意されるものである。

なお、遺物の検討については平安京調査会小森俊寛氏に助言を賜った。

注 1　この他にも、船戸裕子、前田明美の御協力をいただいた。

2　吉本堯俊「乙訓寺発掘調査概要」『京都府概報』1967年

3　浪貝毅「第Ⅲ部　発掘と調査」『日本考古学年報』21・22・23　1968～1970年度版

4　中尾秀正「乙訓寺の瓦」『向日市報告書』第20集　1987年

5　注4に同じ

6　百瀬ちどり「乙訓寺とその周辺における奈良～平安時代の検出遺溝」『長岡京市報告書』第12冊　1984年

第３章　長岡京跡右京第322次（７ＡＮＩＯＫ－２地区）調査概要
――今里大塚古墳第２次調査――

１　は　じ　め　に

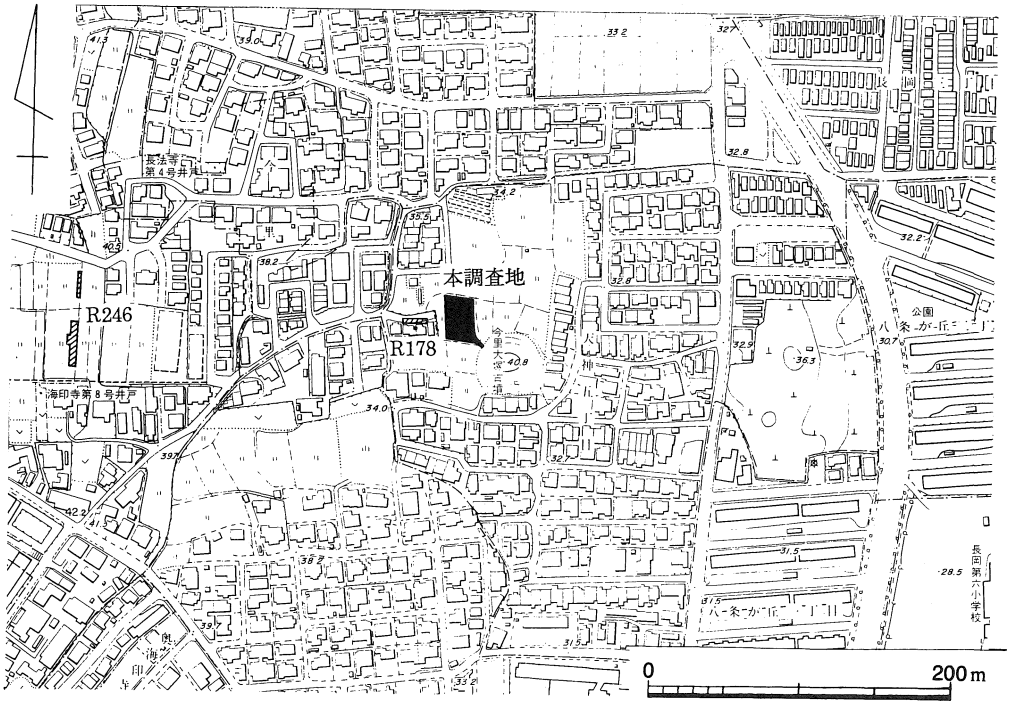
１．本報告は、1988年11月28日～1989年１月31日まで、長岡京市天神五丁目115-１・２において実施した長岡京跡右京第322次調査（今里大塚古墳第２次調査）に関するものである。

２．本調査は、今里大塚古墳の墳丘裾および周濠の規模等を確認する目的で、長岡京市教育委員会が主体となり国庫補助事業として実施した。現地での調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、木村泰彦が担当した。

３．調査実施にあたっては、土地所有者である田村忠雄氏をはじめ、近隣の方々のご協力を得た。特に湯川忠次氏には、水道、電気の供給を始め数々のご援助をいただいた。また調査中には、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏、大阪大学教授都出比呂志氏、立命館大学教授日下雅義氏、山城郷土資料館高橋美久二氏からご指導、ご援助を賜わった。記して謝意を表するものである。

４．調査後の図面・遺物整理は、占部真里を始め多くの方々の協力を得た。

５．本報告の執筆・編集は木村が行った。

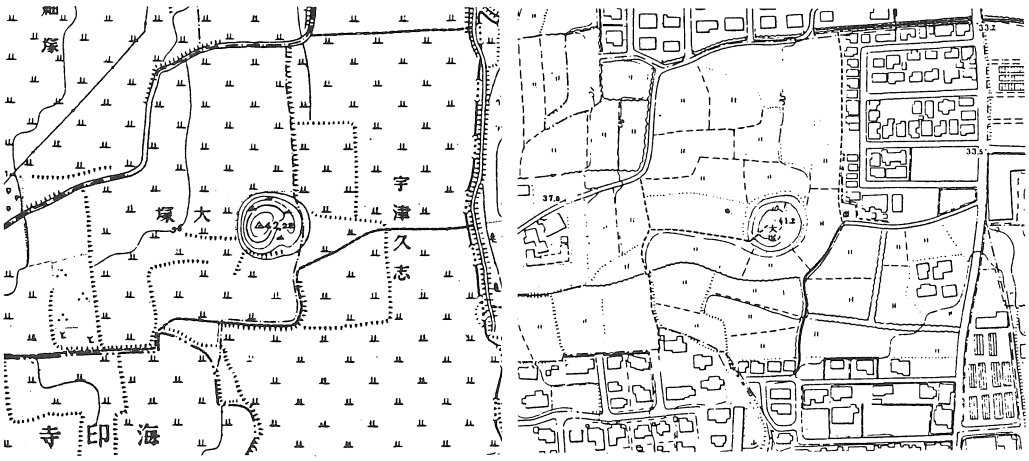


第20図　発掘調査地位置図(1/5000)

2　調　査　経　過

今里大塚古墳は、乙訓地域で最大の円墳としてまた内部に巨大な横穴式石室を持つことで有名である。場所は、阪急電鉄長岡天神駅の北西約700mの住宅地の真ん中に位置している。立地は当地の西方にある長岡丘陵から広がる緩扇状地上にあたり、北と南には東西方向の開析谷が存在するため古墳の位置する場所は東西方向の小高い丘状を呈している。現在では住宅に囲まれているが、古くは水田の中にひときわ高くそびえる古墳であったことは1922年作成の地図（第21図左）および付近の古老の話からも窺える。この古墳に関する記述で最も古いと思われるのは18世紀初めに書かれた『山州名跡志』である。それによれば、巻十乙訓郡今里のなかに「大塚　在二乙訓寺東野一土人號レ之以レ大　或云二小山一　是見レ陵然不レ詳」とあり、小山のように大きな古墳であったと記されている。[1] その後1968年になって京都府教育委員会によって測量が行われ、初めて具体的なデータが提示された。それによれば、墳丘は直径45m、高さ 5.5m、横穴式石室の玄室長６m、幅 2.5m、高さ３m以上、羨道長10m以上とある。[2] また、周囲の水田の畦、農道は周濠の痕跡を留めており、これを含めて完全な保存が必要であるとの指摘もなされている。これは第21図右に示した如くこの頃今里大塚古墳周辺で進行していた宅地化を懸念してのことであった。しかし開発はその後も進み、1971～1972年にかけて墳丘の東側と南側の周濠上に住宅が建築されるに至った。これに対して長岡京市ではこれ以上の破壊が進むのを防ぐため、1972年９月に墳丘および残された周濠部分を都市公園として活用することを決定し、建築物に対して厳しく規制を行うようになった。ただしそれ以外の部分での開発はさらに進行し、現在では完全に住宅に取り囲まれた形となっている（第20・23図）。

この様な状況の中、1984年９月に周濠の西側に接する水田部分で宅地造成が行われることになり、長岡京跡右京第178次（今里大塚古墳第１次）として発掘調査を実施することとなった。

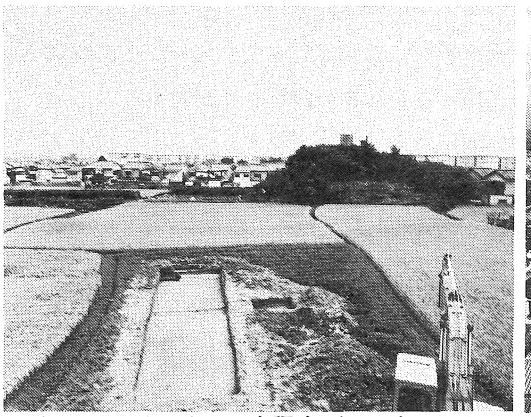


第21図　今里大塚古墳周辺地形図　左1922年、右1969年(1/5000)

調査の結果、南北方向の２条の溝が検出されたが、調査地が狭く又出土遺物も極めて少量であったため今里大塚古墳に関する遺構かどうかは断定し得ない状況であった[(3)]（第22・27図）。

1988年９月に、田村忠雄氏より今里大塚古墳周濠の北西部にあたる二枚の水田に駐車場を建設したい旨の連絡が長岡京市になされた。駐車場建設は１ｍ近い盛り土によるため地下遺構に影響はないものとして認可されたが、教育委員会ではその際に行われる擁壁工事での影響が懸念されることとなった。そこで周濠および墳丘の正確な規模の解明も含め、当該地に対し昭和63年度一般会計文化財保護費による国庫補助事業として発掘調査を実施することとなった。

調査は周濠規模の確認を主たる目的として、対象地の東辺および南辺に沿って幅６ｍ、南北25ｍ、東西23ｍのＬ字形トレンチを設定し、さらに墳丘裾の確認のためＬ字形トレンチの南東隅より墳丘に向って幅 1.5ｍのサブトレンチを設けた。南北方向の二枚の水田は約 0.4ｍの段差を持って東側に低くなっており、重機による掘削は東側の南北方向のトレンチから行った。耕作土と床土を除去した段階で、東側では茶灰色砂質土が、西側では地山および周濠埋土と推定される暗茶灰色砂質土が確認された。この暗茶灰色砂質土はさらに西側に広がっているため、急遽南北トレンチを西へ２ｍ拡張し、併せて東西トレンチの西側を６ｍ短縮することとした。以後人力によって精査を行ったところ、東側の一段低い水田では西半部は削平を受けているものの周濠埋土が残存し、さらに西に広がることが判明した。また東西トレンチ北側に於いても周濠肩が確認されたため、それらを追求して数回にわたって拡張をおこなった。そのため、最終的な調査トレンチは南北27ｍ、東西18ｍの平行四辺形となり、総調査面積は505㎡となった。調査の結果、周濠の痕跡と見られる落ち込みはさらに西側に広がっていることが判明し、サブトレンチでは、墳丘裾付近で墳丘盛り土の一部と思われる黒褐色土の堆積を確認した。また下層遺構として東西に蛇行する自然流路の存在も明らかとなった。現地調査は１月31日に終了したが、その後の協議の結果、土地所有者である田村忠雄氏のご協力により、破壊の危険性がある墳丘裾付近については、擁壁の設計変更を行い保護されることとなった。



第22図　右京第178次調査（1984年９月）

第23図　今里大塚古墳現状（東から1988年12月）

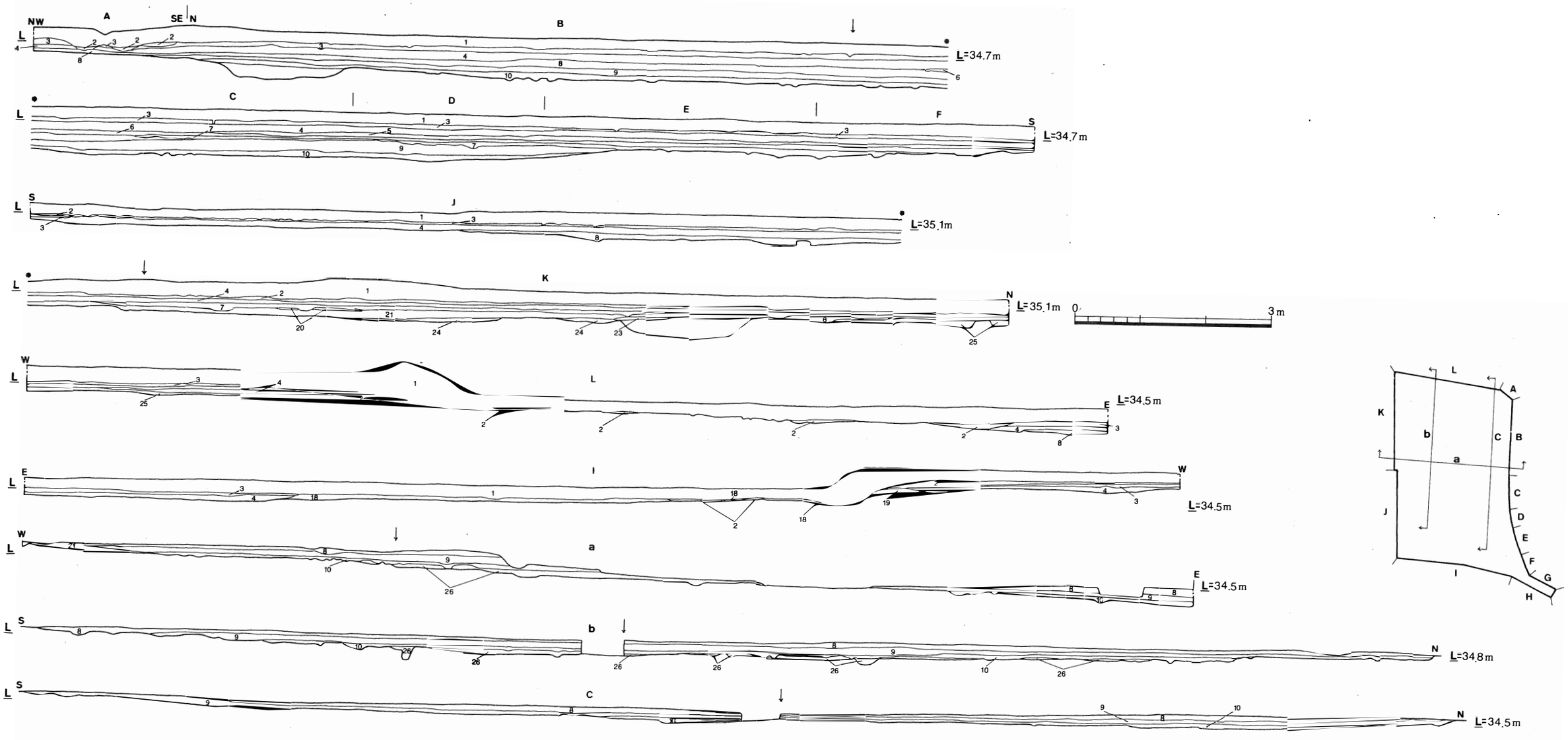
3　検　出　遺　構

今回の調査地は、前述した如く２枚の水田によって構成されており、西側の高い方の水田の標高は35.3m、東側では34.9mを測る。基本層序は耕作土（第１・２層）、床土（第３層）、茶灰色砂質土（第４層）の順で現地表下約30cmで地山に至る。地山は段丘礫およびその上に堆積した赤褐色粘質土を基本とし、トレンチ北半部ではこれを切り込んで堆積した黄灰色の粘質土～シルトによって形成されている（第24図）。

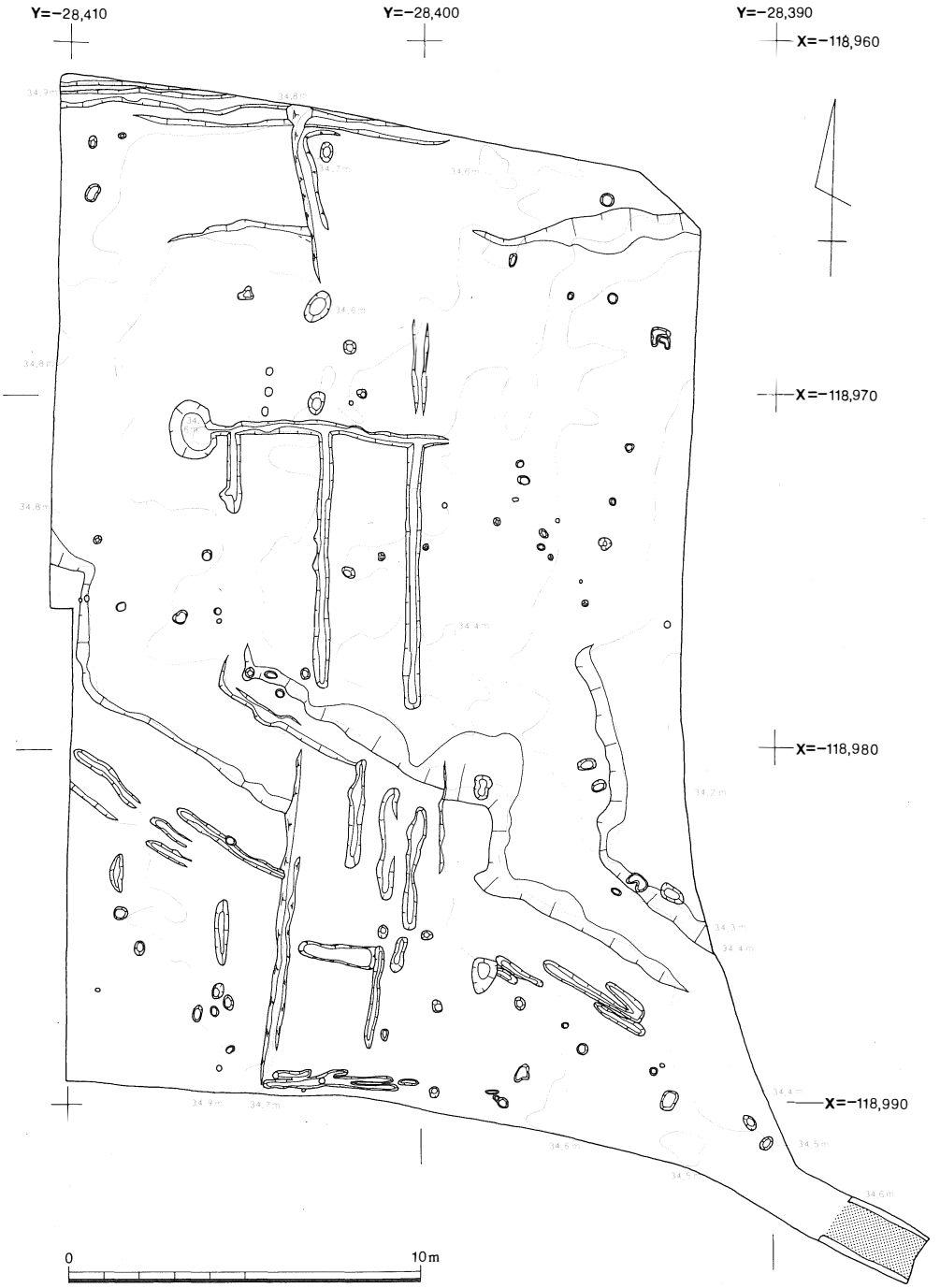
この地山面を検出した段階で今里大塚古墳周濠埋土の広がりが確認された。検出面での標高は西側で34.9m、東側で34.5mである。埋土は基本的に４層あり、上から暗茶灰色砂質土（第８層）、暗黄灰色砂質土（第９層）、暗灰褐色砂質土（第10層）、暗紫灰色粘土（第26層）の順でほぼ均一に堆積している。ただしトレンチ東辺部では暗茶灰色砂質土の上層に薄く３層（第５～７層）の堆積が見られ、また暗紫灰色粘土はトレンチ中央部付近にのみ堆積している。従って東辺部では暗灰褐色砂質土が最下層となる。またトレンチ西辺部では暗紫灰色粘土の下に暗赤灰色粘質土（第21層）の存在が認められ、さらに西方に広がっている。これらの層は旧地形と同様西から東へ緩やかに傾斜した堆積状況を示しているが、水田によってかなり削平を受けておりトレンチ中央部付近では第８・９層が見られず暗紫灰色粘土が露出している。

これらの層を掘り上げた状況を示したものが第25図である。周濠の痕跡と見られる落ち込みは非常に浅く、最も深いトレンチ東辺付近で 0.4m、西辺付近では 0.2m程である（第24図、図版14・15-1）。これは削平を受けている結果もあろうが、周濠は本来かなり浅いものであったと推定される。落ち込みの南肩は、不明瞭ながらも段を有して南東から北西方向に伸び、トレンチ西辺付近で北に折れた後、再び北西方向に伸びている。南肩の北側の斜面部分においても同一方向の段が存在しており、周濠はいくつかの段を持って構成されていたものと思われる。北側の肩はさらに不明瞭で、トレンチの北西隅と南東隅付近に東西方向の段が見られる。これは南の肩で見られた如く数段ある内のひとつであり、本来の北肩は従来からいわれている如く北側にある水田の畦畔がそれにあたるものと思われる。底部の標高は、東で34.2m、西で34.8mを測り、コンターラインからも明らかな様に中央の深い部分は東に緩やかに傾斜しながら南の肩と同様北西から南東方向に伸びている。また周濠底部付近からは多数の小ピットと南北方向の溝３条およびそれらに接する東西方向の溝１条、さらにその西側で円形の土壙が検出された。溝は幅約 0.4cm、深さ５cm前後の浅いもので、長さは東西方向の溝が 6.8m、南北方向のものは、西から 2.3m、 7.2m、7.3 mを測り、それぞれ北側で東西方向の溝と接続している。円形の土壙は南北 1.6m、東西 1.3m、深さ８cmを測り、東西溝の西に接続している。これらの遺構の埋土はいずれも暗紫灰色粘土であり、周濠が埋没する以前に存在していたことは明かであるがその性格は不明である。

1. 耕作土
2. 〃（やや砂質）
3. 床土（黄色粘質土）
4. 茶灰色砂質土
5. 灰褐色砂質土
6. 灰茶色砂質土
7. 淡灰褐色砂質土
8. 暗茶灰色砂質土
9. 暗黄灰色砂質土
10. 暗灰褐色砂質土
11. 暗灰褐色砂質土（地山混り）
12. 暗灰色砂土
13. 黄灰色砂質土
14. 暗灰色砂質粘土
15. 黄灰色土（地山混り）
16. 暗灰色砂質土
17. 暗黄灰色粘土（地山混り）
18. 黄灰色粘土（床土）
19. 暗黄灰色砂質粘土
20. 暗赤褐色粘質土
21. 暗赤灰色粘質土
23. 暗赤褐色粗砂
24. 暗茶灰色砂粘土混り
25. 灰白色粗砂
26. 暗紫灰色粘土



第24図　調査地断面図(1/50)



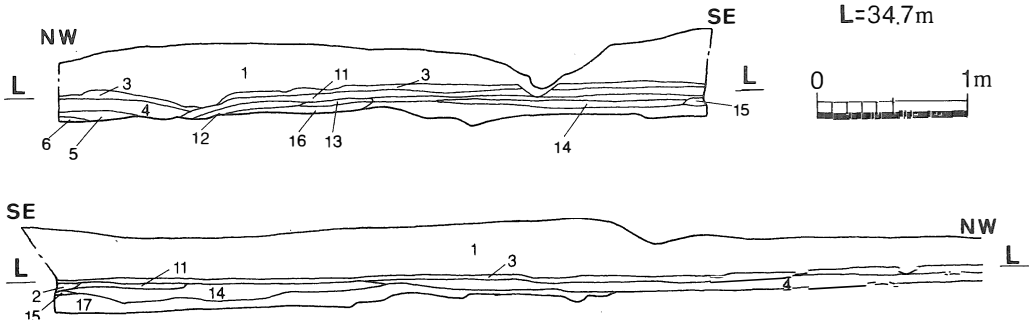
第25図　検出遺構図(1/200)

また周濠の南側１～２ｍの付近には南の肩と並行する浅い数本の溝が存在する。いずれも幅0.3m前後、深さ５㎝程で、長いもので４ｍ、短いものでは 0.7mを測る。埋土はすべて周濠最上層の暗茶灰色砂質土である。これらは鋤の痕跡と考えられ、周濠が埋没する最終段階には存在していたものである。

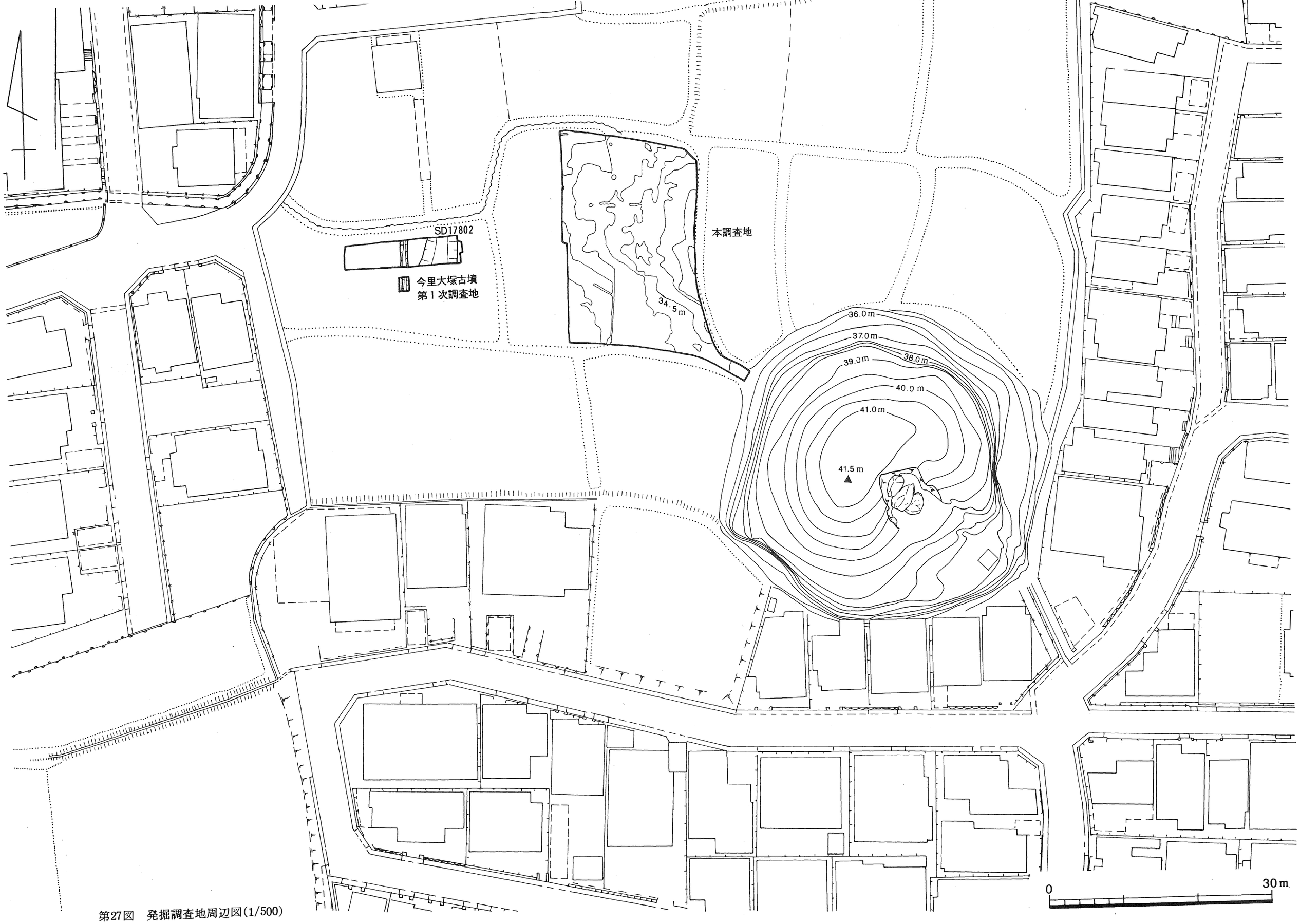
この他の遺構として、トレンチ南側付近では南北方向の浅い溝があるが、これらはすべて水田耕作時における鋤およびトラクターの痕跡である。さらに小ピットも存在するが遺物がまったく出土しておらず、また削平により床土直下で検出しているため明確な層位との対応関係は不明である。埋土は暗褐色粘土で周濠底部付近の埋土に類似しており、あるいは先述した周濠底部付近で検出された溝、ピットと同時期の可能性もある。

以上の結果、トレンチ東側では従来周濠の痕跡を留めていると言われていた水田畦畔と落ち込みが一致すること、さらにその落ち込みは円形に巡らず西方に伸びてゆくことが判明し、南肩の状況から今里大塚古墳は前方後円墳であった可能性が高いと思われる。従って、南側で検出された南肩と同一方向の鋤跡は前方部を削平した際のものとも考えられる。

サブトレンチ　墳丘裾付近に設定したサブトレンチでは、墳丘側南東部付近で地山の上に堆積した黒っぽい土の広がりを確認した（第25図網部分）。壁面に沿って細く絶ち割りを入れて断面の確認を行ったところ、これらは約 0.2mの厚さでいくつもの薄い層の堆積で構成されていることが判明した。最下層の暗黄灰色粘土（第17層）は地山面から 0.1m程低い所に堆積しており、上面で地山面と同一レベルとなっている。その上の墳丘側に黄灰色土（第15層）そして暗灰色砂質粘土（第14層）、暗灰褐色砂質土（地山混じり）（第11層）の薄い堆積があるが暗灰色砂土（第12層）、黄灰色砂質土（第13層）、暗灰色砂質土（第16層）、暗黄灰色粘土（第17層）は北東部断面にのみ見られ、南東部断面では確認できないところから、極めて小さな単位の層と思われる。土地境界のため、残念ながらこれ以上墳丘側に調査を及ぼすことは出来なかったが、上記の状況からみてこれらの層は今里大塚古墳の墳丘盛土の一部と考えて間違いはないであろう。ただ削平を受けているため本来の墳丘裾は不明である。



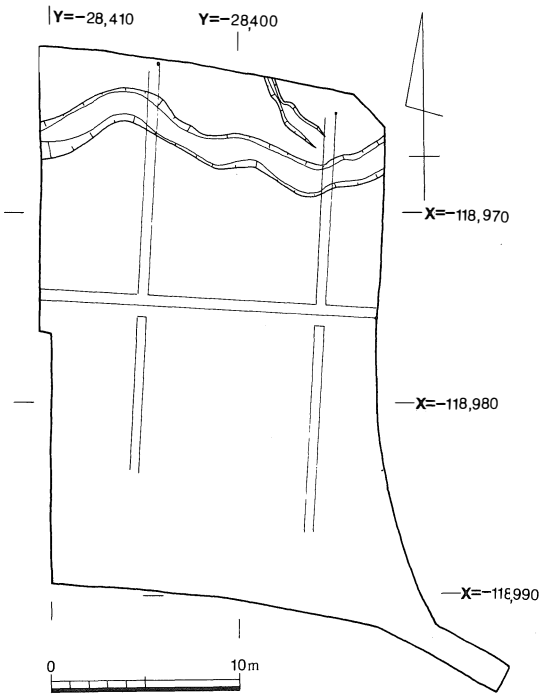
第26図　サブトレンチＧ・Ｈ区断面図(1/50)



第27図　発掘調査地周辺図(1/500)

下層遺構　周濠内の埋土をすべて除去した段階で、トレンチの北側において下層に２本の流路の存在することが確認された。この内の１本は、西から東に向かって蛇行しながら流れていたもので、最大幅２ｍ、最小幅 1.2m、深さは最深部で 0.4m、浅い部分で 0.2mを測る。また溝底部における標高は、東側で34.2m、西側で34.5mである。もとよりこれは今里大塚古墳の周濠掘削により上面を削平されたものであり、本来は幅、深さともにもう少し大きなものであろう。もう１本の流路は北西方向から南東方向に流れる小規模なもので、幅は 0.5～ 0.8m、深さは 0.1mと非常に浅く、本来は南側で東西方向の溝と合流していたものと思われるが、先述の如く削平を受けており合流部分は不明瞭である。この溝の底部での標高は、北西で34.5m、南東で34.4mを測る。これらの溝内埋土は灰白色～黄灰色の砂で占められており、かなりの水流があったことが窺われる。特に東西方向の溝においては淵にあたる部分でかなり抉られている箇所がある。この流路は、当調査地の西方約700mにある谷山池付近の開析谷より流出したものと推定され、これは当調査地の北半部の地山を形成している黄灰色粘質土～シルトを堆積したものと同様の営力によるものである。従って今里大塚古墳造営以前まで、規模を縮小しながらも流出、堆積が行われていたものと思われる。[(4)]

遺物は、北西から南東方向に流れる小規模な流路ではまったく見られず、東西方向の流路も極めて少量で、西半部より摩滅の著しい縄文土器かと推定される小片が３点と有舌尖頭器が１点（第32図－40）出土している。



第28図　下層流路平面図(1/400)

第29図　下層流路全景（西から）

第30図　流路断面（東から）

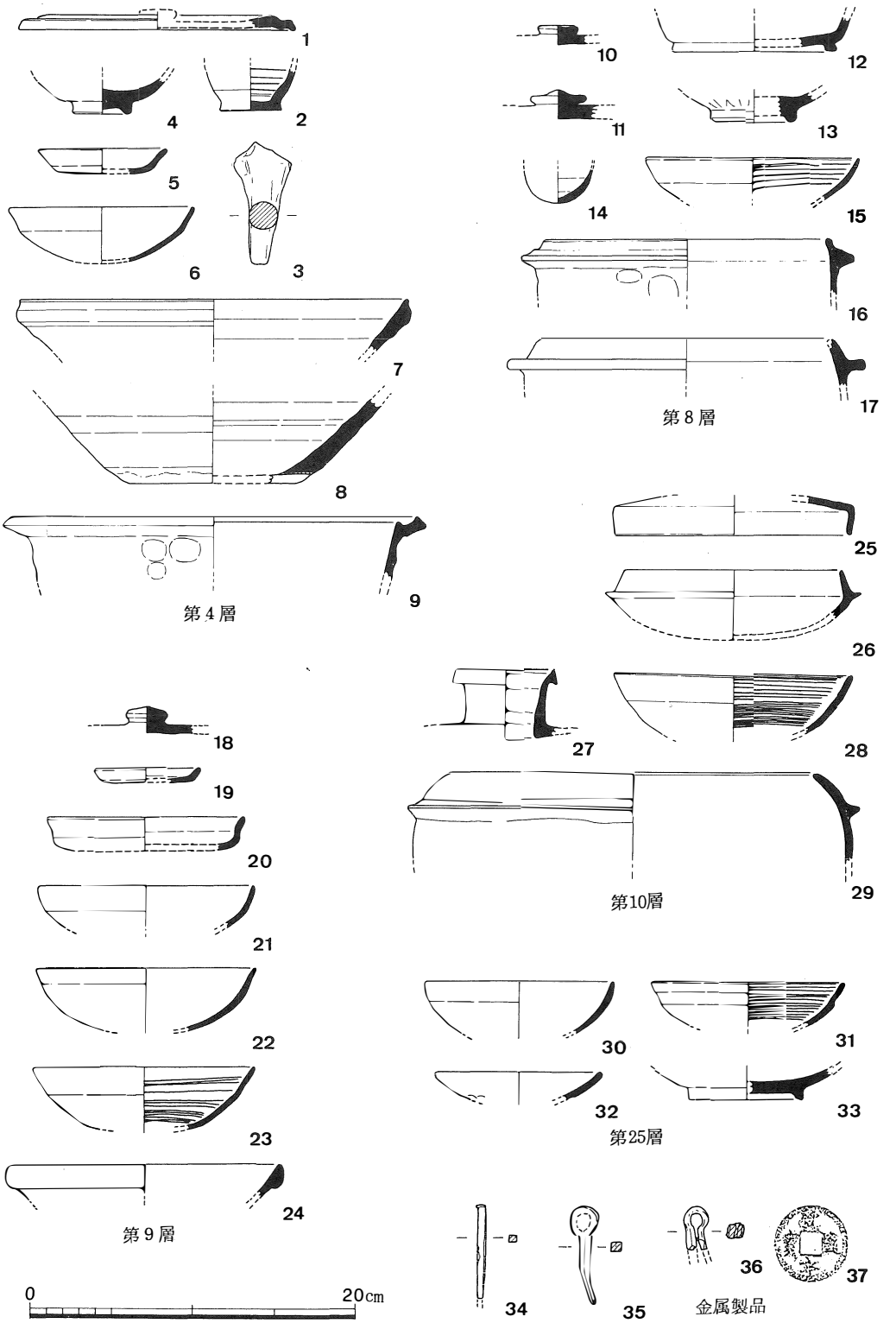
4　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は調査面積に比べると非常に少なく、整理箱にして3箱程度しかない。また大半が小片であるため図示し得るものも極めて少数であった。遺物は、床土下の茶灰色砂質土（第4層）が最も多く、次いで今里大塚古墳周濠埋土である暗茶灰色砂質土（第8層）、暗黄灰色砂質土（第9層）、暗灰褐色砂質土（第10層）、灰白色粗砂（第25層）の順で下層に行くに従い少なくなる。このうち第25層は周濠北西に薄く堆積していたものである。出土遺物の大半は中世のもので占められており、他に平安時代、長岡京期、古墳時代、弥生時代のものが若干含まれている。以下、各層毎に遺物の概略を述べて行くこととする。

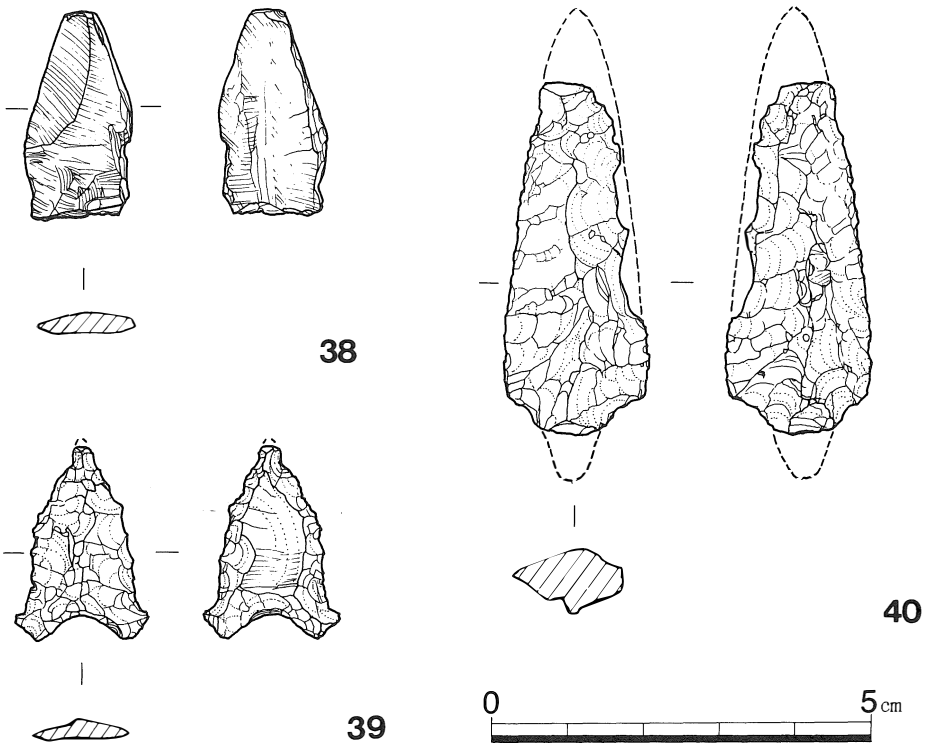
第4層出土遺物　1は須恵器の蓋、3は土馬の右前脚部で長岡京期に含まれると推定されるもの。2は糸切り底の須恵器の壷Lで平安時代前期頃のものである。中世のものには青磁の碗（4）、土師器の小皿（5）、瓦器埦（6）、東播系の摺り鉢（7・8）、瓦質の鍋（9）等があり、このうち9の鍋が最も新しく14世紀中頃に比定されよう。従って第4層の堆積時期もその前後と考えられる。この他には瓦器の小皿、瓦質の羽釜、灰釉陶器皿、須恵器坏B・壺・甕・鉢、土師器の坏・皿・埦等の小片がある。また鉄釘（34）も出土している。なお第4層上面で寛永通寶（37）の出土を見たがこれは上層の床土（第3層）に含まれるものである。

第8層出土遺物　長岡京期のものとしては須恵器の坏蓋つまみ（10・11）と坏B（12）がある。16は土師器の羽釜で平安時代中頃のものである。中世の遺物のうち瓦器埦で実測できたものは15のみである。内面には粗い暗文を施し、外面には見られない。その他として青磁の碗（13）、土師器の紅壺（14）、瓦質の羽釜（17）があり、概ね13世紀後半から14世紀初めの頃の遺物が多い。また金属器として頭部を環状に折り曲げた鉄製品（36）があり、同様の完形品（35）が暗赤褐色粘土層（第21層）からも出土している。図示し得なかった物としては土師器皿・高坏脚部、須恵器の壺・甕・瓦質鍋、緑釉陶器皿等がある。

第9層出土遺物　長岡京期と思われる須恵器蓋のつまみ（18）以外は中世のものである。土師器の皿には大小があり、直径は前者（20）が12㎝、後者（19）は約6㎝を測る。21～23は瓦器の埦であるが、摩滅が著しく23のみ内面に粗い暗文が確認できる。外面に暗文はなく、端部は丸くおさめている。24は玉縁の白磁碗である。これらの遺物は13世紀中頃から後半を中心とするものが多いが、図示し得なかったものには13世紀末頃の遺物も含んでいる。またこれ以外に2点の石器が出土している（第32図）。38は頁岩又は粘板岩製の二等辺三角形を呈する磨製石器で、側縁および下部を欠失している。39はサヌカイト製の五角形を呈する凹基式の打製石鏃で、片面に大剝離面を広く残す。前者は弥生時代中期頃、後者は縄文時代の可能性がある。その他には土師器の坏・皿・埦・羽釜、須恵器の坏・蓋・壺・甕、瓦器皿、瓦質の羽釜、青磁碗、緑釉陶器等がある。



第31図　出土遺物実測図(1～36－1/4 ,37－1/2)



第32図　出土石製品実測図(1/1)

第10層出土遺物　26の須恵器の坏身は古墳時代の遺物として唯一図示できたものである。口縁部は内傾して端部は尖り気味に丸く終わる。現存する体部にはヘラケズリは認められず、6世紀前半頃に比定されよう。長岡京期のものとしては薬壺の蓋（25）、二段成形の壺口縁部（27）がある。中世では28の瓦器椀と29の内彎する口縁部を持つ瓦質の羽釜が図示し得たものである。瓦器椀は破片のため直径、傾きに不安はあるが、内面には比較的密な暗文を施し、口縁端部には沈線を巡らす。他の破片にも同様の特徴を持つものが多く、13世紀中頃を中心とするものであろう。この他に土師器の坏・皿・椀・羽釜・甕、須恵器の坏・蓋・壺・甕、瓦質の羽釜・鍋、製塩土器、平瓦等の出土がある。

第25層出土遺物　30・31は瓦器の椀、32は土師器の皿の小片、33は緑釉陶器の高台部である。瓦器椀は図示しなかった中に口縁端部に沈線を巡らすものがある。この層からの出土遺物は少なく、他に土師器の椀、須恵器の坏・甕、瓦質の羽釜等の小片および結晶片岩がある。

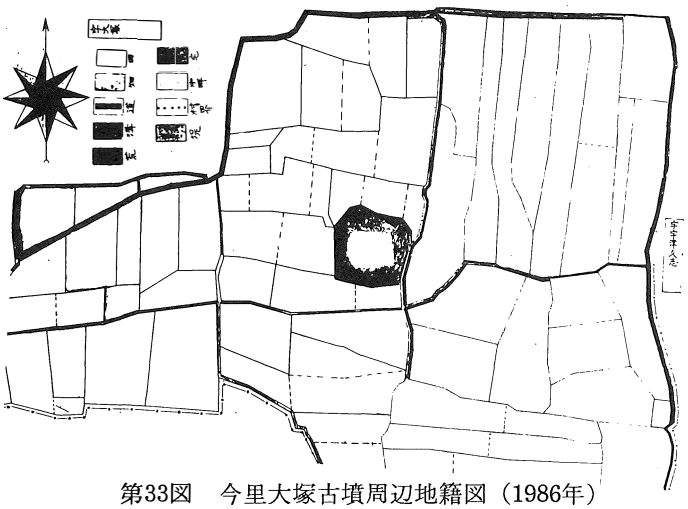
下層流路出土遺物　検出遺構のところでも触れた如く、摩滅した土器片3点と有舌尖頭器（40）が出土している。石材はサヌカイトで先端、側部、舌部に欠損が認められるがこの部分も風化している。全体に斜方向右上がりの押圧剝離が見られ、右側部から左側部の順に行っている。同様の手法は向日市殿長遺跡でも見られ、[5] また形態的にも類似するものがある。[6]

5　ま　と　め

今回の調査では、ほぼ当初の目的どおり今里大塚古墳の周濠跡を確認することができたと共に周濠が円墳形に全周せず、さらに西方に伸びるという新たな知見も得ることができた。これは検出遺構の項でも述べた如く前方後円墳の可能性を示すものであり、今里大塚古墳の再評価にもつながると思われるため、もう少しこれに関して検討して行きたいと思う。

まず周濠外縁部の痕跡と見られる周辺の畦畔であるが、東半部では約20mの幅で墳丘を同心円状に巡っているものの西半部では直線的に西側に伸びている。従来はこれを開墾時による乱れと考え、墳丘のすぐ西側にある四角形の水田の西側畦畔を周濠外縁部として円形に巡る周濠に復元されてきた。しかしながら調査の結果では落ち込みの北肩と北側の畦畔が一致し、むしろ墳丘西側水田部に乱れがあると考えられる。従って西半部で直線的に西側に伸びる畦畔は南北とも周濠の痕跡を残していると見てよいと思われる。このようにしてみるならば第21図に見られる畦畔はまさしく盾形周濠の痕跡を残しているものといえるであろう。さらに墳丘西側にある２枚の水田の南側畦畔は、南の水田と約0.5mの段差を有して直線的に伸びており、前方部南辺の名残である可能性が極めて高いものといえる。

次に墳丘部分について見てみたい。第27図の中の墳丘部分については1968年に京都府教育委員会が実測したものを使用させていただいた。この図をよく見ると墳丘西側の斜面、標高35.5～38.5mのコンターラインが約20mにわたって直線的に伸びていることが解る。これは墳丘の他の箇所における崩れよりも大きくまた直線的である点でかなり異なっている。この箇所はちょうど前方部に推定している部分との接点にあたることからこれを前方部を削平した際の痕跡とみることができよう。ちなみに削平の時期であるが、可能性のひとつとしては、乙訓地域で検出される他の古墳と同様、長岡京造営時による破壊が考えられる。しかし周濠内の埋土は13世紀後半を中心とした遺物で占められており、周濠の埋没時期と墳丘の削平時期が大きく隔たるものとは考えにくい。さらに墳丘削平時における鋤跡と考えられる溝状遺構の埋土はいずれも周濠内埋土最上層の暗茶灰色砂質土であることなどから削平の時期を13世紀末～14世紀初め頃と考えてよいだろう。



第33図　今里大塚古墳周辺地籍図（1986年）

38　まとめ

以上のことはいずれも決定的なものとはいえないものの、これらの状況から見れば円墳とするよりも前方後円墳として復元するほうがより妥当性があると言わざるをえない。そこで注目されるのが今里大塚古墳第１次調査において検出されている溝ＳＤ17802 である。この溝は北東～南西方向にやや傾いた幅４～5.2 ｍ、深さ0.4 ｍを測る浅いもので、不明瞭な肩を持ち底部に小ピットが存在するなど[7]、今回検出された周濠の状況に非常に類似する。出土遺物が非常に少ないため時期決定が困難であるが、当溝が今里大塚古墳に関連する遺構である可能性は高いと思われる。仮にそうだとすればこの溝は前方部の西側を画する周濠、あるいは外堤が存在すればその外側の溝ということになるであろう。ちなみにこの溝の東肩を前方部端として復元すると全長80m強の前方後円墳となる。これは石室の規模およびその長幅比から推定される年代（６世紀末）[8]などからも嵯峨野地域にある京都府南部最後の前方後円墳である蛇塚古墳に匹敵するものである。従ってこのことから乙訓地域の首長墓系列のみならず山城地域の勢力関係も再考する必要があろうかと思われる。すなわちこの時期山城全域に覇権を及ぼしていたと考えられる嵯峨野地域の首長層に対峙するこの首長の性格、および５世紀中葉以後恵解山古墳以来大規模な前方後円墳が築かれなかった乙訓南部地域において、再びこのような古墳が築かれることになった背景などである。もちろん今これに関して述べることは不可能であり今後の検討課題としておきたい。

今回の調査では円墳を前提としていたため、予算、期間の関係上これ以上西側部分への調査は行い得なかった。そのため残された問題は多いと思われる。特に前方後円墳としての確実な遺構を確認すること、および前方部だけではなく後円部も含めた正確な形状・規模の把握が必要であろう。また近年土砂の流入の著しい石室の整備も当面の課題だといえる。これらによって初めて今里大塚古墳の正確な保存・整備・活用が可能となるものといえるだろう。

注　1　『山州名跡志』臨川書店「新修京都叢書」第15巻　1969年７月

2　堤圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『京都府概要(1968)』1968年３月

3　岩崎　誠「右京第178次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和59年度　1985年12月

4　日下雅義氏の御教示による。

5　岩崎　誠「乙訓地域の旧石器資料集成」中山修一先生古稀記念事業会『長岡京古文化論叢』1986年６月

6　山中　章「長岡宮跡第176次調査概要」『向日市報告書』第21集　1987年３月

7　注３に同じ。

8　都出比呂志「古墳時代」『向日市史』上巻　1983年３月

第4章　祭ノ神遺跡第1次（8ＬＳＪＴＤ－1地区）調査概要

1　は　じ　め　に

1．本報告は、1988年12月13日から1989年１月６日まで、長岡京市長法寺谷田（宗教法人長法寺所有地）において実施した祭ノ神遺跡第１次発掘調査に関するものである。

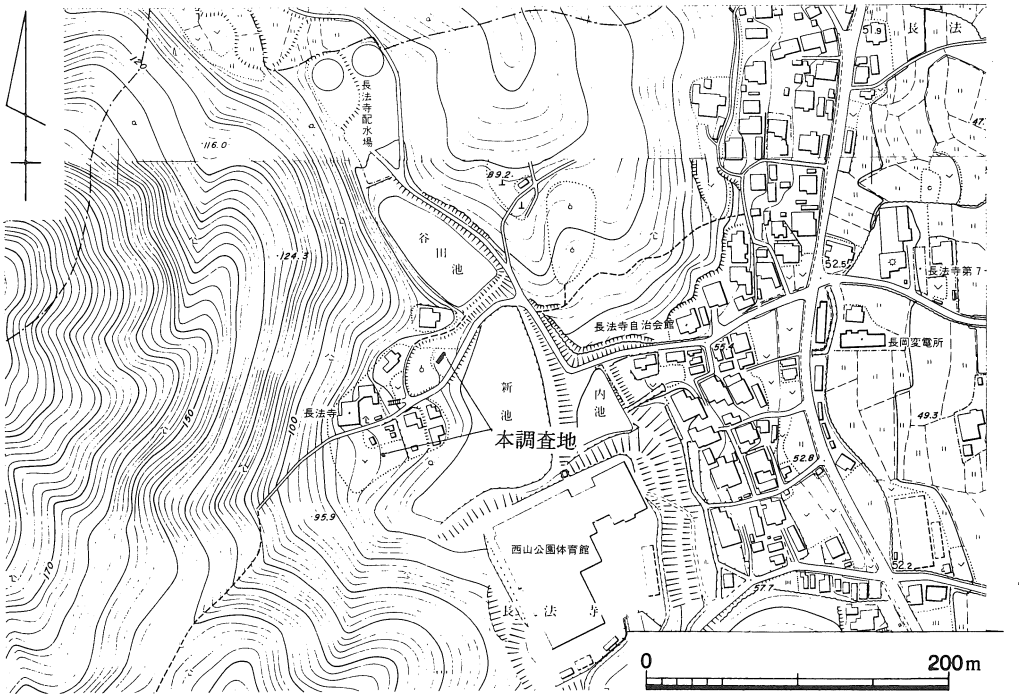
2．祭ノ神遺跡は、これまで中世遺物が散布することで周知されていたが、此度国庫補助事業として遺跡の性格等を確認することになった。

3．調査は現況で調査可能な敷地に対して２ヶ所のトレンチを設定して実施した。調査面積は１トレンチ17.2㎡、２トレンチ 5.2㎡の合計22.4㎡である。

4．現地調査および整理作業は長岡京市教育委員会が主体となり、調査員は（財）長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、小田桐淳が担当した。

5．調査の実施にあたり、土地所有者である宗教法人長法寺・代表役員川西寂紹氏には数々の御協力を得た。また調査中および整理作業にあたり、京都文教短期大学名誉教授中山修一氏には多くの御指導をいただいた。

6．調査後の遺物実測は占部真里が主に行い、編集および執筆は小田桐が行った。



第34図　発掘調査地位置図(1/5000)

2　調　査　経　過

祭ノ神遺跡は、長岡京市長法寺祭ノ神に所在するため池（新池）の池底に中世遺物が散布していることから、この池が築かれている谷筋を範囲として認定された散布地である。

この遺跡の発見は長岡京市文化財保護審議委員平井三千彦氏の長年にわたる分布調査成果の１つであり、氏の御教示により長岡京市教育委員会および（財）長岡京市埋蔵文化財センターが現地踏査してその存在を確認した。

長岡京市教育委員会では、この遺跡を長岡京市遺跡地図〔第２版〕（昭和62年３月発行）に発表するとともに、昭和63年度国庫補助事業の１つとして遺跡の性格・範囲・時期などを追求する目的で調査を実施することにした。

祭ノ神遺跡の内容に関して予想されることの１つに寺院関係があげられる。遺物が採集された新池の西方には天台宗延暦寺派の寺院である長法寺が存続している。この寺院は平安時代に創建され、一時は12の堂宇を誇っていたと伝えられており、大字名にもなっている。寺域は寺院が所在する谷の入り口付近が通称「大門」と呼ばれていたことから現在の長法寺祭ノ神から谷田にかけての谷筋一帯に広がっていたと考えられる。

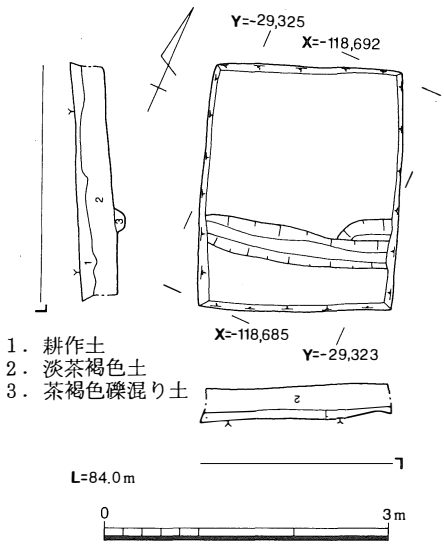
調査トレンチは宗教法人長法寺所有地内に２ヶ所設定した。１トレンチは新池の西隣りにあたる長法寺駐車場に４ｍ×15ｍの大きさで設定した。２トレンチは本堂の南隣りの畑地に２ｍ×２ｍの大きさで設定し、溝が検出されるに至って一部拡張した。以下トレンチ毎に概要を報告する。

3　検　出　遺　構

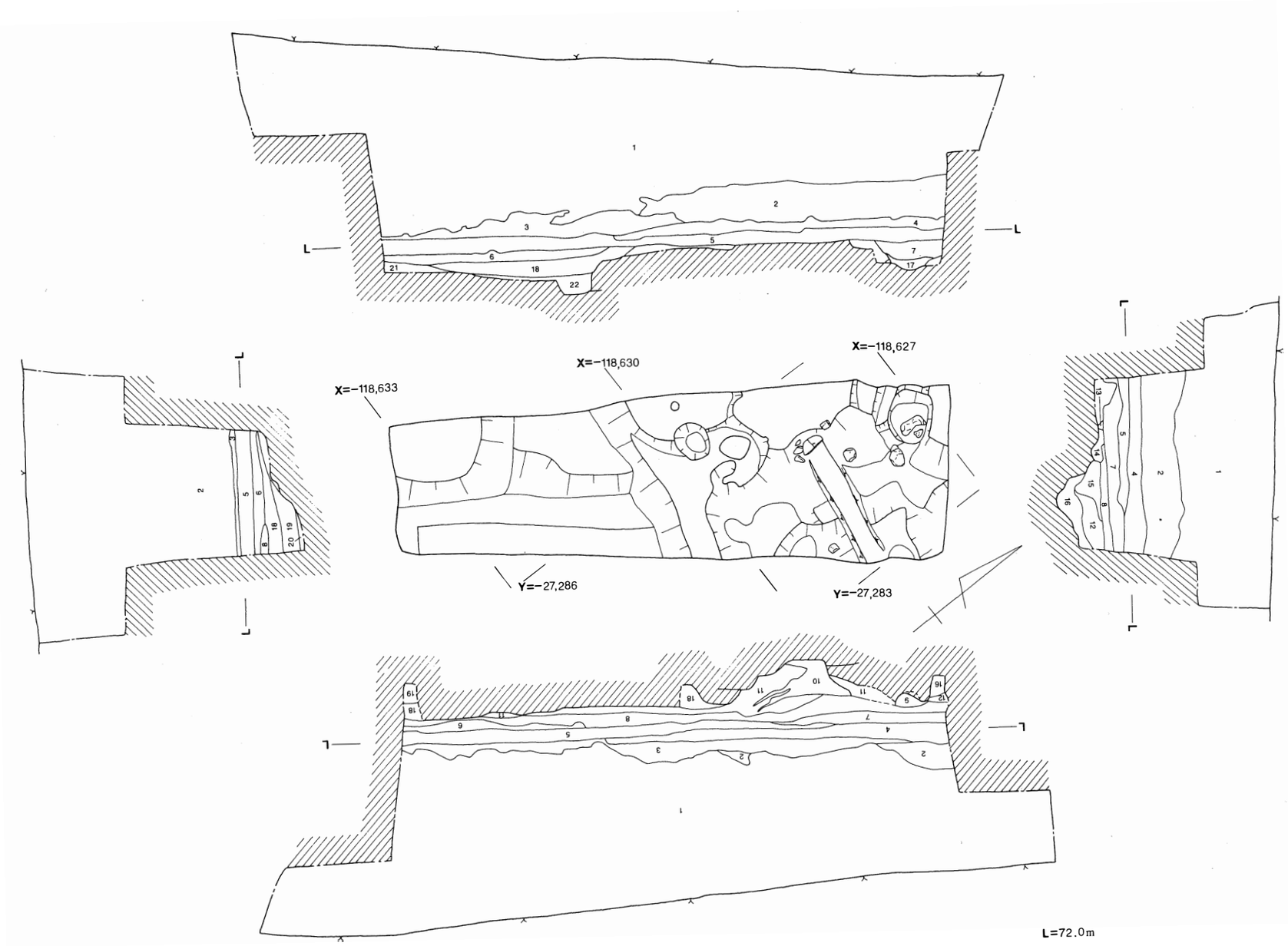
１トレンチ　調査地の駐車場は本堂へ向かって高くなってゆく傾斜地となっているが、駐車場になる前は、水田が段々にあったという。

掘削してみると盛土層が２ｍ～ 2.7ｍあり、途中でトレンチ幅を狭めざるを得なかった。このため調査面積は予定より大幅に狭くなった。

盛土以下の堆積は旧耕作土が２層認められ、その下には第５層（淡緑灰色砂質土）が10～20㎝の厚さでほぼ全面を覆っている。第６層までが近世以降の新しい堆積である。調査は耕作土までを重機で掘削し、第５層以下を人力によって掘り下げた。第５層を除去する



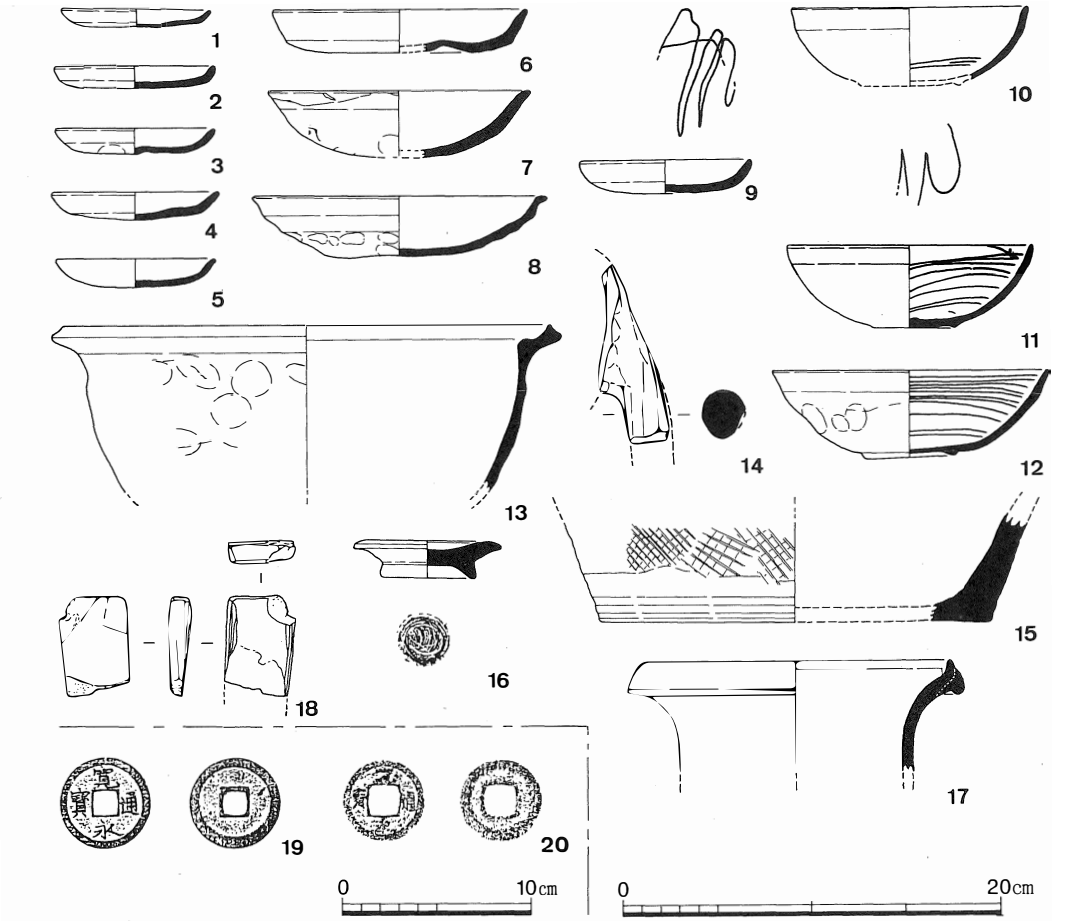
第35図　２トレンチ平・断面図(1/80)



1．盛土Ⅰ
2．盛土Ⅱ
3．耕作土Ⅰ
4．耕作土Ⅰ
5．淡緑灰色砂質土
6．濃緑灰色粘質砂
7．明緑灰色砂質土
8．淡灰褐色砂質土
9．濁茶褐色土
10．灰茶色粘質土
11．灰褐色砂と砂質土との互層
12．淡緑褐色砂質土
13．明黄白色細砂
14．濁黄褐色砂礫
15．灰色砂質土
16．淡灰緑色細砂
17．灰茶色砂質土
18．暗灰色礫混り土
19．暗灰色粘質土
20．灰緑色砂質土
21．緑褐色色礫土
22．明緑灰色粘質砂

0　5m

第36図　1トレンチ平・断面図(1/80)



第37図　出土遺物実測図(1/4)

と、トレンチ中央部で明緑灰色粘砂の無遺物層が検出され、これをベースとしてトレンチ東部で溝状に落込む第７層～第17層の堆積があり、トレンチ南部では谷斜面の堆積と考えられる第18層～第22層が認められた。

２トレンチ　南南東に向かって若干の傾斜をもつ畑地での調査で、耕作土層を10cmほど下げると中世遺物小片を含む淡茶褐色土層の堆積が20cmほどの厚さであり、この層を除去した濁黄褐色礫混り土層上面で、西で南に振れる溝ＳＤ01を検出した。この溝は幅40cm、深さ10cmの規模をもつ溝である。

４　出　土　遺　物

ここに報告する遺物は１トレンチから出土したものである。２トレンチでは瓦器・土師器の細片が出土したのみで、器形のわかるものはない。ＳＤ01からは遺物は出土していない。

１トレンチの各層から出土した遺物は、堆積状況および時期によって３期に大別される。

44　まとめ

Ⅰ期　　堆積層では第18層以下の堆積で、北西から南東に傾斜する斜面の堆積となっている（第36図・トレンチ南西断面図参照）。遺物は第18層から７の土師器椀、17の弥生時代中期の壺が出土した。第19層からは８の土師器皿がほぼ完全な形で出土した。この皿は口縁端部外面を強くなでられて外反している。体部外面は未調整で、成形時の凹凸を残している。

Ⅱ期　　第７層～第17層までの堆積で、北から南へ延びる谷底状を呈しており、谷川の流れによる堆積と考えられる。遺物は第８層から４の土師器小皿、９の瓦器皿が出土した。第10層からは11の瓦器椀、14の瓦器三足羽釜の脚部が出土した。第11層からは１～３・５の土師器小皿、６の土師器皿、10・12の瓦器椀、13の瓦器鍋、18の手持ち用砥石が出土した。これらは完形品を含む大ぶりの破片が多く、第11層の中でも底付近に周辺部から落ち込んだ様な状態で出土している。

Ⅲ期　　第５層からは15の須恵器壺底部、16の灰釉陶器碗、20の寛永通寶が出土した。第６層からは19の寛永通寶が出土している。これらの層からは他に桟瓦の破片も多く出土している。

5　ま　と　め

以上今回の調査によってⅠ～Ⅲ期の当地の変遷が確認された。これらの時期はⅠ期が平安時代、Ⅱ期が鎌倉時代、Ⅲ期が近世以降となる。これ以外に二次堆積ではあるが弥生時代の土器が出土している。17の壺以外にも叩き目をもつ甕の体部片も出土しており、検出されたⅠ期の斜面上方に弥生遺跡が存在する可能性を示している。調査地の南方１つ山を隔てた尾根上には弥生時代中期から後期にかけての集落跡である谷山遺跡があり、関係が注目される。

平安時代では８の皿が９世紀後半から末葉にかけてのものであり、７の椀はもう少し古い要素をもっている。これらの土器から平安時代前期段階の遺構が存在する可能性が高い。長法寺の創建は寺伝によると延喜年間（10世紀初頭）とされており、今回出土の土器と長法寺との関係が創建時期とともに問題となってくる。第５層出土の托もⅠ期に属するものである。

鎌倉時代の遺物は瓦器椀・皿、土師器皿などのセットから橋本編年Ⅲ－２段階と考えられる。これらの遺物は谷川の中に落込んでいたもので、近隣に人の居住があったことをうかがわせる。その性格として現段階では長法寺との関連を考えるのが妥当であろう。２トレンチで検出されたこの時期の遺物包含層及び溝もこのことを裏付けるものである。

近世以降の堆積はこの頃から当地が耕作地となったことを示している。

このように今回の限られた調査では明確な寺院に関係する遺構は検出されなかった。しかし出土した遺物は祭ノ神遺跡の存在を再確認するものであり、散布地から一歩内容を深めたといえよう。特に弥生時代・平安時代に関しては初出土であり、今後当遺跡の調査を進める指針として重要な成果となった。

付　載　長岡京市埋蔵文化財発掘調査に伴う基準点測量

例　　言

1．本資料は、長岡京市埋蔵文化財発掘調査を実施するために設置した基準点の測量成果に関するものである。なお、長岡京市域では昭和52年度から昭和58年度まで京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターの三機関によって設置されてきた。ところが、設置後長時間を経たため、基準点の精度低下や基準点の欠損が生じるとともに開発区域の変動に伴い基準点の不足が生じた。このため、長岡京市教育委員会は三ヶ年で既設点の再測と新点の設置を計画した。本年度はその１年目として市域の南部で行った。

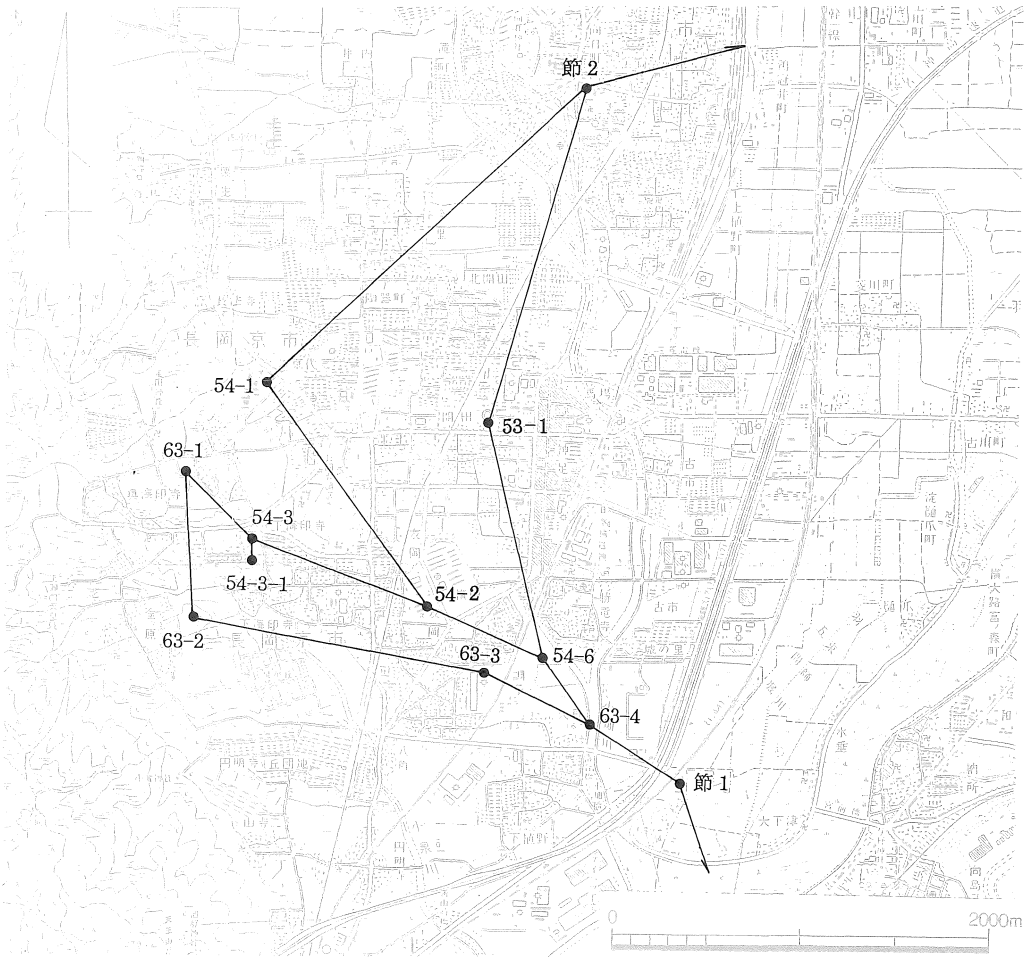
2．基準点測量作業は、多角基準点測量により国家三角点（Ⅲ．西河原、Ⅲ．生津、Ⅳ．美豆町）を用い、建設省公共測量作業規定の三級基準点測量を適用し、実施した。ただし、水準高は最終年度に水準点からの測量により調整する。

　なお、作業は写測エンジニアリング株式会社が行った。

3．この基準点の座標は、国土調査法施行令（昭和27年）で定められた17座標系によるもので、座標系番号はⅥ系である。

4．測点名は、設置年度とその年度の通し番号によって表現したものである。54－３とは、昭和54年度の第３番目に設置した基準点ということである。また、54－３－１とは、54－３から分れた基準点ということである。また、測点のＸは南北軸、Ｙは東西軸、Ｈは水準高を示す。

5．この基準点の使用にあたっては、長岡京市教育委員会に対して事前に承認を得ること。

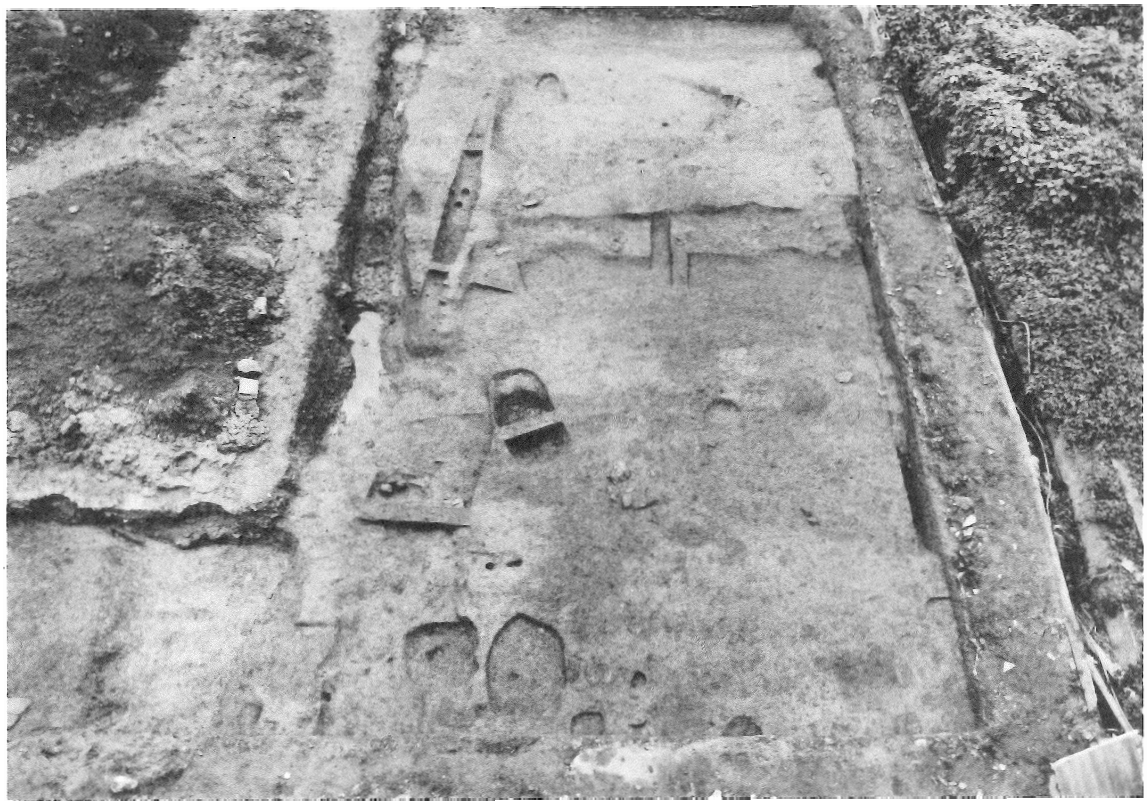


第38図　基準点細図（1／40000）

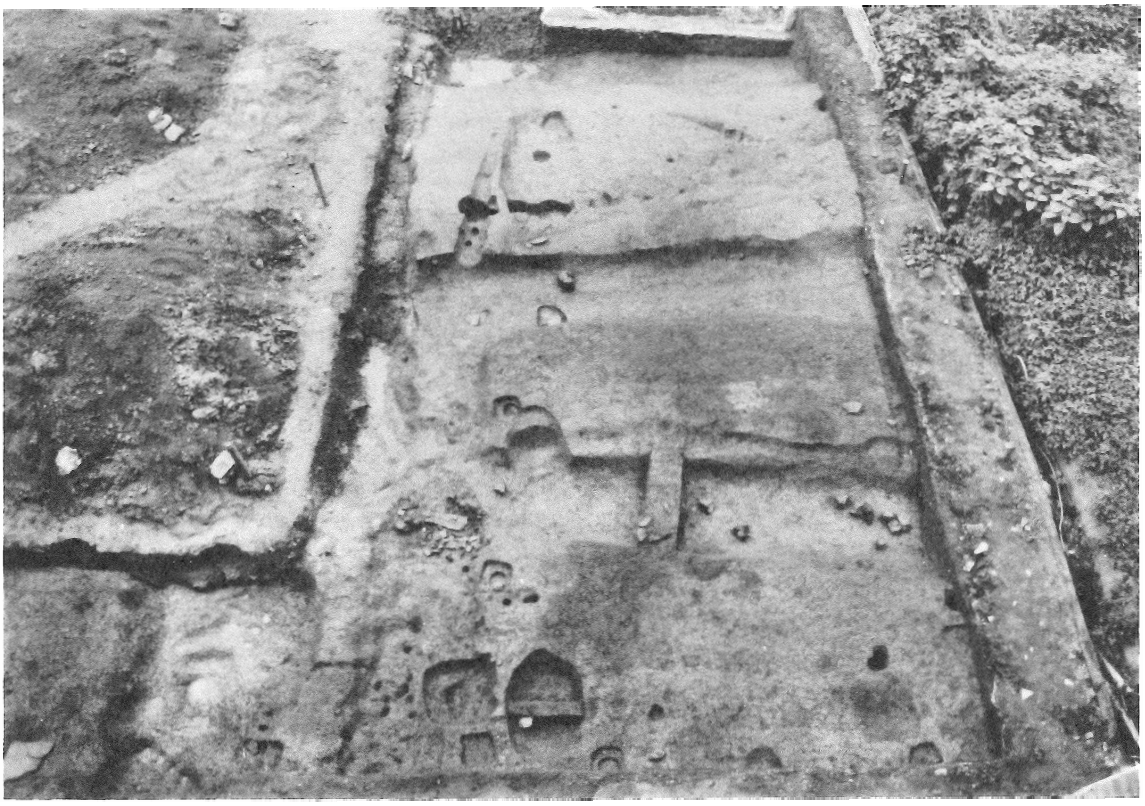
付表－3　基 準 点 成 果 表

点　名	X	Y	H	備　　考
No. 53－1	−119,373.880	− 27,557.426	42.103	長岡京市役所
54－1	−119,155.236	− 28,733.575	60.914	長法寺小学校
54－2	−120,336.804	− 27,873.293	40.906	長岡第四小学校
54－3	−119,984.164	− 28,820.400	55.358	長岡第五小学校
54-3-1	−120,102.718	− 28,808.121	40.898	
54－6	−120,617.349	− 27,277.506	32.538	長岡第三中学校
63－1	−119,645.886	− 29,165.932	64.219	長岡京市埋蔵文化財調査センター
63－2	−120,404.093	− 29,111.865	64.322	長岡第四中学校
63－3	−120,712.022	− 27,577.829	38.763	成安女子短期大学
63－4	−121,010.696	− 27,036.081	18.994	

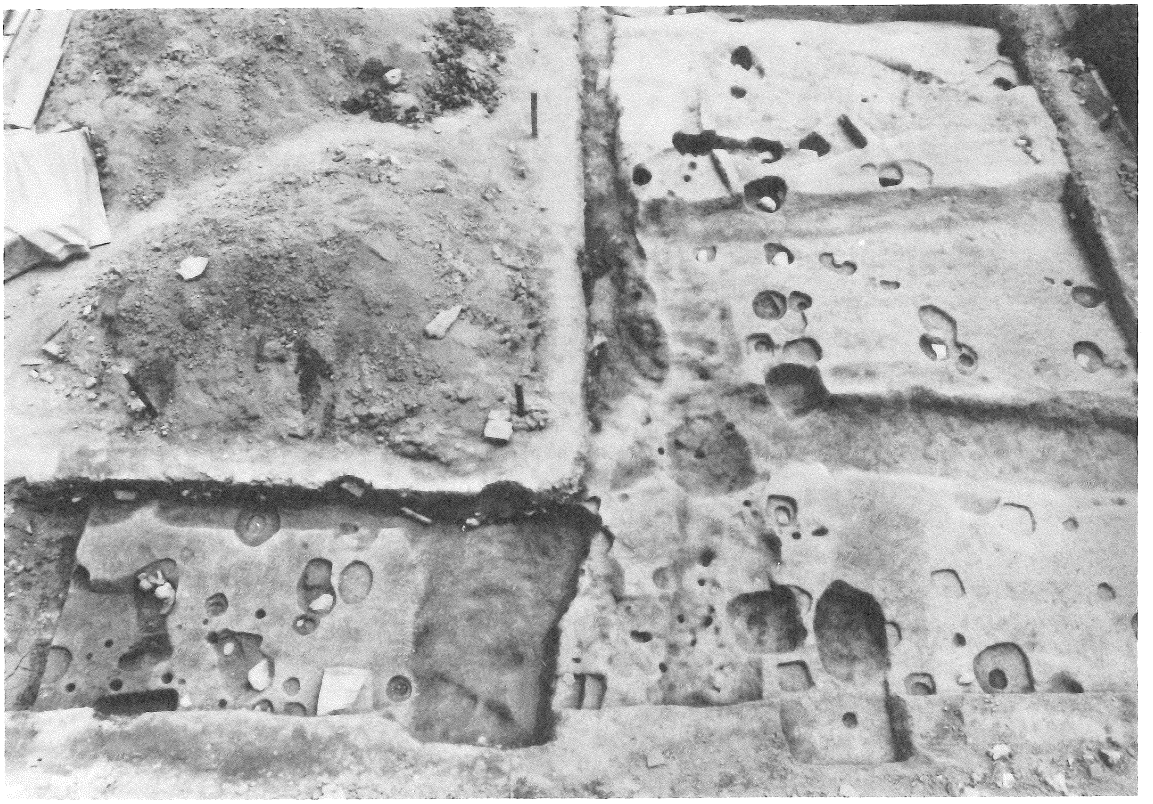
図　版



1　Ⅱ期の遺構－1（北から）



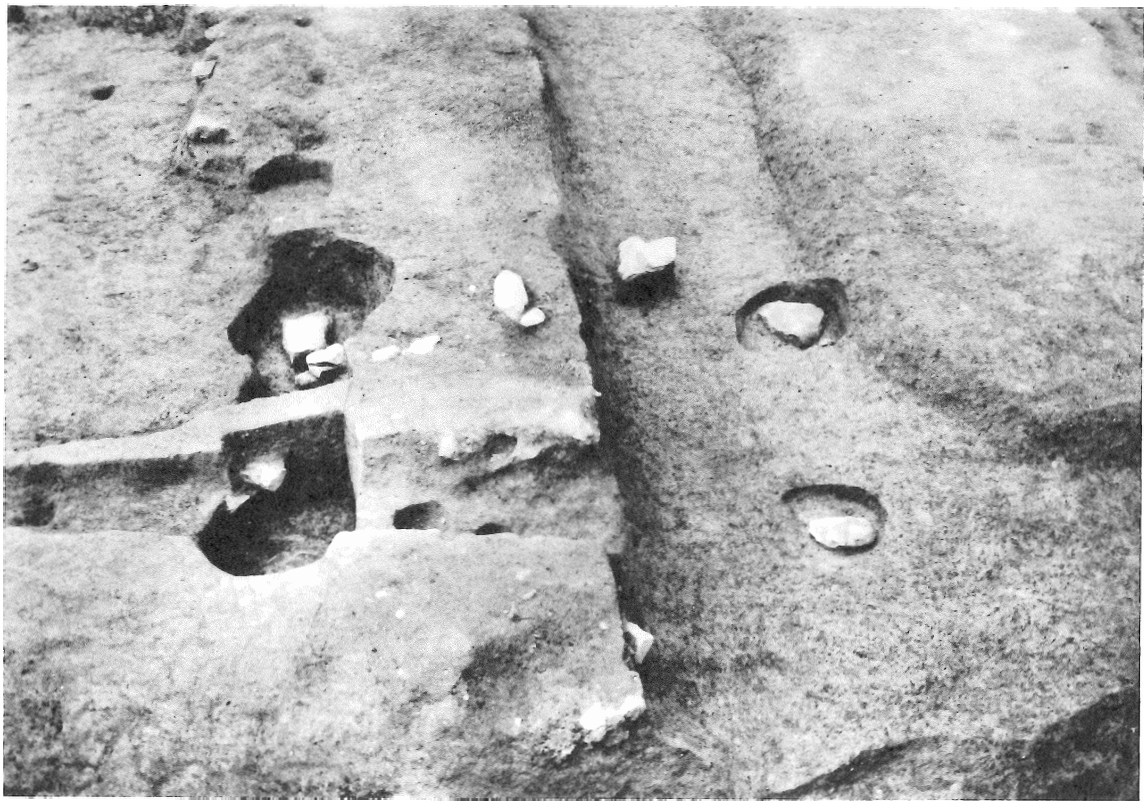
2　Ⅱ期の遺構－2（北から）



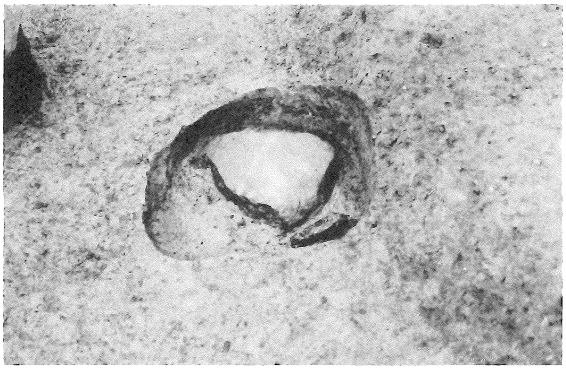
1　Ⅰ期の遺構（北から）

2　調査地全景（南から）

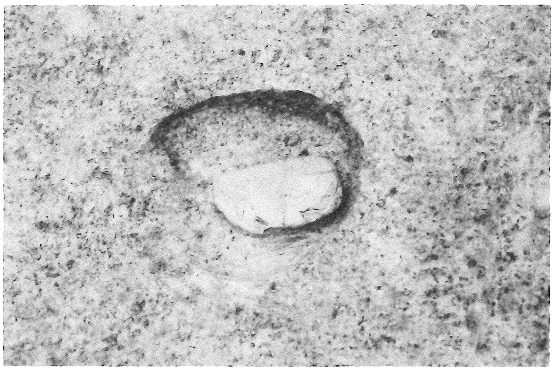
1　集石遺構ＳＸ31108（東から）



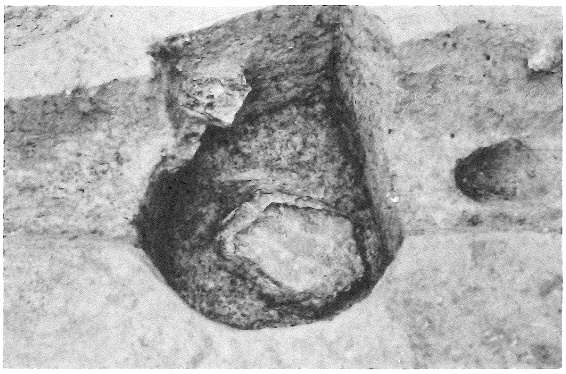
2　掘立柱建物ＳＢ31107（東から）



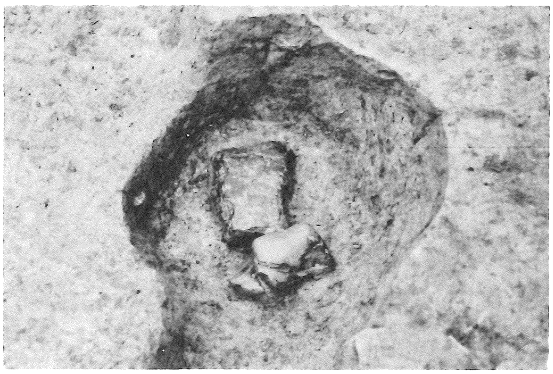
1　ＳＢ31107・Ｐ60



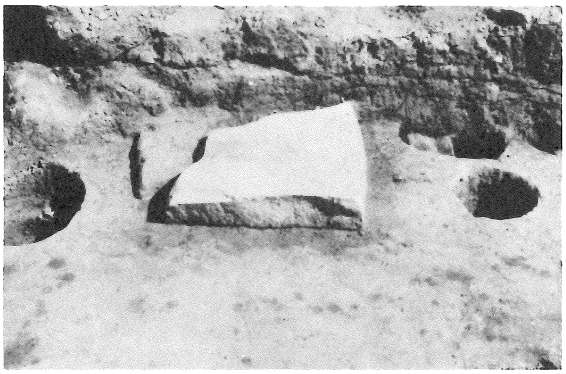
2　ＳＢ31107・Ｐ61



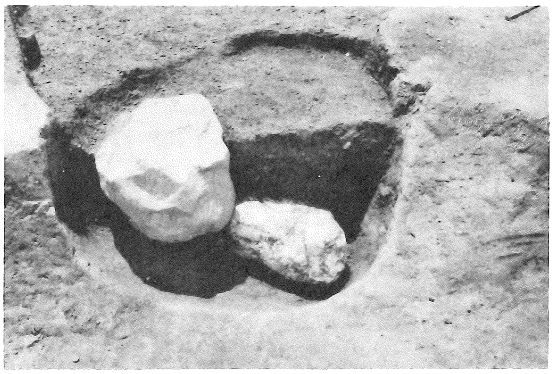
3　ＳＢ31107・Ｐ62



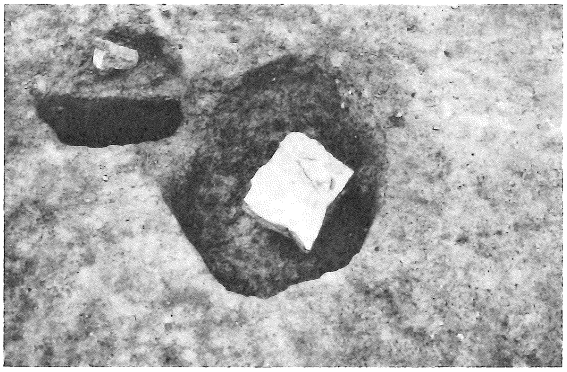
4　ＳＢ31107・Ｐ63



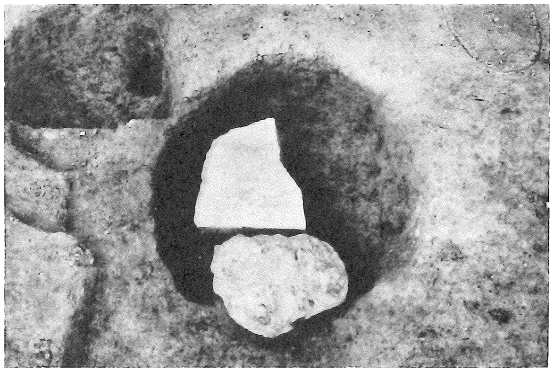
5　Ｐ66



6　Ｐ30



7　Ｐ34



8　Ｐ36

柱穴の根石

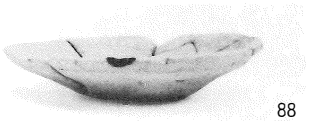
図版五

12

15

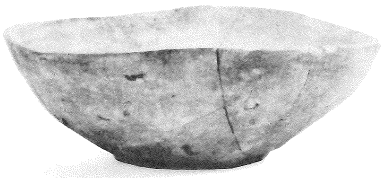
20

74


88

76

18


60

98

19

66

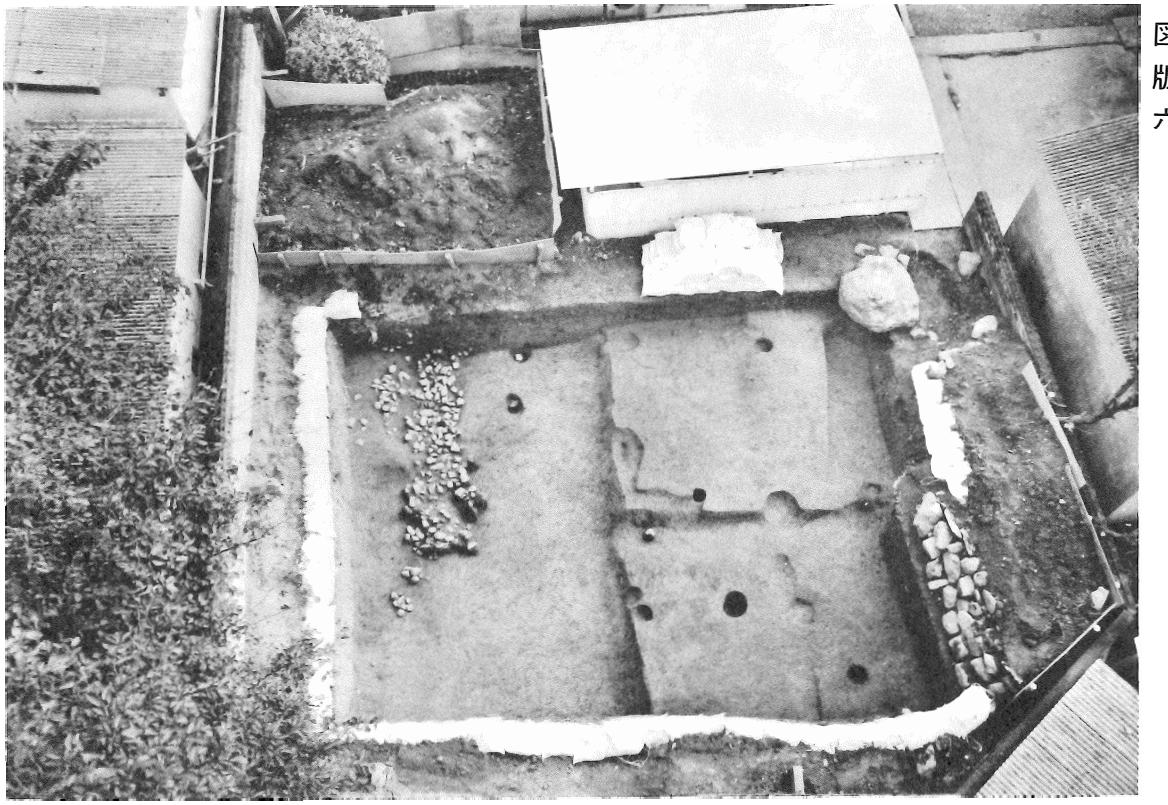
22

23

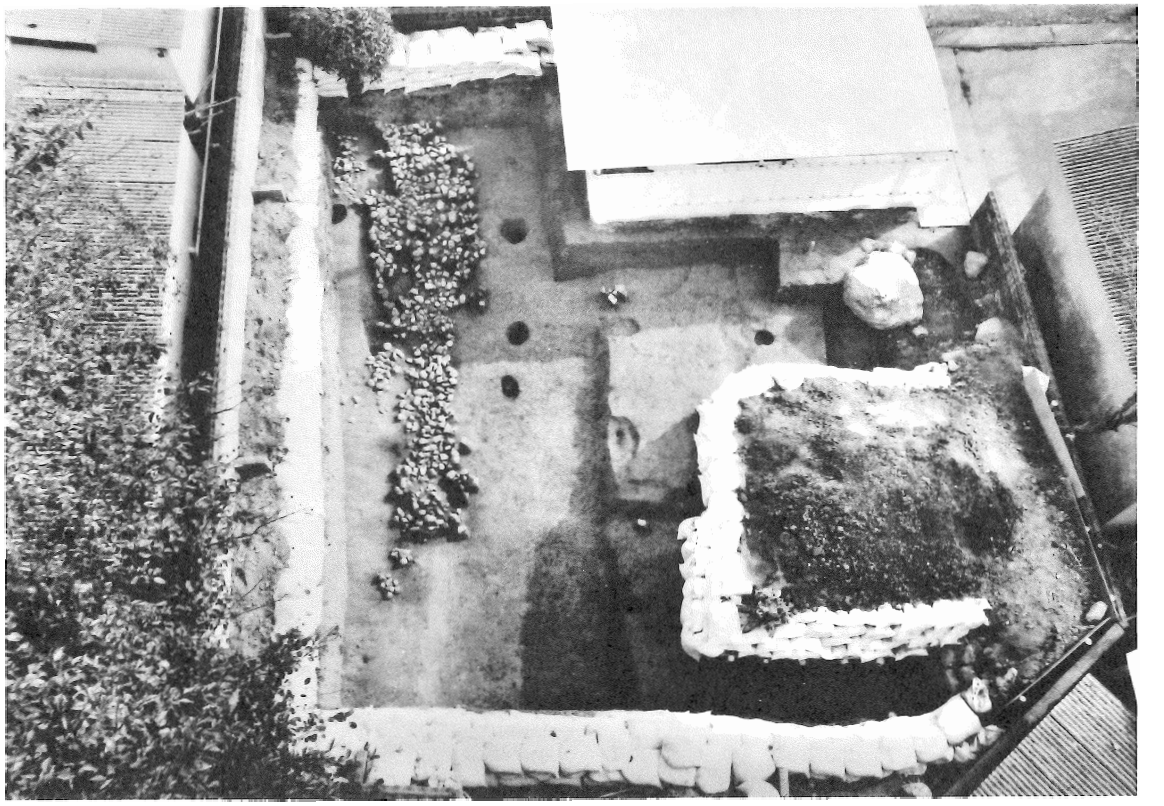
70

93

出土遺物

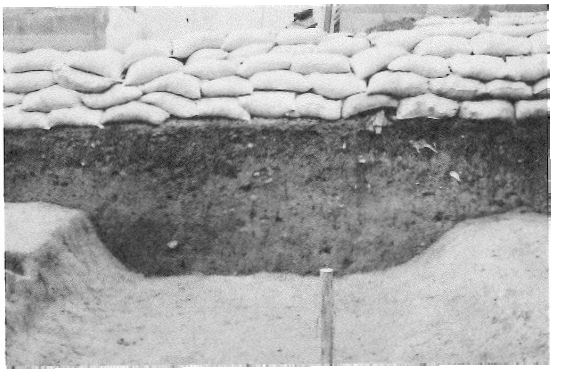


1　調査地全景（西から）

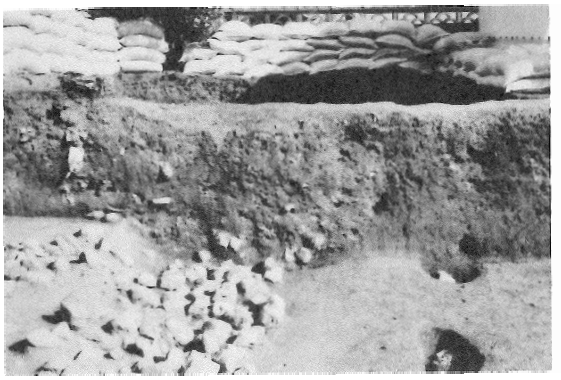


2　溝ＳＤ31801石溜り検出状況（西から）

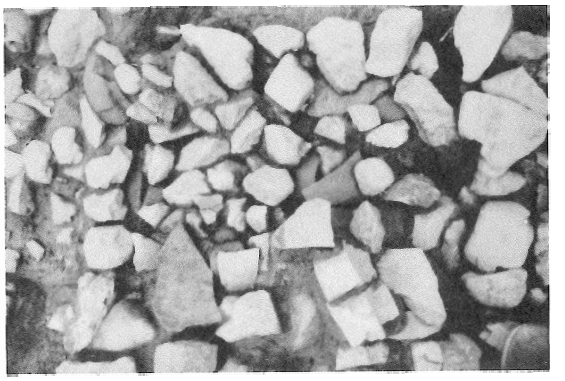
1　東壁断面（西から）



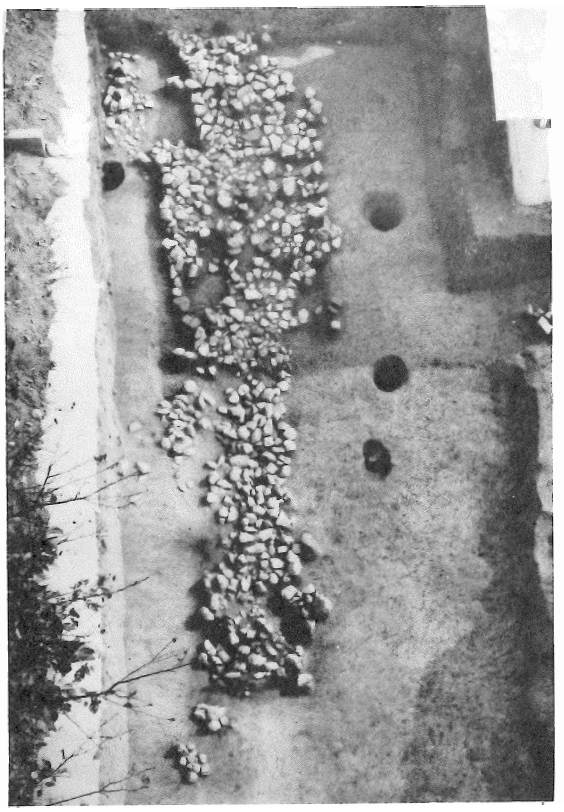
2　西壁断面（東から）



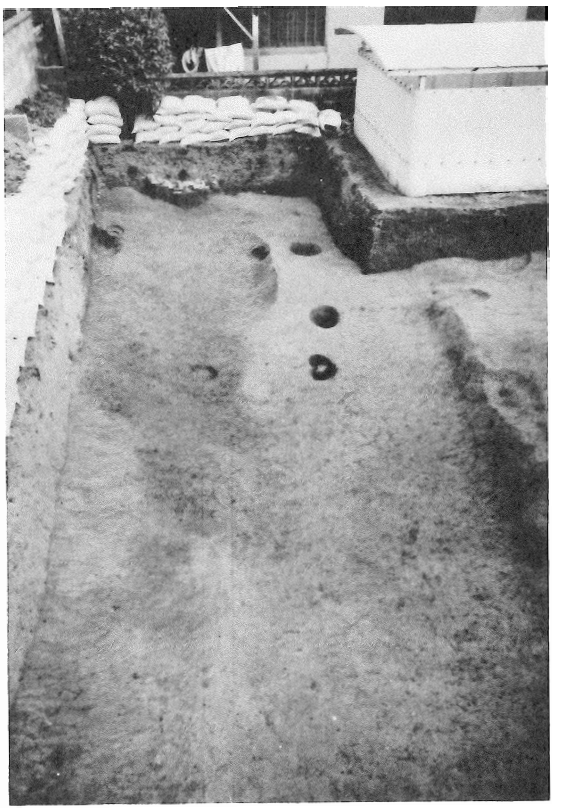
3　溝ＳＤ31801断面（西から）



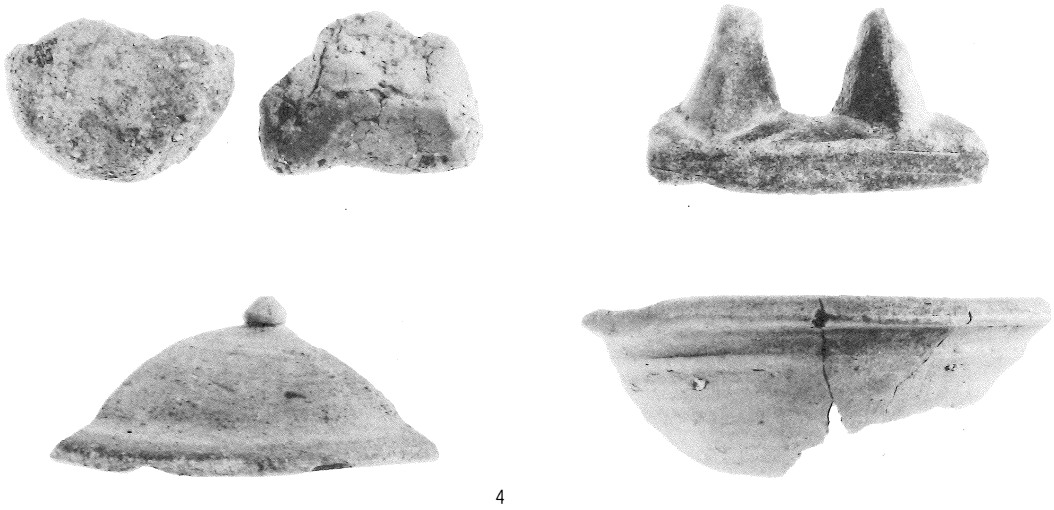
4　溝ＳＤ31801遺物出土状況



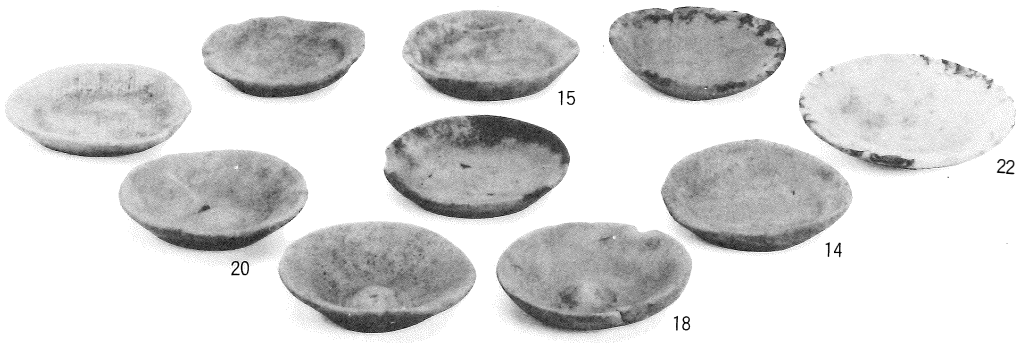
5　溝ＳＤ31801石溜り検出状況（西から）



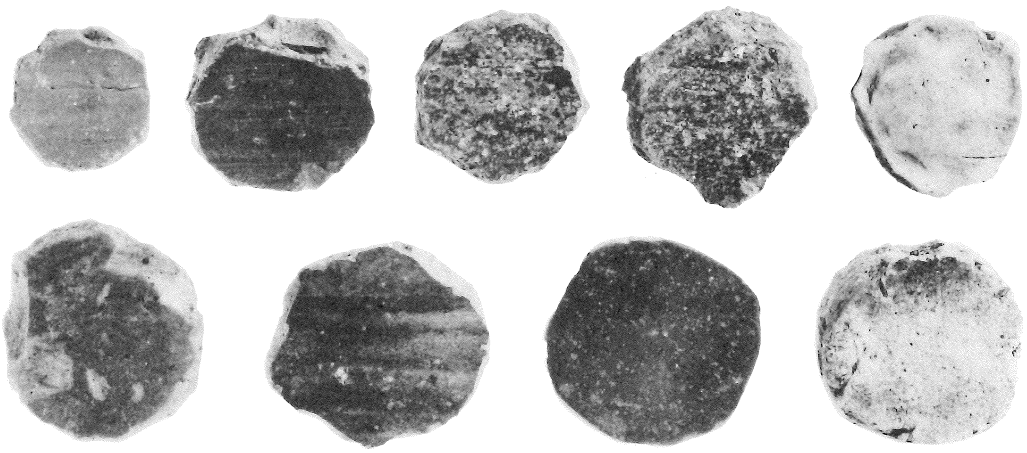
6　溝ＳＤ31801完掘状況（西から）



1　弥生土器，須恵器



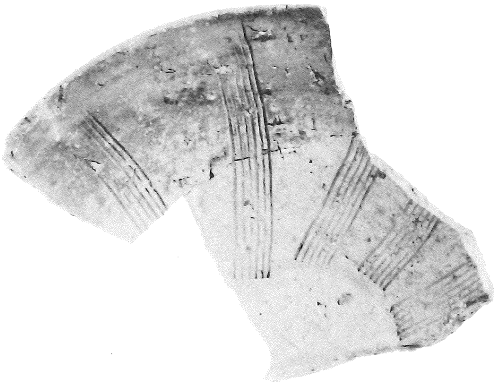
2　土師器皿



3　円　盤

36

52



51

61

1　陶　器

56

60

58

57

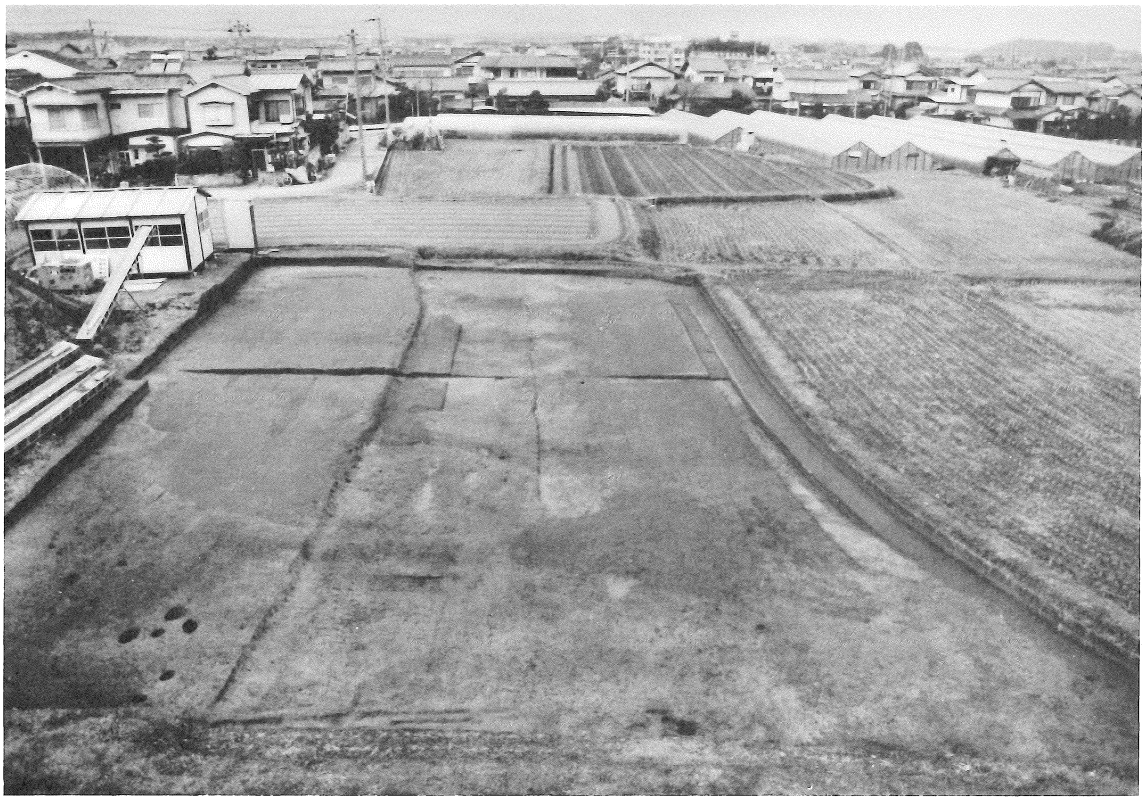
59

2　軒丸瓦・軒平瓦

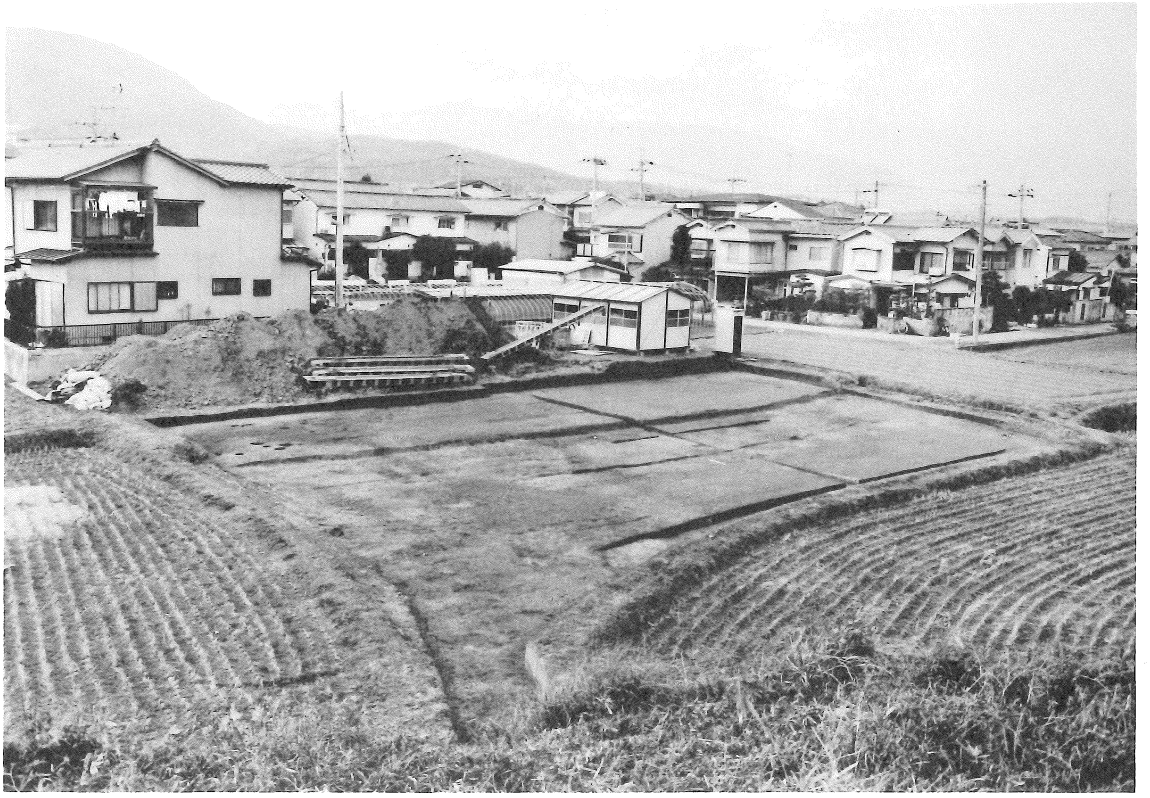
1　調査地周辺航空写真（1946年 米軍撮影　1/5000）

2　調査地周辺航空写真（1987年４月撮影　1/5000）

1　調査地および今里大塚古墳全景（北西から）

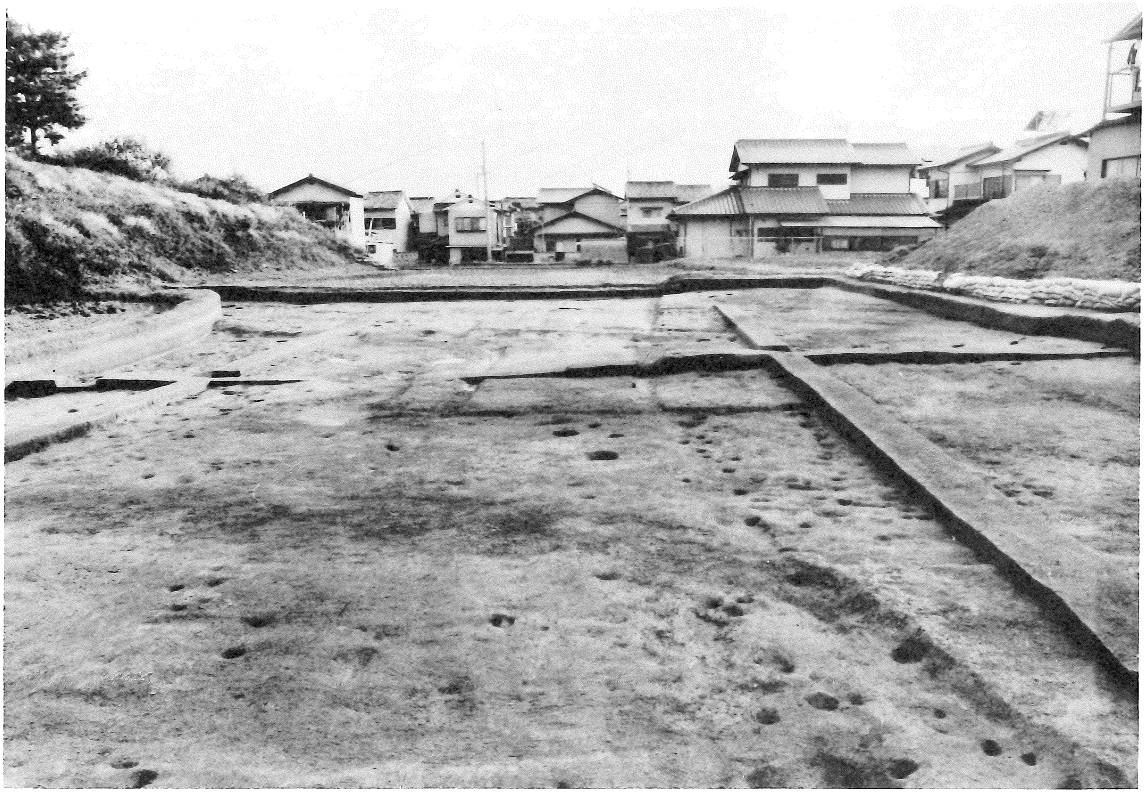


2　調査地全景（掘り上げ前　南から）



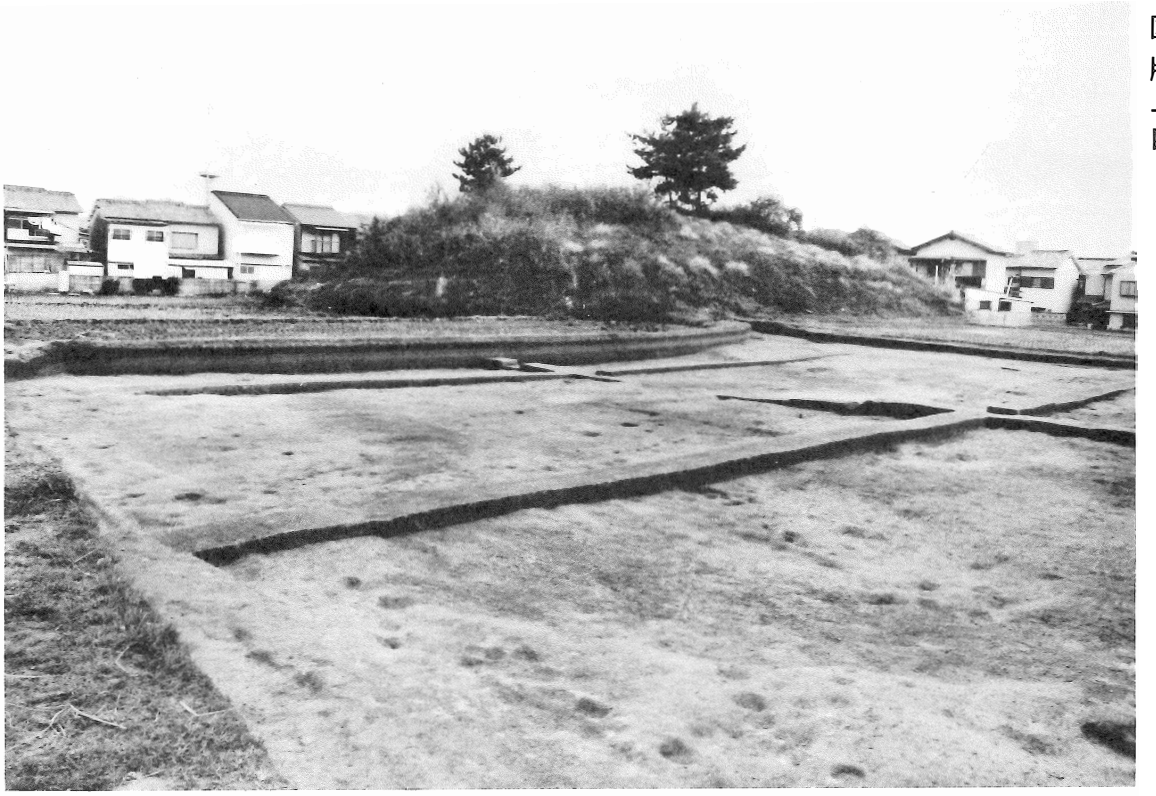
1　墳丘から見た調査地全景（掘り上げ前　南東から）

2　墳丘から見た調査地全景（掘り上げ後　南東から）

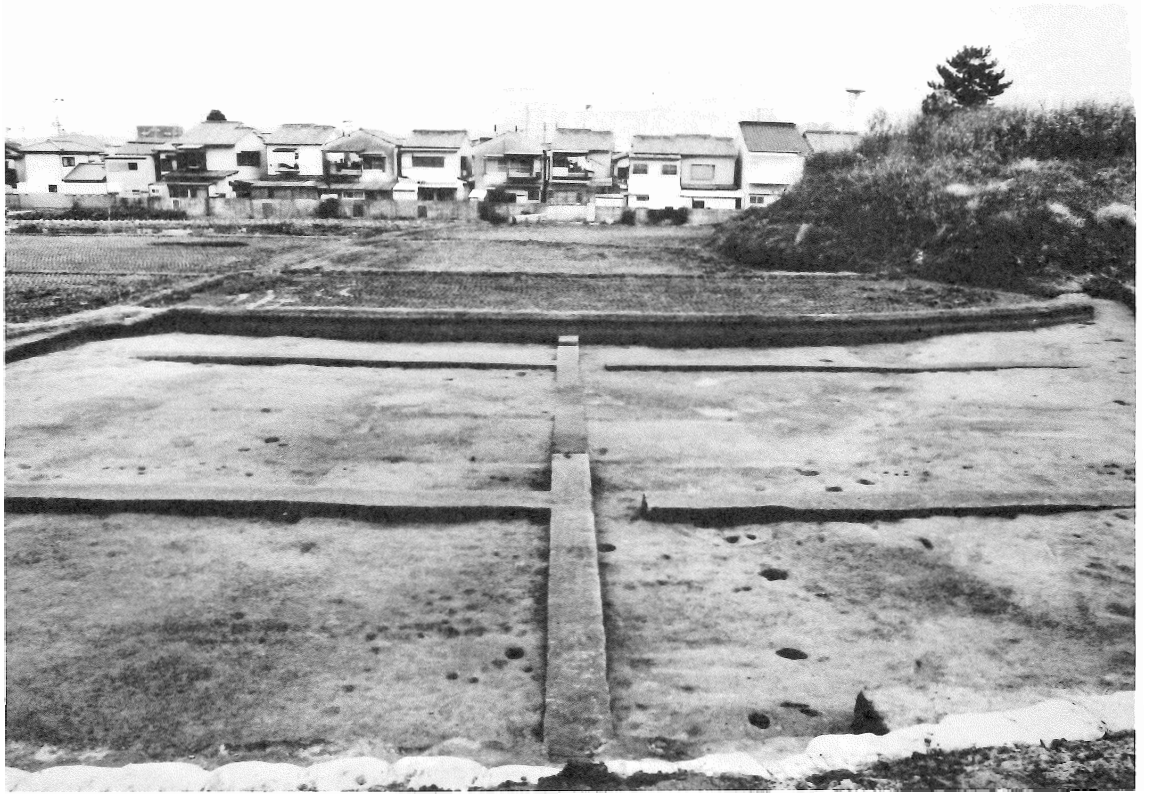


1　周濠掘り上げ状況（北から）

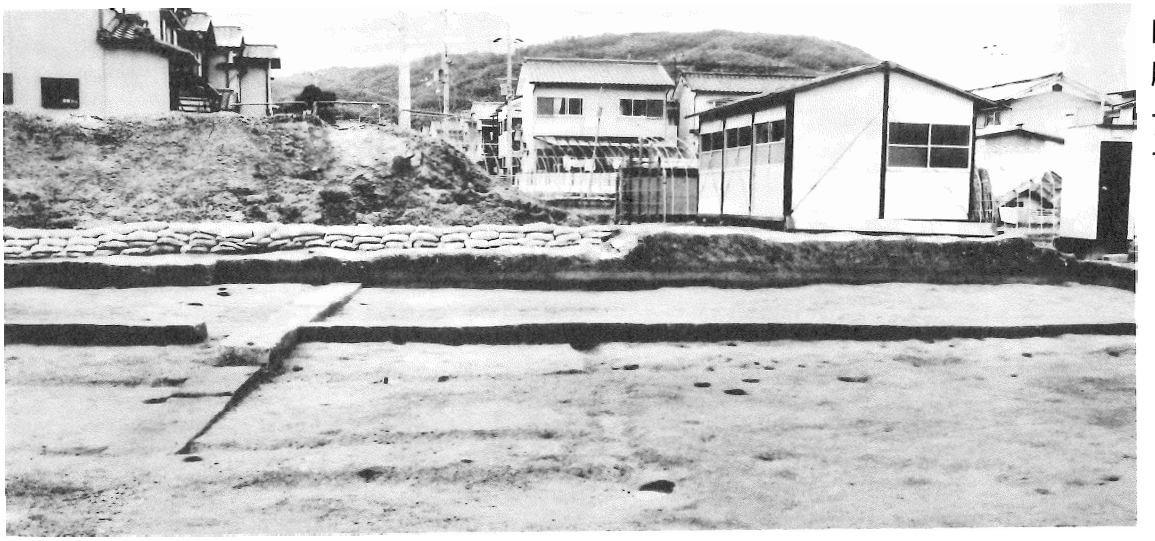
2　周濠掘り上げ状況（南から）



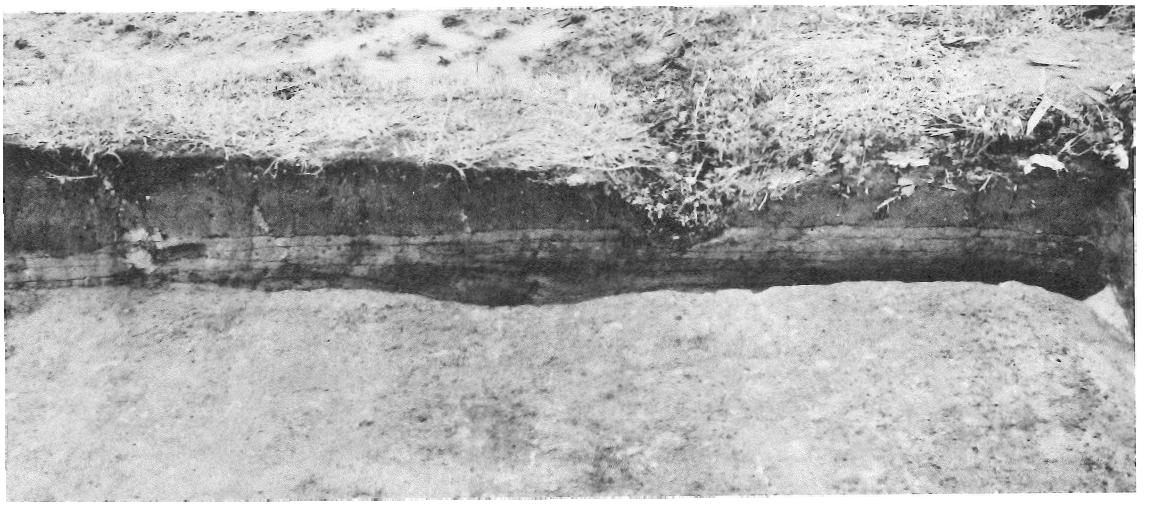
1　今里大塚古墳および周濠掘り上げ状況（北西から）



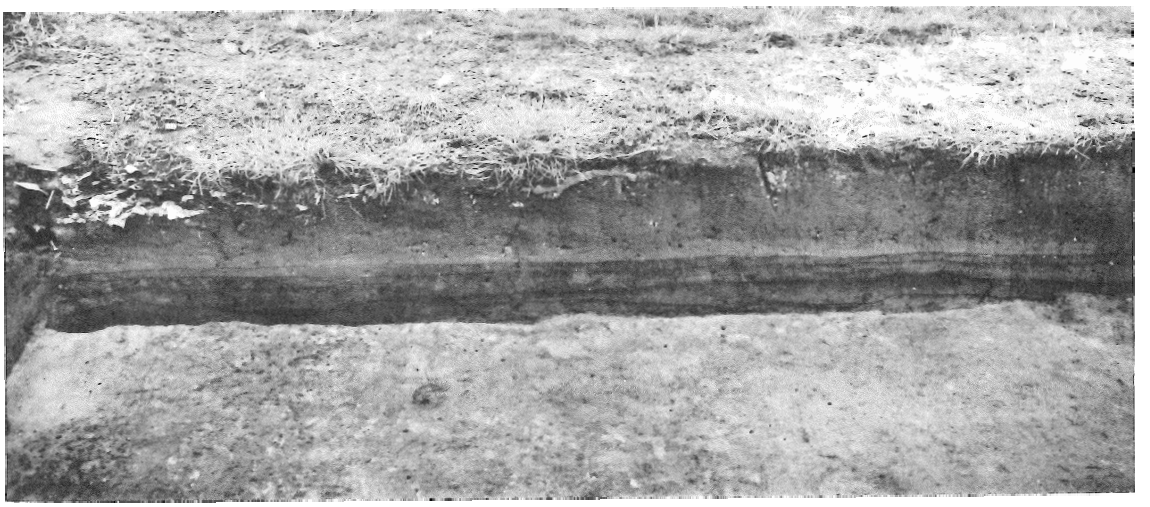
2　トレンチ東壁断面（西から）



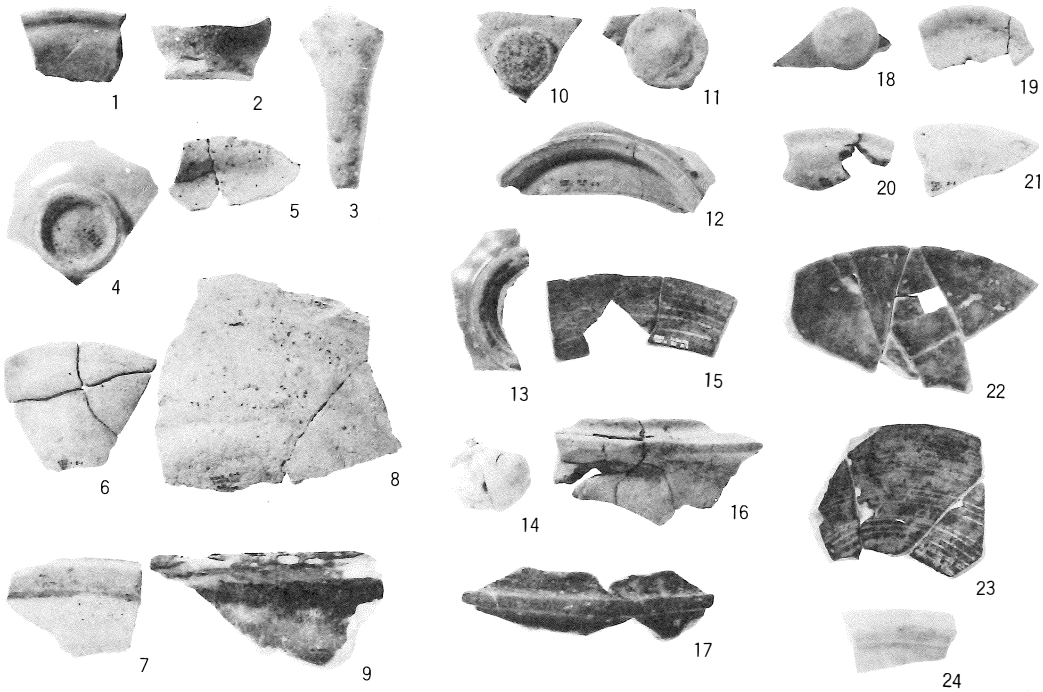
1　トレンチ西壁断面（東から）



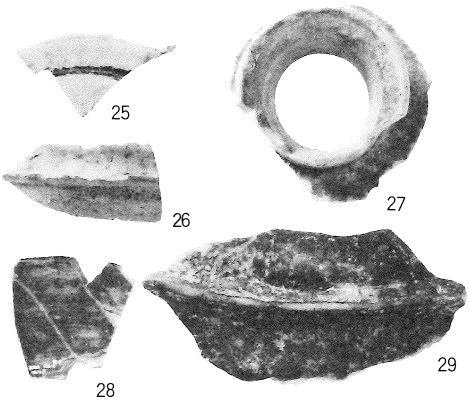
2　サブトレンチ北東断面（南西から）

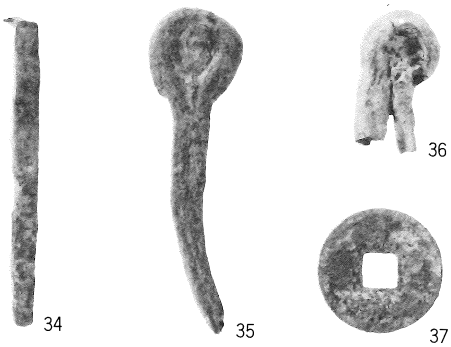


3　サブトレンチ南西断面（北東から）

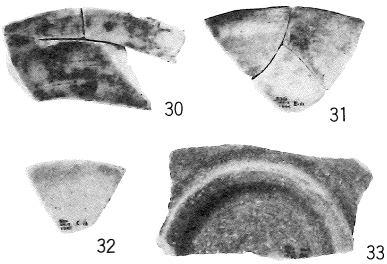


1　4・8・9層出土遺物（1～9：4層，10～17：8層，18～24：9層）

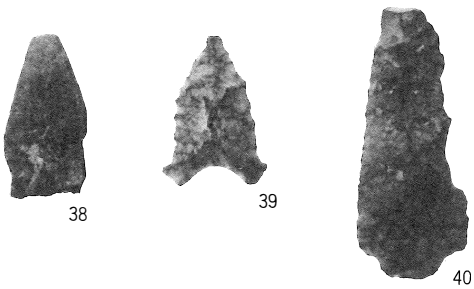




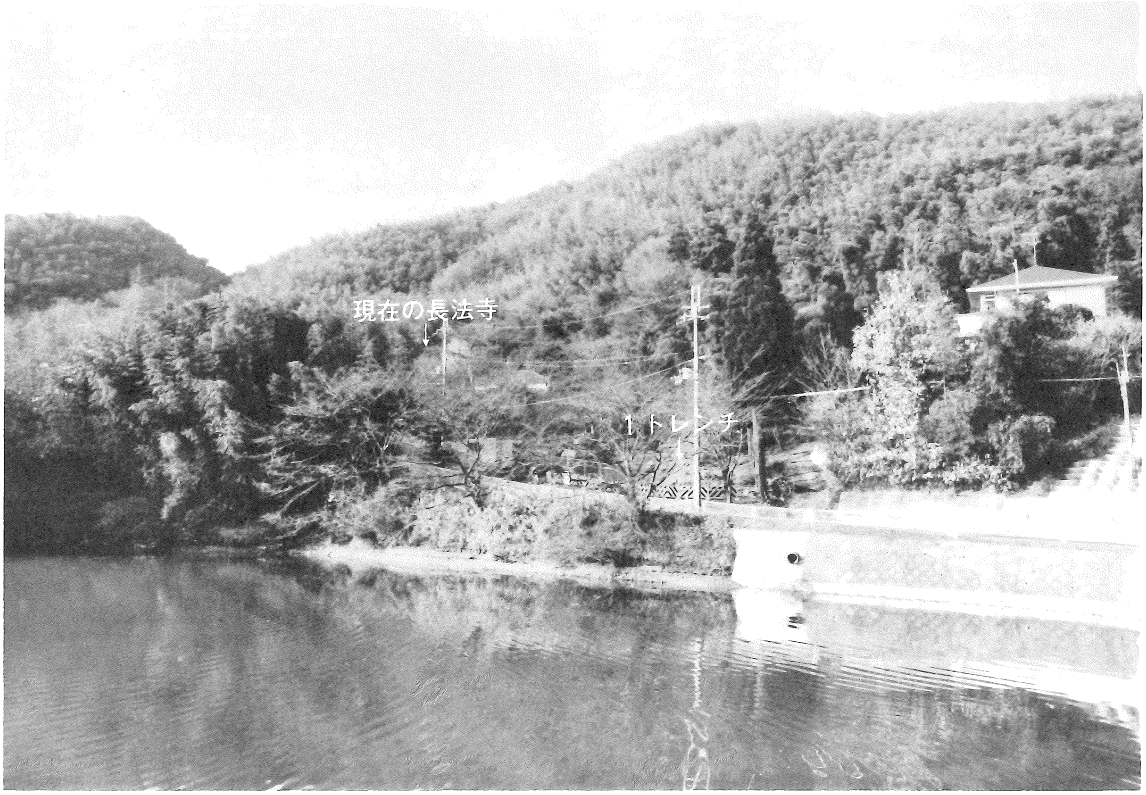
3　出土金属製品



2　10・25層出土遺物
（25～29：10層，30～33：25層）



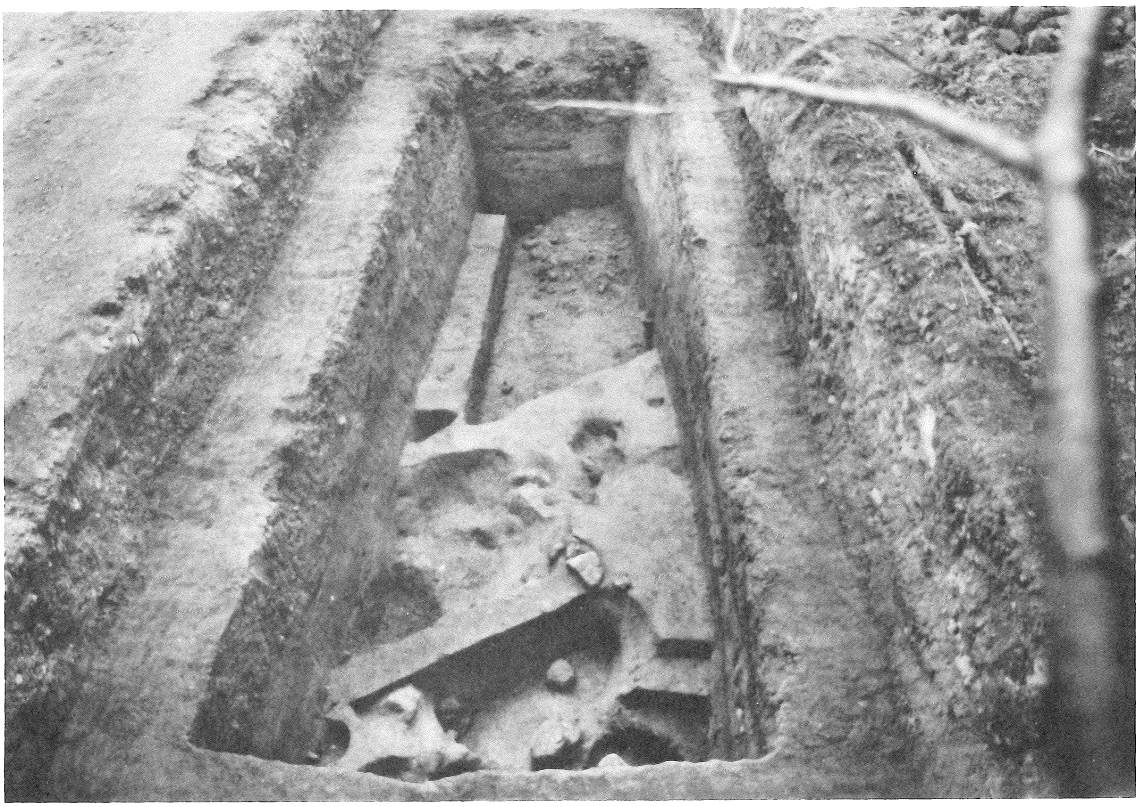
4　出土石製品



1　調査地遠景（東から）

2　現在の長法寺

1　1トレンチ全景（南西から）



2　1トレンチ全景（北東から）

1　２トレンチ全景（東から）

2　１トレンチ北東断面

1　１トレンチ南西断面北半

2　１トレンチ南西断面南半

1　トレンチ南東断面北半

2

8

5

17

16

18

19

20

2　出土遺物

長岡京市文化財調査報告書　第22冊

発　行　日　　平成元年３月31日

編集・発行　　長 岡 京 市 教 育 委 員 会

〒617 京都府長岡京市開田一丁目１番１号
電　話　075-951-2121

印　　刷　　ぎょうせい

〒530 大阪市北区天満２－７－17
電　話　06-352-2271